

くちさか(口賢)形(二) 口前かしこし、口巧者なり。くちさが(口性無)形(二) 悪しきまにいなす。くちぎたなし、「くち世間」。

くちづき(口附)名(一) 牛馬などの口を取りて置く(一)者、くちとり。くちづき(口付)名(一) くちなる、と。

くちね(口慣)名(一) くちなると、くちね(口慣)名(一) くちなると、くちね(口慣)名(一) くちなると。

くちば(口速)名(一) くちばと、くちば(口速)名(一) くちばと、くちば(口速)名(一) くちばと。

くちま(口前)名(一) いひより、はなれよりいひきはし、「くちま、男」。

くちわ(口吻)名(一) 口吻の、くちわ(口吻)名(一) 口吻の、くちわ(口吻)名(一) 口吻の。

くちばくちま

くちまくちち

くちちくちち

六七

くさうーくぬい

くさう「句讀」(名) 文章の中の一小區分の稱、讀は切りて讀む所にして、句は文章中の一段なり。
くさう「句讀點」(名) 句點と讀點と。
くさう「口説」(名) ①くどくとくどくとく言。
くさう「口説歌」(名) ①口説の文句のときに行ふより。
くさう「口説」(名) ①口説の文句のときに行ふより。
くさう「口説」(名) ①口説の文句のときに行ふより。

くならーくはつ

くなら「苦惱」(名) くるしみなやむと。なやむ。くるしみ「苦惱」。
くなら「かみ」(名) 道のちまたの神。
くなら「國」(名) 國家。
くなら「國」(名) 國家。
くなら「國」(名) 國家。
くなら「國」(名) 國家。

くにづーくにふ

くにづ「國語」(名) 昔時、大小名及武士の江戸に詰め居る江戸語といひしに對して、大小名は己の領地に武士は其主君の領地に居りしとの稱。
くにづ「もの」(名) 國津物。
くにづ「もの」(名) 國津物。
くにづ「もの」(名) 國津物。

くにみーくぬく

くにみ「國見」(名) 國の形を高さ處より見ると。
くにみ「國御魂」(名) 國を草創したる徳のある神。
くにみ「國御魂」(名) 國を草創したる徳のある神。
くにみ「國御魂」(名) 國を草創したる徳のある神。

くねりーくはが

くねり「曲」(名) くるしむと。
くねり「曲」(名) くるしむと。
くねり「曲」(名) くるしむと。
くねり「曲」(名) くるしむと。



くねり

くはくーくはす

くはく「桑」(名) 桑の木。
くはく「桑」(名) 桑の木。
くはく「桑」(名) 桑の木。
くはく「桑」(名) 桑の木。

くびつーくびの

くびつーくびの「頭引」(名) くびひきの説。「人、くひつふし」(食潰)(名) くひつぶすと、又其くひつふす「食潰」(他、三四) 報酬又は代價を拂はずして徒に食す。かせがず生活して資産を傾く。
くひつーくびの「食潰」(名) 瘞瘵かざり(瘡癩)口道の失す、もは活計を立つる能はず。
くひつーくびの「食潰」(名) 食ひつむると、又其人「食潰者」(名) 細口の路を失ひたる人。「食潰」(名) 「くびつむ」の誤。
くひつーくびの「食潰」(名) 食ふ人、又よく食ふ人。「食潰」(名) 食ひとむると、防むと。
くひつーくびの「食潰」(名) 食ひとむると、防むと。
くひつーくびの「食潰」(名) 食ひとむると、防むと。
くひつーくびの「食潰」(名) 食ひとむると、防むと。

くひはーくひれ

くひはーくひれの「首座」(名) 首の座。
くひはーくひれの「首座」(名) 首の座。
くひはーくひれの「首座」(名) 首の座。
くひはーくひれの「首座」(名) 首の座。
くひはーくひれの「首座」(名) 首の座。
くひはーくひれの「首座」(名) 首の座。
くひはーくひれの「首座」(名) 首の座。
くひはーくひれの「首座」(名) 首の座。

くひれーくふり

くひれーくふりの「食料」(名) 食用に供するもの。
くひれーくふりの「食料」(名) 食用に供するもの。
くひれーくふりの「食料」(名) 食用に供するもの。
くひれーくふりの「食料」(名) 食用に供するもの。
くひれーくふりの「食料」(名) 食用に供するもの。
くひれーくふりの「食料」(名) 食用に供するもの。
くひれーくふりの「食料」(名) 食用に供するもの。
くひれーくふりの「食料」(名) 食用に供するもの。

くふたーくぼま

くふたーくぼまの「愚夫愚婦」(名) 愚かなる男女、無教育なるもの。
くふたーくぼまの「愚夫愚婦」(名) 愚かなる男女、無教育なるもの。
くふたーくぼまの「愚夫愚婦」(名) 愚かなる男女、無教育なるもの。
くふたーくぼまの「愚夫愚婦」(名) 愚かなる男女、無教育なるもの。
くふたーくぼまの「愚夫愚婦」(名) 愚かなる男女、無教育なるもの。
くふたーくぼまの「愚夫愚婦」(名) 愚かなる男女、無教育なるもの。
くふたーくぼまの「愚夫愚婦」(名) 愚かなる男女、無教育なるもの。
くふたーくぼまの「愚夫愚婦」(名) 愚かなる男女、無教育なるもの。

くぼみーくぼま

くぼみーくぼまの「愚物」(名) 愚かなるもの。
くぼみーくぼまの「愚物」(名) 愚かなるもの。
くぼみーくぼまの「愚物」(名) 愚かなるもの。
くぼみーくぼまの「愚物」(名) 愚かなるもの。
くぼみーくぼまの「愚物」(名) 愚かなるもの。
くぼみーくぼまの「愚物」(名) 愚かなるもの。
くぼみーくぼまの「愚物」(名) 愚かなるもの。
くぼみーくぼまの「愚物」(名) 愚かなるもの。

くまーくまそ

くまーくま所の「熊」(名) 動物の異稱。
くまーくま所の「熊」(名) 動物の異稱。
くまーくま所の「熊」(名) 動物の異稱。
くまーくま所の「熊」(名) 動物の異稱。
くまーくま所の「熊」(名) 動物の異稱。
くまーくま所の「熊」(名) 動物の異稱。
くまーくま所の「熊」(名) 動物の異稱。
くまーくま所の「熊」(名) 動物の異稱。

くまたくまば



くまたか「熊鷹」(名) ●(動)猛禽類中たか科に属する鳥、普通鷹の鷹より大なる凡三倍許、嘴は強大にして上嘴鈎曲し鋭なり、性質極めて烈しく、狐、狸、兎などを捕(あ)まふ(角鷹) ●(性質の兇暴にして貪慾なるもの、稱「あま」)

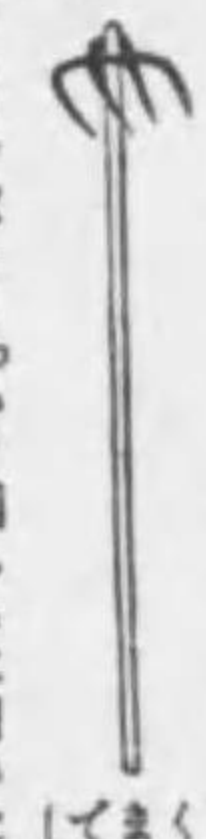
くまた「限路」(名) 限に同じ。

くまばち「熊手」(名) ●昔時の一種の武器、熊の爪の如き鋭爪を數個並べ附け、これに長き柄をすげたるもの、敵をひっかけ捕ふるに用ひたり。●武器のくまでと同じ形にて、多くは竹を曲げて造りたる具、蕎麥又は穀物などを播き寄するに用ふるもの。●東京の四の市に賣る竹製のくまで、これにおかめの面又は模造したる杵若しくは小判などを付けたるもの、一年中の福徳を獲(あ)まき寄する寓意なりといふ。

くまどり「暈取」(名) ●暈を取ると、ぼかし、さいき、(暈の「) ●(役者の顔の彩色)。「すくまどるは、くまどる」(暈取) (他、三四) くまどりをなすは、なまじり、(曲無(形、一) ●心へだてなし、くまどりのなす、かげなし。

くまのい「熊膽」(名) 熊の膽腑、味苦し、健胃劑として甚だ珍重せらる。ゆうたん。 「の古名、くまのい」

くまばち「熊蜂」(名) ●(動)頭部中胡蜂科に属



[くま]

くまら「熊胆」(名) 熊の膽腑、味苦し、健胃劑として甚だ珍重せらる。ゆうたん。 「の古名、くまのい」

くまばち「熊蜂」(名) ●(動)頭部中胡蜂科に属

くまびくまあ

くまび「我國に於ける蜂類中の最大なるものにて、全身黒褐色を帯び、頭部及腹部は黄色なり、樹液を吸收するもの多し、其毒烈し、大黃蜂、大胡蜂、くまびき、九萬正(名) (動) さいこの一名、くまびつり「熊祭」(名) 北海道土人の行ふ一種の祭、熊の子を捕へ、婦人の乳もてこれを養ひ、三年目に殺してこれを神に供(さ)ぐる。

くまわし「熊鷹」(名) ●(動) 鷹の一種、性質最も猛烈なり、尾は基部白く末端黒し、多く年数を經たるものは、頭より尾まで鼠色の斑點を生ず。

くまら「限路」(名) 限に同じ。

くまばち「熊手」(名) ●昔時の一種の武器、熊の爪の如き鋭爪を數個並べ附け、これに長き柄をすげたるもの、敵をひっかけ捕ふるに用ひたり。●武器のくまでと同じ形にて、多くは竹を曲げて造りたる具、蕎麥又は穀物などを播き寄するに用ふるもの。●東京の四の市に賣る竹製のくまで、これにおかめの面又は模造したる杵若しくは小判などを付けたるもの、一年中の福徳を獲(あ)まき寄する寓意なりといふ。

くみあーくみあ

くみあ「組上」(他) 「くみあ」の組。

くみあ「組上」(名) 水など汲みあぐると、くみあ。

くみあ「組上」(名) 水など汲みあぐると、くみあ。

くみあ「組上」(名) 水など汲みあぐると、くみあ。

くみあ「組上」(名) 水など汲みあぐると、くみあ。

くみあ「組上」(名) 水など汲みあぐると、くみあ。

くみあ「組上」(名) 水など汲みあぐると、くみあ。

くみあ「組上」(名) 水など汲みあぐると、くみあ。

くみあ「組上」(名) 水など汲みあぐると、くみあ。

くみあ「組上」(名) 水など汲みあぐると、くみあ。

くみあ「組上」(名) 水など汲みあぐると、くみあ。

くみいーくみあ

くみい「組入」(名) ●組入るは、くみい。其中に組入る。

くみい「組入」(名) ●組入るは、くみい。其中に組入る。

くみい「組入」(名) ●組入るは、くみい。其中に組入る。

くみい「組入」(名) ●組入るは、くみい。其中に組入る。

くみい「組入」(名) ●組入るは、くみい。其中に組入る。

くみすーくみ

くみす「組立」(名) ●組立は、くみす。其中に組立る。

くみす「組立」(名) ●組立は、くみす。其中に組立る。

くみす「組立」(名) ●組立は、くみす。其中に組立る。

くみす「組立」(名) ●組立は、くみす。其中に組立る。

くみす「組立」(名) ●組立は、くみす。其中に組立る。

くみひーくみ

くみひ「組入」(名) ●組入は、くみひ。其中に組入る。

くみひ「組入」(名) ●組入は、くみひ。其中に組入る。

くみひ「組入」(名) ●組入は、くみひ。其中に組入る。

くみひ「組入」(名) ●組入は、くみひ。其中に組入る。

くみひ「組入」(名) ●組入は、くみひ。其中に組入る。

くもーくもす

くもすーくもす 大内にあるかけ橋。①浪の城壁などへのりこむた
めの大いなるかけ橋。

くものす(蜘蛛) (名) くものい、蜘蛛網。
くものなみ(雲波) (名) 波の如きさまをなす雲。
くものしたで(雲旗手) (名) 雲の形の旗の
なびくが如く見ゆるもの。②雲のきはみ、雲のは
て。③「まてひさのぼるこ、ちするに」。

くものはら(雲原) (名) 雲のひろくたな引きわ
たりたるさまにいふ語。「にたとへいふ語」。

くものまがき(雲籠) (名) たな引く雲を籠(かご)
くものみなど(雲湊) (名) 雲のあつまり寄る
さまにいふ語。

くものみね(雲峯) (名) 夏の空に雲立ちて、峯
の如くに見ゆるもの。「たる語」。

くもはく(雲箔) (名) たな引く雲の如くにあき
くもはなれ(雲離) (名) ①遠くへ離る、と。②
くもひたひた(雲額) (名) 雲居にて用ふる一種
の雲(かぶ)。

くもま(雲間) (名) 雲の切れたるあひだ。②晴
くもみづ(雲水) (名) ①雲と水と。②行く方の
定まらざる、うんずる。

くもらは(雲) (名) ①雲。②曇。③曇り。
くもり(曇) (名) 雲の出づる、くもれ、雨ぐ
もり(陰) (名) 色又は光などのあはるとなる、(曇
の)。「うたがひ、謙疑、身のうがはれぬ」。「は
れ、せざる、又、うれひふさぐ、聲の」。「よ、曇
夜」(名) 空のくもれる夜。

くもす(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。
①用を含める雲の垂れて見ゆるもの。「うが下が
る」。「屈曲して雲の形をなす脚のある(雲)」。
くもす(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。
くもす(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。
くもす(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。

くもすーくもの

くもす(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。
くもす(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。
くもす(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。
くもす(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。

くものーくもり

くもの(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。
くもの(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。
くもの(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。
くもの(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。

くもるーくゆ

くもる(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。
くもる(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。
くもる(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。
くもる(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。

くゆーくらら

くゆ(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。
くゆ(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。
くゆ(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。
くゆ(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。

くららーくらく

くらら(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。
くらら(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。
くらら(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。
くらら(雲) (名) 雲の形をなす脚のある(雲)。

くるまーくるみ

後者これに代り、循環して敵に攻め掛かると。
がへし「車返」(名)「種」に「きり」が「つ」の一名。
「車座」(名) 多人数が輪の如くに圓形を

くるみーぐるり

渡に似て大きく、夏の頃、紅白色の細花を開く、果實
は桃に似て核堅し、仁は料理又は菓子などに用ふ。
(葉桃) いろ「胡桃色」(名) 胡桃の核に

ぐるりーぐるい

(名)を一つに出だしたるもの。
ぐるり「轉」(名)「副」に「る」に同じ。
ぐるる「福」(名)「戸」を開閉するために設置した

くるまーくるみ

(く)「れ」の「苦」(名)「種」に「つ」が「た」の一名。
グレイ「(名)「ア」が「イ」の一名。
単位、〇〇六四五に當り、又、〇〇一七二八

くるまーくるみ

クル「は」は「り」(名)「種」に「つ」が「た」の一名。
クル「は」は「り」(名)「種」に「つ」が「た」の一名。
クル「は」は「り」(名)「種」に「つ」が「た」の一名。

くるまーくるみ

クル「は」は「り」(名)「種」に「つ」が「た」の一名。
クル「は」は「り」(名)「種」に「つ」が「た」の一名。
クル「は」は「り」(名)「種」に「つ」が「た」の一名。

くわいーくわい

くわいけい「外形」(名) うはべのかたち、もとくわいけいのはち(會稽恥) (名) 支那の趙王勾踐が吳王夫差のために敗れて、會稽山に圍まれし故事に出づ。深く心に銘して忘るゝ能はざる恥辱に比ぶ語。

くわいーくわい

くわいけい「外形」(名) うはべのかたち、もとくわいけいのはち(會稽恥) (名) 支那の趙王勾踐が吳王夫差のために敗れて、會稽山に圍まれし故事に出づ。深く心に銘して忘るゝ能はざる恥辱に比ぶ語。

くわいーくわい

くわいけい「外形」(名) うはべのかたち、もとくわいけいのはち(會稽恥) (名) 支那の趙王勾踐が吳王夫差のために敗れて、會稽山に圍まれし故事に出づ。深く心に銘して忘るゝ能はざる恥辱に比ぶ語。

くわいーくわい

くわいけい「外形」(名) うはべのかたち、もとくわいけいのはち(會稽恥) (名) 支那の趙王勾踐が吳王夫差のために敗れて、會稽山に圍まれし故事に出づ。深く心に銘して忘るゝ能はざる恥辱に比ぶ語。

くわいーくわい

くわいけい「外形」(名) うはべのかたち、もとくわいけいのはち(會稽恥) (名) 支那の趙王勾踐が吳王夫差のために敗れて、會稽山に圍まれし故事に出づ。深く心に銘して忘るゝ能はざる恥辱に比ぶ語。

くわいーくわい

くわいけい「外形」(名) うはべのかたち、もとくわいけいのはち(會稽恥) (名) 支那の趙王勾踐が吳王夫差のために敗れて、會稽山に圍まれし故事に出づ。深く心に銘して忘るゝ能はざる恥辱に比ぶ語。

くわいーくわち

くわいれき「回曆」(名) 一年の循環してめぐりくると、年立返り改まること。
くわいろう「懷爐」(名) 胸腹などを温むる具。銅又は鐵製にして、製したる小き箱にして、くわいの灰を入れ、火を付け、密閉して懐中するもの。
くわいろうく「回祿」(名) 支那にて、火の神の名。
くわいわ「會話」(名) 相會して話すと。
くわいわらふ「外王父」(名) 母方の祖父。
くわいわらぼ「外王母」(名) 母方の祖母。
くわいゐる「魁偉」(名) からだの人なみなすくたれて、加はれる人。
くわいゐるん「會員」(名) 會を組織する人。會に加入せしむること。
くわいゐん「外援」(名) はかよりのたすけ。他よりの上せい。
くわいを「穢汚」(名) 上ごれ、けがれ。
くわいを「皇」(名) 天子。君王。
くわいを「皇」(名) 支那の古代に、五采の羽を持って行ひし舞。
くわいを「皇」(名) 支那の古代に、五采の羽を持って行ひし舞。
くわいを「皇」(名) 支那の古代に、五采の羽を持って行ひし舞。
くわいを「皇」(名) 支那の古代に、五采の羽を持って行ひし舞。

くわちーくわち

くわちいんつ「荒逸」(名) 前條に同じ。
くわちいんつ「光陰」(名) ひま、とき。
くわちいんつ「皇胤」(名) 天子の血統。又、其血胤をうけつぎたまふ方。
くわちいんつ「皇胤」(名) 天子の血統。又、其血胤をうけつぎたまふ方。
くわちいんつ「皇胤」(名) 天子の血統。又、其血胤をうけつぎたまふ方。
くわちいんつ「皇胤」(名) 天子の血統。又、其血胤をうけつぎたまふ方。

くわちーくわち

くわちいんつ「皇胤」(名) 天子の血統。又、其血胤をうけつぎたまふ方。
くわちいんつ「皇胤」(名) 天子の血統。又、其血胤をうけつぎたまふ方。
くわちいんつ「皇胤」(名) 天子の血統。又、其血胤をうけつぎたまふ方。
くわちいんつ「皇胤」(名) 天子の血統。又、其血胤をうけつぎたまふ方。

くわちーくわち

くわちいんつ「皇胤」(名) 天子の血統。又、其血胤をうけつぎたまふ方。
くわちいんつ「皇胤」(名) 天子の血統。又、其血胤をうけつぎたまふ方。
くわちいんつ「皇胤」(名) 天子の血統。又、其血胤をうけつぎたまふ方。
くわちいんつ「皇胤」(名) 天子の血統。又、其血胤をうけつぎたまふ方。

くわちーくわち

くわちいんつ「皇胤」(名) 天子の血統。又、其血胤をうけつぎたまふ方。
くわちいんつ「皇胤」(名) 天子の血統。又、其血胤をうけつぎたまふ方。
くわちいんつ「皇胤」(名) 天子の血統。又、其血胤をうけつぎたまふ方。
くわちいんつ「皇胤」(名) 天子の血統。又、其血胤をうけつぎたまふ方。

くわちーくわち

くわちいんつ「皇胤」(名) 天子の血統。又、其血胤をうけつぎたまふ方。
くわちいんつ「皇胤」(名) 天子の血統。又、其血胤をうけつぎたまふ方。
くわちいんつ「皇胤」(名) 天子の血統。又、其血胤をうけつぎたまふ方。
くわちいんつ「皇胤」(名) 天子の血統。又、其血胤をうけつぎたまふ方。

くわりーくわり

上に立つもの。——ハ(皇室費)(名) 國家の歳出の中、皇室の費用にあつる額の稱。
(くわり)おつ(噴日)(名) 物事の延引して空しく日を過ごすと。——ひさり(噴日漸久)(名) 物事のながびきひまどると。
(くわり)おや(皇土)(名) 時の天皇を申し、(くわり)おや(皇土)(名) 天子のまします。——
(くわり)おや(皇土)(名) 天子のまします。——
(くわり)おや(皇土)(名) 天子のまします。——
(くわり)おや(皇土)(名) 天子のまします。——
(くわり)おや(皇土)(名) 天子のまします。——

くわりーくわり

守らるゝとて、他の不淨のはうきと區別して名づく。——まつ(荒神松)(名) 荒神に奉る松の枝、米の粉などを纏りたるもの。
(くわり)せん(黄泉)(名) 交那にて、天は玄、地は黄といふより出づ。——地の最下層。——
(くわり)せん(光線)(名) あり。ひかり。——
(くわり)せん(黄泉)(名) 交那にて、天は玄、地は黄といふより出づ。——地の最下層。——
(くわり)せん(光線)(名) あり。ひかり。——
(くわり)せん(黄泉)(名) 交那にて、天は玄、地は黄といふより出づ。——地の最下層。——
(くわり)せん(光線)(名) あり。ひかり。——

くわりーくわり

會計を掌る所。——あよく(皇太后宮職)(名) 前條に同じ。——たいふ(皇太后宮太夫)(名) 皇太后宮職の長、職務を總理し職員を監督するものにして、親任官待遇なり。
(くわり)たい(皇太子)(名) 現代の天皇につぎて皇位を繼承したまふ方と定められる皇子。
(くわり)たい(皇太子)(名) 現代の天皇につぎて皇位を繼承したまふ方と定められる皇子。
(くわり)たい(皇太子)(名) 現代の天皇につぎて皇位を繼承したまふ方と定められる皇子。
(くわり)たい(皇太子)(名) 現代の天皇につぎて皇位を繼承したまふ方と定められる皇子。
(くわり)たい(皇太子)(名) 現代の天皇につぎて皇位を繼承したまふ方と定められる皇子。
(くわり)たい(皇太子)(名) 現代の天皇につぎて皇位を繼承したまふ方と定められる皇子。

くわりーくわり

(くわり)ちよ(皇女)(名) 天皇の御女(内親王)。
(くわり)ちん(轟沈)(名) 艦船を砲撃して沈むこと。又、艦船が爆発にかゝりて沈むこと。
(くわり)ちん(轟沈)(名) 艦船を砲撃して沈むこと。又、艦船が爆発にかゝりて沈むこと。
(くわり)ちん(轟沈)(名) 艦船を砲撃して沈むこと。又、艦船が爆発にかゝりて沈むこと。
(くわり)ちん(轟沈)(名) 艦船を砲撃して沈むこと。又、艦船が爆発にかゝりて沈むこと。
(くわり)ちん(轟沈)(名) 艦船を砲撃して沈むこと。又、艦船が爆発にかゝりて沈むこと。

くわりーくわり

しある部、皇宮の御系圖。
(くわり)ど(銅)(名) 黄銅鑛(名) 鑛銅。鑛中主要なる鑛物色は黄金に似る結晶は微小概ね網状又は手鏡状の集合をなして鑛賦を成す。
(くわり)ど(銅)(名) 黄銅鑛(名) 鑛銅。鑛中主要なる鑛物色は黄金に似る結晶は微小概ね網状又は手鏡状の集合をなして鑛賦を成す。
(くわり)ど(銅)(名) 黄銅鑛(名) 鑛銅。鑛中主要なる鑛物色は黄金に似る結晶は微小概ね網状又は手鏡状の集合をなして鑛賦を成す。
(くわり)ど(銅)(名) 黄銅鑛(名) 鑛銅。鑛中主要なる鑛物色は黄金に似る結晶は微小概ね網状又は手鏡状の集合をなして鑛賦を成す。
(くわり)ど(銅)(名) 黄銅鑛(名) 鑛銅。鑛中主要なる鑛物色は黄金に似る結晶は微小概ね網状又は手鏡状の集合をなして鑛賦を成す。
(くわり)ど(銅)(名) 黄銅鑛(名) 鑛銅。鑛中主要なる鑛物色は黄金に似る結晶は微小概ね網状又は手鏡状の集合をなして鑛賦を成す。

くわりーくわり

物事に執着せずして胸中に煩悶苦痛を止めず、語々語々として快活なる状態にいふ語。
(くわり)ど(銅)(名) 黄銅鑛(名) 鑛銅。鑛中主要なる鑛物色は黄金に似る結晶は微小概ね網状又は手鏡状の集合をなして鑛賦を成す。
(くわり)ど(銅)(名) 黄銅鑛(名) 鑛銅。鑛中主要なる鑛物色は黄金に似る結晶は微小概ね網状又は手鏡状の集合をなして鑛賦を成す。
(くわり)ど(銅)(名) 黄銅鑛(名) 鑛銅。鑛中主要なる鑛物色は黄金に似る結晶は微小概ね網状又は手鏡状の集合をなして鑛賦を成す。
(くわり)ど(銅)(名) 黄銅鑛(名) 鑛銅。鑛中主要なる鑛物色は黄金に似る結晶は微小概ね網状又は手鏡状の集合をなして鑛賦を成す。
(くわり)ど(銅)(名) 黄銅鑛(名) 鑛銅。鑛中主要なる鑛物色は黄金に似る結晶は微小概ね網状又は手鏡状の集合をなして鑛賦を成す。
(くわり)ど(銅)(名) 黄銅鑛(名) 鑛銅。鑛中主要なる鑛物色は黄金に似る結晶は微小概ね網状又は手鏡状の集合をなして鑛賦を成す。

くわくくわく

に上りて索引するやうに編纂すると、又、其字書
くわくくわく(名)「コレラ病の一種吐瀉
はげし、多くは夏日飲食より起る。

くわこくわこ

くわこくわこ(名)「火山の噴火口。
くわこくわこ(名)「火山の中央なる火口
くわこくわこ(名)「火山の低地。

くわさくわさ

くわさくわさ(名)「地中の水蒸気又は硫
くわさくわさ(名)「火山の噴出する山
くわさくわさ(名)「火山の噴出する山
くわさくわさ(名)「火山の噴出する山

くわあくわあ

(名)「蘇雅などを製するに、粉を打ち込むべき型
くわあくわあ(名)「菓子器(名)菓子をも
り客に供する器。

くわあくわあ

くわあくわあ(名)「果實(名)「種」植物の子房の成熟
したるもの。くだもの。みかづわし。

くわあくわあ

くわあくわあ(名)「華燭(名)「はなやかなる光のとも
さかんにする」と。

くわつーくわつ

(くわつばい) 月牌(名) 位牌に毎月なす供養
(くわつばつ) 活版(名) 活版の勢よく水上にはぬる音

化はたらき。―(くわつばい) 活川言(名) [文法] 語尾の變化する単語、動詞形容詞、助動詞の類
(くわつばい) 活力(名) 活動の力、生活の力のたすかる路、二條の―を求む

(くわつばい) 過度(名) 度にすぎると、程をこゆると、(くわつばい) 書圖(名) くわいじわふ、



くわはーくわは

(くわははり) 果報(名) 因果の果報、むくい者(名) 志あはせもの
(くわははり) 火砲(名) 使用し運搬するに少なくとも数人を要する發火の兵器、大砲

互に彈丸を發射しあふ戰闘
(くわははり) 畫餅(名) 畫に書きたる餅の食ふを得ざる義、物事其用をなさずして無効なること、むだ

(くわははり) 花苞(名) 花の蕾、花の下部にある開く前の花、(くわははり) 花冠(名) 花の上部の花びら、

くわどーくわは

(くわど) 過渡(名) 度にすぎると、程をこゆると、(くわど) 書圖(名) くわいじわふ、

くわんーくわん



【んてきんわく】

(くわん) 喚起(名) 呼び起こす。喚(は)じむ。

(くわん) 官許(名) 政府より特定の人に特定の行為をゆるす。官のゆるし(免許)。

(くわん) 官官(名) 支那朝鮮にて、生藩藩を切斷して官中に事ふる男子。君臣にはんへる人。

くわんーくわん

(くわん) 関鍵(名) くわんのきとかざと。轉じて、物事の内に入りこむために要用なるもの。

(くわん) 寛厚(名) わねひろくして性質寛實なること。一の長者。

(くわん) 環視(名) 四方をとりまきめぐると、又多くのものが其状態に對し注意してあると、列國の中において、(環視)。

くわんくわん

(くわん) 玩味(名) 食物をよくかみわけて味ふこと。物の意義を能く味ひわきまふこと。(くわん) 玩物(名) 官職の名稱。(くわん) 官民(名) 官府又は官吏と人民との総稱。(くわん) 官務(名) 官府の役務。又官吏の負擔せる職務。古昔、太政官の左大臣、右大臣などの稱。又、世々これを勤めし小権や家の稱。(くわん) 貫目(名) ぬかた。かけぬ。新(ハカ)の單位、即ち、千疋、くわん。人を服従せしむる威望、あの人は一がわん。

くわんくわん

(くわん) 關典(名) あづかると、かいはると。(くわん) 慣用(名) つねに用ふること。(くわん) 元來(名) もとより、はじめから。(くわん) 元氣(名) よろこぶたのしむこと。盛りて衰情多し。(くわん) 元氣(名) 古昔、病氣の忌詞。(くわん) 冠履(名) ながめみると、みると。(くわん) 冠履(名) かんむりとくつと。又、上と下と。てんたう「冠履顛倒」上下の順序がさかさまなること。(くわん) 管理(名) 物件の保存改良をはかること。事務の整理執行をなすと。又、人員の指揮監督をなすと。まはひ、とりまき。かちる。(くわん) 管理(名) 法、物件を保存し又はその移轉喪失せざる範圍に於て、これが改良利用をはかる等の行為。のりよく「管理能力」(名)「法」管理行為をなし得る能力、私權行使の能力ある普通一般の人がこれを有するは勿論、警察官及有夫の類もまたこれを有す。處分能力の對。(くわん) 官吏(名) 任官の手續により官制上に定められたる公務を扱ふ地位。又、其地位にある人。やくにん、くわん。あちわい「官吏收賄」(名)「法」官吏が其職務上に就き、人の囑託を受け賄賂を受し若しくは贈許したる罪。どく「官吏遺職」(名)「法」官吏が、當然なすべき職務に反して公益を害し、若しくは職權を濫用して人民の權利を侵害し又は官金を消費する等の罪。ぶよく「官吏侮辱」(名)「法」官吏の職務に對し、形容又は言語を以てこれを侮辱したる罪。(くわん) 元金(名) 元金と利子と。母子。(くわん) 願力(名) 願がけして目的を實か

くわんくわん

んとする意氣又は念慮の勢力、ねんりき。(くわん) 官立(名) 官府の設立又は維持にかゝると、私立又は公立の對。(くわん) 官領(名) 室町幕府にて、一切の政事にあづかりし重要な職名、斯波、細川、島山の三家これに任ずるの定めにして、別に關東管領を(くわん) 官林(名) 官有の森林。「置けり」(くわん) 官領(名) 官領の官領の官領に同じ。(くわん) 官條(名) 同官のもの。どうれう。(くわん) 官條政治(名) 君主は官條に左右せられ、諸般の政治に官條の手によりて行はるること。(くわん) 還曆(名) とし六十一歳の稱、陰曆にては、干支が六十にて一周して元に戻す故に、曆が回つて返る歳よりいふ、ほんげが(り)。(くわん) 關聯(名) かんりつ、かんり、かんりつなると。(くわん) 頑陋(名) 事理にくちまきと、心ね(くわん) 頑弄(名) もてあそぶこと。(くわん) 頑弄(名) もてあそぶこと。(くわん) 頑弄(名) 紙幣の形に似せてつくられたるおもちゃ。おもちゃ。(くわん) 官秩(名) 官府よりたまはる祿。官職あるによりて受くる祿。(くわん) 官威(名) 官府の威力、又、官吏の職(くわん) 官威(名) 河水の濶渾する區域。(くわん) 官員(名) 官位にある人。官職ある人。やくにん。(くわん) 官桶(名) 桶に用ふる桶。はやくをけ、

くわんくわん

(くわん) 區域(名) 區劃したる境界、區劃したる範圍。かきり、まきり、さかひ。(くわん) 俱會(名) 佛も衆生も共に淨土に生れあつたこといふこと。(くわん) 花足(名) 机などの足に花などの彫刻あるもの。佛に供ひたる食物。(くわん) 凶會日(名) 陰陽相起して、百事に凶々たる日。「なり」といふ日。(くわん) 漢字(名) 漢字を國語にあて、よ句の意義の解釋。わけ。漢字を國語にあて、よむこと。(くわん) 國家(名) 國家の元首又は封土の領者。鬼神又は祖先。神は何の神ぞ。すべて他人の敬稱にいふ語。(くわん) 國家(名) 君主に盡したる功勞。てがら。いさを。勳章下の等級。(くわん) 軍(名) われ、むらがり。一國の奧氣ある諸軍の總名。(くわん) 軍(名) つはもの。軍勢、兵隊。た、かひ、いさ。戰爭。戰時の出征に際し、數個の師團又は軍團を以て編制せられたるもの。名稱、我國にては、普通二個乃至四個師團を以て編制せられ、これに騎兵砲兵工兵其他諸種の部隊を附屬せしむるの規定あり。(くわん) 郡(名) 一國を區劃したるもの。稱、稱又は町村等を包括す。こほり。法、地方團體の一にして且行政區劃の一、町村を包括し、法人として第一次に府縣知事第二次に内務大臣の監督を受け、法令により事務を處理するもの。機關は郡會、郡參事

くわんくわん

會及郡長とす。支那にて、周以後來以前までの行政區劃の一、周にては縣の下に屬せしが、秦以後にては縣を包括しての稱となれり。(くわん) 軍醫(名) 陸軍又は海軍に附屬して、醫務に従事する高等官。かかん「軍醫監」(名) 將官相當の軍醫。そらん「軍醫總監」(名) 陸軍又は海軍の醫務を總理し軍醫を統制するもの。せい「軍醫正」(名) 佐官相當の軍醫。(くわん) 軍醫(名) 佐官相當の軍醫。はひと。德行と非行と。又、君子と小人と。一器を同じくせず。(くわん) 訓育(名) をしそだつること。(くわん) 軍營(名) 軍隊の營所。(くわん) 群英(名) おほくの秀才。(くわん) 軍役(名) 軍あるときの夫役。戰爭又は征伐。(くわん) 君恩(名) 君のめぐみ。「海」の如し、(くわん) 軍歌(名) 軍隊の士氣を鼓舞するため又は軍事の思想を盛んにするため等の目的を以て製作せられたる歌。おもに軍事上の壯烈なる事柄を詠じたもの。(くわん) 郡衙(名) かんや、かんや。し、い、ま、し、め。(くわん) 訓戒(名) さとし、い、ま、し、む、と、さ、と。(くわん) 訓解(名) 文章字句のときあかし。(くわん) 軍港(名) 編守府のある港。其海軍區方面の海軍の根據地。(くわん) 軍學(名) 多くのうけたるもの。(くわん) 軍學(名) 兵法、兵學。(くわん) 軍樂(名) 陸軍又は海軍に使用する音樂。たい「軍樂隊」(名) 軍樂を奏するたのめの一隊。

くわんくわん

(くわん) 軍艦(名) 戰艦の用に供するため特製造したる國家の兵船、即ち、海軍艦船の第一種第二種の總稱。一、軍艦(名) 軍艦の表彰として最も貴重なる旗、其昇降は甚だ慎重嚴肅に行はる、ものとす。我國は旭日の旗を掲げ、(くわん) 軍旗(名) 軍艦の監督をなす職名の所在地。(くわん) 軍監(名) 古昔、鎮守府の判官。(くわん) 軍紀(名) 軍隊の規律。(くわん) 軍旗(名) 軍隊の表彰として最も貴重なる旗、該旗設立のとき、天皇陛下より下し賜はる、旭日の旗を掲げたるもの。れんたいき。(くわん) 軍旗(名) 軍隊にて、軍艦を天皇陛下より賜はりたる日又は戰勝の記念日などに行ふ祝典。(くわん) 軍機(名) 軍事上の秘密。ろろ「軍機漏洩」(名) 軍事上の秘密を世間へもれきこゆるにいひ、又、軍事上の秘密を世間へは洩る(知らすに)いふ語。(くわん) 軍議(名) 戰爭の事跡をかきたるもの。(くわん) 軍議(名) 軍事上の評議。(くわん) 軍議(名) おほくの人のをたし、(くわん) 軍議(名) あつかりあること、むらがり(くわん) 軍議(名) 「法」二郡又は二郡以上が、共同して特定の事務を處理するため設置する組合、府縣知事が郡參事會の意見と府縣會の議決により、内務大臣の許可を得てこれを設置するものとす。(くわん) 調化(名) をしへみちびくと、

くんくわい

くんくわい [訓誨] (名) をしへ、まとし。
(くんくわい) [郡會] (名) 郡内の町村より選出したる議員を以て組織する郡の機関、郡の歳入出豫算其他重要な事件を議決するものにして、又、地方官廳の諮問に應じ意見を述べ又は建議をなすとを得郡長これを招集す。— 省(るん) [郡會議員] (名) 郡會を組織する議員、郡内の町村公民にして町村會議員の選挙権を有し、且其郡内にて、一年以來直接選挙年額三回以上を納むるものは、これが選挙権を有し、又これと同一の資格にして直接選挙年額五回以上を納むるものは、これが被選挙権を有するの規定なり。

(くん) [訓誨] (名) をしへ、まとし、いませしめ
(くん) [郡縣] (名) こほりともがたと。— せいど [郡縣制度] (名) 中央政府より、全國にひとしき政令を布き、地方官を委任してこれを執行せしむる制度、封建制度の對。

(くん) [訓誨] (名) 古昔の意義の説明、わけ、と
(くん) [軍鼓] (名) いくさにも用ふるたいこ。
(くん) [軍鼓] (名) 國家又は君主に盡したる功勞、いさを、てがら、いさをし。
(くん) [君侯] (名) きみ、ゲンナ。
(くん) [君侯] (名) 諸侯の敬稱。「の功績」
(くん) [軍功] (名) いくさのてがら、戰爭にて
(くん) [軍功] (名) 多くの人のことば。
(くん) [軍國] (名) 軍隊と國家と。又、軍を治むる國を治むる、一の軍に仰に任ず。— 軍事上の大事ある國、戰爭をなすつ、ある國家。
(くん) [軍曹] (名) 古昔、領守府に附屬せしむる、陸軍の下士官の一、一等と二等と

くんざ

くんざ [軍裝] (名) 軍隊の上をほひ、出征の階級あり、地位は曹長の下なり。「の上をほひ」
(くんざ) [軍裝] (名) 軍隊の上をほひ、出征の階級あり、地位は曹長の下なり。「の上をほひ」
(くんざ) [軍裝] (名) 軍隊の上をほひ、出征の階級あり、地位は曹長の下なり。「の上をほひ」

(くん) [軍士] (名) 軍隊の成員、出征の階級あり、地位は曹長の下なり。「の上をほひ」
(くん) [軍士] (名) 軍隊の成員、出征の階級あり、地位は曹長の下なり。「の上をほひ」
(くん) [軍士] (名) 軍隊の成員、出征の階級あり、地位は曹長の下なり。「の上をほひ」

(くん) [軍師] (名) 主將に附屬し、軍機を掌り謀計を運ぶ人。
(くん) [軍使] (名) 巧に手段を運ぶ人。
(くん) [軍使] (名) 巧に手段を運ぶ人。
(くん) [軍使] (名) 巧に手段を運ぶ人。
(くん) [軍使] (名) 巧に手段を運ぶ人。



くんせ

くんせ [軍勢] (名) ぐんたい、ぐんびやう。
(くんせ) [軍勢] (名) ぐんたい、ぐんびやう。
(くんせ) [軍勢] (名) ぐんたい、ぐんびやう。

(くん) [軍勢] (名) ぐんたい、ぐんびやう。
(くん) [軍勢] (名) ぐんたい、ぐんびやう。
(くん) [軍勢] (名) ぐんたい、ぐんびやう。

(くん) [軍勢] (名) ぐんたい、ぐんびやう。
(くん) [軍勢] (名) ぐんたい、ぐんびやう。
(くん) [軍勢] (名) ぐんたい、ぐんびやう。



(くん) [群集] (名) ぐんじふ。
(くん) [群集] (名) ぐんじふ。
(くん) [群集] (名) ぐんじふ。

(くん) [群集] (名) ぐんじふ。
(くん) [群集] (名) ぐんじふ。
(くん) [群集] (名) ぐんじふ。

くんせ

くんせ [軍勢] (名) ぐんたい、ぐんびやう。
(くんせ) [軍勢] (名) ぐんたい、ぐんびやう。
(くんせ) [軍勢] (名) ぐんたい、ぐんびやう。

くんせ

くんせ [軍勢] (名) ぐんたい、ぐんびやう。
(くんせ) [軍勢] (名) ぐんたい、ぐんびやう。
(くんせ) [軍勢] (名) ぐんたい、ぐんびやう。

ぐんたーぐんざ

(ぐん)たち(群島) (名) ちがりがりて一群をなす島々。
グンダリ(軍茶利) (名) (佛)グンダリヤシヤの略言。
ヤ(軍茶利夜) (名) (佛)明王又(名)明王の二、南方を守る。
一面八臂にして忿怒の相をなす、一切の阿修羅惡鬼を推伏すといふ。



[ヤシヤリグンダ]

(ぐん)だん(軍團) (名) 古昔、諸國に備へ置きたる兵隊、國中の二十歳より六十歳までの男子より募集し、軍事を習はせしもの。
(ぐん)だん(軍談) (名) 軍書、軍談を指す。
(ぐん)だん(軍師) (名) 軍談を營業とする人(講釋師)の委任により、府縣知事の指揮監督の下に、郡に關する行政事務を處理し、兼ねて郡會及郡參事會の議決を執行し、郡を代表する官職。
(ぐん)だん(軍中) (名) 軍隊又は軍營のなか。
(ぐん)だん(軍陣) (名) 軍陣、軍隊。
(ぐん)だん(軍師) (名) 軍談を營業とする人(講釋師)の委任により、府縣知事の指揮監督の下に、郡に關する行政事務を處理し、兼ねて郡會及郡參事會の議決を執行し、郡を代表する官職。
(ぐん)だん(軍中) (名) 軍隊又は軍營のなか。
(ぐん)だん(軍陣) (名) 軍陣、軍隊。
(ぐん)だん(軍師) (名) 軍談を營業とする人(講釋師)の委任により、府縣知事の指揮監督の下に、郡に關する行政事務を處理し、兼ねて郡會及郡參事會の議決を執行し、郡を代表する官職。

ぐんばーぐんば

(ぐん)ば(軍法) (名) 軍法、軍律。
(ぐん)ば(軍師) (名) 軍師、軍談を營業とする人。
(ぐん)ば(軍中) (名) 軍隊又は軍營のなか。
(ぐん)ば(軍陣) (名) 軍陣、軍隊。
(ぐん)ば(軍師) (名) 軍談を營業とする人(講釋師)の委任により、府縣知事の指揮監督の下に、郡に關する行政事務を處理し、兼ねて郡會及郡參事會の議決を執行し、郡を代表する官職。



[はちういばんぐ]

(ぐん)ば(軍法) (名) 軍法、軍律。
(ぐん)ば(軍師) (名) 軍師、軍談を營業とする人。
(ぐん)ば(軍中) (名) 軍隊又は軍營のなか。
(ぐん)ば(軍陣) (名) 軍陣、軍隊。
(ぐん)ば(軍師) (名) 軍談を營業とする人(講釋師)の委任により、府縣知事の指揮監督の下に、郡に關する行政事務を處理し、兼ねて郡會及郡參事會の議決を執行し、郡を代表する官職。

ぐんびーぐんよ

(ぐん)び(軍務) (名) 軍に關する事務又は勤務。
(ぐん)び(軍師) (名) 軍師、軍談を營業とする人。
(ぐん)び(軍中) (名) 軍隊又は軍營のなか。
(ぐん)び(軍陣) (名) 軍陣、軍隊。
(ぐん)び(軍師) (名) 軍談を營業とする人(講釋師)の委任により、府縣知事の指揮監督の下に、郡に關する行政事務を處理し、兼ねて郡會及郡參事會の議決を執行し、郡を代表する官職。

(ぐん)び(軍務) (名) 軍に關する事務又は勤務。
(ぐん)び(軍師) (名) 軍師、軍談を營業とする人。
(ぐん)び(軍中) (名) 軍隊又は軍營のなか。
(ぐん)び(軍陣) (名) 軍陣、軍隊。
(ぐん)び(軍師) (名) 軍談を營業とする人(講釋師)の委任により、府縣知事の指揮監督の下に、郡に關する行政事務を處理し、兼ねて郡會及郡參事會の議決を執行し、郡を代表する官職。

ぐんよーぐんれ

(ぐん)よ(軍用) (名) 軍事に用ふるもの。
(ぐん)よ(軍用金) (名) 軍の費用につかふ金。
(ぐん)よ(軍用手形) (名) 軍の費用に用ふるもの。
(ぐん)よ(軍用金) (名) 軍の費用につかふ金。
(ぐん)よ(軍用手形) (名) 軍の費用に用ふるもの。
(ぐん)よ(軍用金) (名) 軍の費用につかふ金。
(ぐん)よ(軍用手形) (名) 軍の費用に用ふるもの。

ぐんれーけ

(ぐん)れ(軍令) (名) 軍令、軍律。
(ぐん)れ(軍師) (名) 軍師、軍談を營業とする人。
(ぐん)れ(軍中) (名) 軍隊又は軍營のなか。
(ぐん)れ(軍陣) (名) 軍陣、軍隊。
(ぐん)れ(軍師) (名) 軍談を營業とする人(講釋師)の委任により、府縣知事の指揮監督の下に、郡に關する行政事務を處理し、兼ねて郡會及郡參事會の議決を執行し、郡を代表する官職。

けげ

け(破) (名) 破、破れ。
け(裂) (名) 裂、裂け。
け(割) (名) 割、割れ。
け(切) (名) 切、切れ。
け(削) (名) 削、削れ。
け(削) (名) 削、削れ。
け(削) (名) 削、削れ。

けけ

け(削) (名) 削、削れ。
け(削) (名) 削、削れ。
け(削) (名) 削、削れ。

けいち—けいぞ

けいちよりえき「輕懲役」(名) [法] 重罪の主刑の一、内地の懲役場に入れ定役に服せしむる刑罰、現行法にて六年以上八年以下の刑罰なり。

けいぞ—けいは

けいぞり「惠投」(名) 他より物を惠まれたること。けいぞり「系統」(名) 次第順序を追ひ、つゞきつながらて統一してあること、すなわち、一の原理又は法則の下に、個々の事物の間に存する一般の關係を順序を立て、列ねること。

けいは—けいひ

けいはらう「閑房」(名) ねま、寢室、閑門。けいはく「輕薄」(名) 思慮のあさましく、うはすべり、一なる考へ、無實なること、親切なることと「極まる人」をいふ。

けいひ—けいふ

けいひつ「警譯」(名) 主上又は貴族の出入し給ふ時、聲をかり先拂して、人を警へむこと、其掛聲は下を向きて、或は「を」或は「し」或は「を」し或は「を」し「など」といふ。

けいふ—けいそ

けいふへき「刑辟」(名) つみ、とが、まかき。けいふべつ「輕蔑」(名) あなどりてないがしるにすると、さげしめ、あなどり。

けいそ—けいよ

けいそ「輕微」(名) すこし、わづか、輕少、(輕小)。けいそ「警備」(名) 豫め防備すること、一かん「警備艦」(名) 警備のためにそなへてある軍艦、一たい「警備隊」(名) 警備のために屯在する軍隊、現時對馬に置かる。

けいよーけいれ

い、ありさま、形状。●物事の形状をかたどって... けいよ(警備) けいれ(刑務)...

けいれーけいれ

けいれ(傾斜) けいれ(経緯) けいれ(鯨魚) けいれ(鯨骨)...

けりーけりか

けり(啓蒙) けり(啓蒙) けり(啓蒙) けり(啓蒙)...

けり(啓蒙) けり(啓蒙) けり(啓蒙) けり(啓蒙)...

けり(啓蒙) けり(啓蒙) けり(啓蒙) けり(啓蒙)...

けり(啓蒙) けり(啓蒙) けり(啓蒙) けり(啓蒙)...

けりーけり

けりーけり

けりーけり

けうぞーけうぶ

管理に属し、下士官を養成せし所。〔てあると、(けうぞう)「曉達」(名) 輿論まできけはめきと(けうぞう)「曉智」(名) 物事にさとき智能(けうぞう)「曉場」(名) 學校などにて教授をなす室。

けうべーけうり

(けうべん)「教鞭」(名) 昔時、教師の生徒を訓(けうべん)「教鞭」(名) 生徒を教授するに用い、教師となる(けうべん)「教鞭」(名) 生徒を教授するに用い、教師となる

けうりーけかへ

ために、河川又は谷に跨りて架設する構造物。か(けうり)「橋」(名) 谷木の森林。(けうり)「橋」(名) 谷木の森林。(けうり)「橋」(名) 谷木の森林。

けがみーげき

もとの地位へ戻す。●他人に譲られたるに假いて(けがみ)「紙」(名) 書を引きたる紙、けがみがみ(けがみ)「紙」(名) 書を引きたる紙、けがみがみ

げきかーげきす

(げきか)「激刺」(名) 激して意氣のたかぶり(げきか)「激刺」(名) 激して意氣のたかぶり(げきか)「激刺」(名) 激して意氣のたかぶり

げきすーげきは

あつくなる。●衝突す、つきあたる。(げきす)「激す」(名) 激して意氣のたかぶり(げきす)「激す」(名) 激して意氣のたかぶり

びきはーびきれ

びきはん「劇業」(名) いそがしきと多忙なる。
びきひやう「劇評」(名) 演劇に關する事柄の。
びきふん「戯文」(名) げき意に同じ。

びきやく「劇薬」(名) 使用少しく度に通ぐれ。
びきやく「劇服」(名) 神佛の形を現はした。
びきやく「劇形」(名) 神佛の形を現はした。
びきやく「劇行」(名) たまもの。

びきやく「劇用」(名) 使用少しく度に通ぐれ。
びきやく「劇用」(名) 使用少しく度に通ぐれ。
びきやく「劇用」(名) 使用少しく度に通ぐれ。

びきやく「劇用」(名) 使用少しく度に通ぐれ。
びきやく「劇用」(名) 使用少しく度に通ぐれ。
びきやく「劇用」(名) 使用少しく度に通ぐれ。

びきやく「劇用」(名) 使用少しく度に通ぐれ。
びきやく「劇用」(名) 使用少しく度に通ぐれ。
びきやく「劇用」(名) 使用少しく度に通ぐれ。



びきれーびけん

びきれつ「激烈」(名) 極めてはげしきと。
びきれつ「激論」(名) はげしきいひあひ。

びきれつ「激論」(名) はげしきいひあひ。
びきれつ「激論」(名) はげしきいひあひ。
びきれつ「激論」(名) はげしきいひあひ。

びきれつ「激論」(名) はげしきいひあひ。
びきれつ「激論」(名) はげしきいひあひ。
びきれつ「激論」(名) はげしきいひあひ。

びきれつ「激論」(名) はげしきいひあひ。
びきれつ「激論」(名) はげしきいひあひ。
びきれつ「激論」(名) はげしきいひあひ。

びきれつ「激論」(名) はげしきいひあひ。
びきれつ「激論」(名) はげしきいひあひ。
びきれつ「激論」(名) はげしきいひあひ。

びけんーけとん

びけん「下弦」(名) 「かげん」に同じ。
びけん「華宮」(名) 佛事に花を盛るに用よる器。
びけん「獅子」(名) 富麗の義古昔食物を盛る器。
びけん「家子」(名) 妻子奴僕などすべて家に屬したる人けんせく。

びけん「獅子」(名) 富麗の義古昔食物を盛る器。
びけん「家子」(名) 妻子奴僕などすべて家に屬したる人けんせく。
びけん「家子」(名) 妻子奴僕などすべて家に屬したる人けんせく。

びけん「家子」(名) 妻子奴僕などすべて家に屬したる人けんせく。
びけん「家子」(名) 妻子奴僕などすべて家に屬したる人けんせく。
びけん「家子」(名) 妻子奴僕などすべて家に屬したる人けんせく。

びけん「家子」(名) 妻子奴僕などすべて家に屬したる人けんせく。
びけん「家子」(名) 妻子奴僕などすべて家に屬したる人けんせく。
びけん「家子」(名) 妻子奴僕などすべて家に屬したる人けんせく。

びけん「家子」(名) 妻子奴僕などすべて家に屬したる人けんせく。
びけん「家子」(名) 妻子奴僕などすべて家に屬したる人けんせく。
びけん「家子」(名) 妻子奴僕などすべて家に屬したる人けんせく。

けさ「今朝」(名) 此朝の轉今日のみ。
ケサ「袈裟」(名) 梵語「シャラ」の譯、袈裟衣と譯す僧侶の服、食・宿・衣の三徳を捨離したる表章として、肩にかけて衣の上を被ふもの、木蘭色に染むるを正しとすといふ、無垢衣、功德衣、忍辱鎧。



けさ「今朝」(名) 此朝の轉今日のみ。
ケサ「袈裟」(名) 梵語「シャラ」の譯、袈裟衣と譯す僧侶の服、食・宿・衣の三徳を捨離したる表章として、肩にかけて衣の上を被ふもの、木蘭色に染むるを正しとすといふ、無垢衣、功德衣、忍辱鎧。

けさ「今朝」(名) 此朝の轉今日のみ。
ケサ「袈裟」(名) 梵語「シャラ」の譯、袈裟衣と譯す僧侶の服、食・宿・衣の三徳を捨離したる表章として、肩にかけて衣の上を被ふもの、木蘭色に染むるを正しとすといふ、無垢衣、功德衣、忍辱鎧。

けさ「今朝」(名) 此朝の轉今日のみ。
ケサ「袈裟」(名) 梵語「シャラ」の譯、袈裟衣と譯す僧侶の服、食・宿・衣の三徳を捨離したる表章として、肩にかけて衣の上を被ふもの、木蘭色に染むるを正しとすといふ、無垢衣、功德衣、忍辱鎧。

けさ「今朝」(名) 此朝の轉今日のみ。
ケサ「袈裟」(名) 梵語「シャラ」の譯、袈裟衣と譯す僧侶の服、食・宿・衣の三徳を捨離したる表章として、肩にかけて衣の上を被ふもの、木蘭色に染むるを正しとすといふ、無垢衣、功德衣、忍辱鎧。

けさ「今朝」(名) 此朝の轉今日のみ。
ケサ「袈裟」(名) 梵語「シャラ」の譯、袈裟衣と譯す僧侶の服、食・宿・衣の三徳を捨離したる表章として、肩にかけて衣の上を被ふもの、木蘭色に染むるを正しとすといふ、無垢衣、功德衣、忍辱鎧。

げとんーげさく

げとん「下根」(名) 拙劣なる根性。

げさくーげしん

げさく「下策」(名) 最もよからぬはかりごと。

げしんーげきた

げしん「進心」(名) 消するにほす印、即ち。

けきつーけきや

けきつーけきや (名) けきつーの實の小さき粒。
けきつー (名) けきつーの實の小さき粒。
けきつー (名) けきつーの實の小さき粒。
けきつー (名) けきつーの實の小さき粒。
けきつー (名) けきつーの實の小さき粒。

けきやーけきよ

けきやーけきよ (名) けきやーの實の小さき粒。
けきやー (名) けきやーの實の小さき粒。
けきやー (名) けきやーの實の小さき粒。
けきやー (名) けきやーの實の小さき粒。
けきやー (名) けきやーの實の小さき粒。

けきよーけきち

けきよーけきち (名) けきよーの實の小さき粒。
けきよー (名) けきよーの實の小さき粒。
けきよー (名) けきよーの實の小さき粒。
けきよー (名) けきよーの實の小さき粒。
けきよー (名) けきよーの實の小さき粒。

けするーげたい

けするーげたい (名) けするーの實の小さき粒。
けするー (名) けするーの實の小さき粒。
けするー (名) けするーの實の小さき粒。
けするー (名) けするーの實の小さき粒。
けするー (名) けするーの實の小さき粒。

けたりーげたつ

けたりーげたつ (名) けたりーの實の小さき粒。
けたりー (名) けたりーの實の小さき粒。
けたりー (名) けたりーの實の小さき粒。
けたりー (名) けたりーの實の小さき粒。
けたりー (名) けたりーの實の小さき粒。

けたでーけち

けたでーけち (名) けたでーの實の小さき粒。
けたでー (名) けたでーの實の小さき粒。
けたでー (名) けたでーの實の小さき粒。
けたでー (名) けたでーの實の小さき粒。
けたでー (名) けたでーの實の小さき粒。

げちんげちん

げちん「下知」(名) いひつけ、さしづ、命令、指撥。
げちん(名)「動」げちんげちん、この略言。
げちん「えん」(血縁)(名) 「げつえん」に同じ。
げちん「えん」(結縁)(名) 「佛」佛道に縁を結ぶと、
げちん「えん」(搦焉)(名) あきまか、あきは、きは、ま、
か「今少しなるはかげに」、「く寄りたふ」。
げちん「か」(氣近)(形、一) ちかし、げちん、
げちん「か」(氣近)(形、二) ちかし、げちん、
げちん「か」(氣近)(形、三) ちかし、げちん、
げちん「か」(氣近)(形、四) ちかし、げちん、
げちん「か」(氣近)(形、五) ちかし、げちん、
げちん「か」(氣近)(形、六) ちかし、げちん、
げちん「か」(氣近)(形、七) ちかし、げちん、
げちん「か」(氣近)(形、八) ちかし、げちん、
げちん「か」(氣近)(形、九) ちかし、げちん、
げちん「か」(氣近)(形、十) ちかし、げちん、

けつてつつか

けつ「櫃」(名) 門のとびらを止むるために門の中央
に打つ櫃。
けつ「閨」(名) 欠くると、たらぬと、かけ、
けつ「穴」(名) 宮城の門、又、宮城「一」を記す、
けつ「決」(名) 決定、
けつ「けつ」(名) 決定、
けつ「けつ」(名) 決定、
けつ「けつ」(名) 決定、
けつ「けつ」(名) 決定、
けつ「けつ」(名) 決定、
けつ「けつ」(名) 決定、
けつ「けつ」(名) 決定、
けつ「けつ」(名) 決定、

けつかけつか

けつか「かい」(結界)(名) 「佛」法力を以て界を結び、
外道邪魔などを防禦して其中に入れずといふ。
けつか「かい」(結改)(名) 陰曆五月及九月の二十五日
に、湯勺を射る人相集まりて、中の勝負の観點を
する。
けつか「かち」(決行)(名) 決定して行ふと、實際に
けつか「かち」(血行)(名) 体内に於ける血液の循
環、
けつか「かち」(結核)(名) 結核菌の患部の硬ひとなり
てこり結核と、
けつか「かち」(結核菌)(名) 結
核菌を起す菌、ドイツ人「コッホ」の発見に係る、其
傳播の事情多きが中に、肺結核患者のはき出したる
痰の中に入れたるものが、痰の乾燥によりて
空氣中に飛揚散文するに由るものとすといふ。
けつか「かち」(結核症)(名) 結核菌の寄生に
よつて起る疾患、人類死亡の一割半はこれによると
いふ、呼吸器は結核菌の侵入に最も便なるが故に、
此症の起るは肺を最とす、比症は感染すれども遺傳
するものにあらざる。
けつか「かち」(月角差)(名) 「天」太陽の太陽に至
る距離の遠近により其相互作用の異なるため、太陽
の運動に起る變差、即ち上弦の起る時刻は早く下弦
の起る時刻は遅いものとす。
けつか「かち」(月下氷人)(名) 男女の縁
をとりもつ神、むすぶのかみ。
けつか「かち」(結合)(名) 結び合ふと、結び合はす
と、連絡、同體、
けつか「かち」(結合體)(名) 個體が
相連結して成りたる一體、
けつか「かち」(月下老人)(名) むすぶの
かみ、
けつか「かち」(月刊)(名) 月々刊行出版すると、

けつせき

けつ「せき」(蹶起)(名) はね起ると、飛び立つと、
けつ「せき」(血氣)(名) 激し易き盛んなる血氣、はや
りこ、さ、客氣、一のゆる「血氣勇」(名) た
ま、血氣にまかせて勇みたと、
けつ「せき」(決議)(名) 論議を決定すると、又、其決
定したる條項、
けつ「せき」(案)(名) 議案、
けつ「せき」(議案)(名) 議會
にて、或事件に就きて議會の意思を表明するたため
に、決議にかゝる議案、
けつ「せき」(月氣)(名) 月の光のさすさま、
けつ「せき」(血球)(名) 血液の一部分、赤血球と白
血球とあり、前者は無核細胞にして圓盤狀なり、三
千五百個を連ぬとも大さ「インチ」に達せず、後者
は前者より大にして核を有し、表面には多數の突起
ありて恰も愛實の如く、「アミール」機の運動をなす
特性を有す、
けつ「せき」(月給)(名) 月の稱、
けつ「せき」(月給取)(名) 月給を取る人、つ
とめにん、
けつ「せき」(月宮殿)(名) 月の中にありと
けつ「せき」(穴居)(名) 穴の中のみまひ、開けぬ世
に行はれしすまひ、あなずまひ、
けつ「せき」(結局)(名) をはり、つまり、はて、
けつ「せき」(結局)(名) をはり、つまり、はて、
けつ「せき」(結局)(名) をはり、つまり、はて、
けつ「せき」(結局)(名) をはり、つまり、はて、
けつ「せき」(結局)(名) をはり、つまり、はて、
けつ「せき」(結局)(名) をはり、つまり、はて、
けつ「せき」(結局)(名) をはり、つまり、はて、
けつ「せき」(結局)(名) をはり、つまり、はて、
けつ「せき」(結局)(名) をはり、つまり、はて、
けつ「せき」(結局)(名) をはり、つまり、はて、



けつてつつか

けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、

けつてつつか

けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、

けつせき

けつ「せき」(蹶起)(名) はね起ると、飛び立つと、
けつ「せき」(血氣)(名) 激し易き盛んなる血氣、はや
りこ、さ、客氣、一のゆる「血氣勇」(名) た
ま、血氣にまかせて勇みたと、
けつ「せき」(決議)(名) 論議を決定すると、又、其決
定したる條項、
けつ「せき」(案)(名) 議案、
けつ「せき」(議案)(名) 議會
にて、或事件に就きて議會の意思を表明するたため
に、決議にかゝる議案、
けつ「せき」(月氣)(名) 月の光のさすさま、
けつ「せき」(血球)(名) 血液の一部分、赤血球と白
血球とあり、前者は無核細胞にして圓盤狀なり、三
千五百個を連ぬとも大さ「インチ」に達せず、後者
は前者より大にして核を有し、表面には多數の突起
ありて恰も愛實の如く、「アミール」機の運動をなす
特性を有す、
けつ「せき」(月給)(名) 月の稱、
けつ「せき」(月給取)(名) 月給を取る人、つ
とめにん、
けつ「せき」(月宮殿)(名) 月の中にありと
けつ「せき」(穴居)(名) 穴の中のみまひ、開けぬ世
に行はれしすまひ、あなずまひ、
けつ「せき」(結局)(名) をはり、つまり、はて、
けつ「せき」(結局)(名) をはり、つまり、はて、
けつ「せき」(結局)(名) をはり、つまり、はて、
けつ「せき」(結局)(名) をはり、つまり、はて、
けつ「せき」(結局)(名) をはり、つまり、はて、
けつ「せき」(結局)(名) をはり、つまり、はて、
けつ「せき」(結局)(名) をはり、つまり、はて、
けつ「せき」(結局)(名) をはり、つまり、はて、
けつ「せき」(結局)(名) をはり、つまり、はて、
けつ「せき」(結局)(名) をはり、つまり、はて、



けつてつつか

けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、

けつてつつか

けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
けつ「てつつか」(結局)(副) と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、

けはえーけびき

けはえきは「毛生際」(名)「けきは(毛際)に同じ。
けはえぐすり「毛生藥」(名)皮膚の局部に毛を生ぜしむるために塗抹する藥。
「けはく「下白」(名)下等の白米、上白の對。
「けははく「下白」(名)上等の白米、上白の對。
「けははく「下白」(名)上等の白米、上白の對。
「けははく「下白」(名)上等の白米、上白の對。
「けははく「下白」(名)上等の白米、上白の對。

けびきーけふか

引紙(名)けいけい、けがみ。「る鏡」
けびき「毛引紙」(名)毛引紙にてあしらった紙。
「けびき「毛引紙」(名)毛引紙にてあしらった紙。
「けびき「毛引紙」(名)毛引紙にてあしらった紙。
「けびき「毛引紙」(名)毛引紙にてあしらった紙。
「けびき「毛引紙」(名)毛引紙にてあしらった紙。

けふかーけふさ

「けふか「狭巷」(名)せまきまち、あぢ、
「けふか「狭巷」(名)せまきまち、あぢ、
「けふか「狭巷」(名)せまきまち、あぢ、
「けふか「狭巷」(名)せまきまち、あぢ、
「けふか「狭巷」(名)せまきまち、あぢ、

けふさーけふた

「けふさ「業體」(名)「けふさ」に同じ。
「けふさ「業體」(名)「けふさ」に同じ。
「けふさ「業體」(名)「けふさ」に同じ。
「けふさ「業體」(名)「けふさ」に同じ。
「けふさ「業體」(名)「けふさ」に同じ。

けふたーけふり

「けふた「業體」(名)「けふた」に同じ。
「けふた「業體」(名)「けふた」に同じ。
「けふた「業體」(名)「けふた」に同じ。
「けふた「業體」(名)「けふた」に同じ。
「けふた「業體」(名)「けふた」に同じ。

けふりーけまは

「けふり「業體」(名)「けふり」に同じ。
「けふり「業體」(名)「けふり」に同じ。
「けふり「業體」(名)「けふり」に同じ。
「けふり「業體」(名)「けふり」に同じ。
「けふり「業體」(名)「けふり」に同じ。

けんーけん

(けん) 鶴(名) (動) ほと、ぎす、一を聞く、
(けん) 懸(名) 筋肉の兩端の白色部分の筋、強靱に
して收缩するをなく骨に附着す。『天行は一』
(けん) 健(名) つよきと、さかんなると、すこやか
(けん) 賢(名) さかしきと、かしこきと、すぐれた
ると、又其人、
(けん) 妍(名) たをやかなると、みゆよきと、
(けん) 堅(名) かたきと、かたきもの、一を固
る。『甲冑、一を破り戈を執る』
(けん) 謙(名) へりくだると、
(けん) 險(名) たかし、こ、あみ、
(けん) 儉(名) 事を省(け)き用を節すると、自ら戒め
てはしむ、にせざると、つさまやか、一以つ、徳
を差ふ、
(けん) 軒(接尾) 家を歌ふるにいふ語、一二
一、百一、
(けん) 弦(名) 弓の緒、
(けん) 言(名) ことば、
(けん) 玄(名) 赤を含む黒色、黄を含む黒色、く
ろ。『玄、天上、』

けんーけんあ

遠なると、たへなると、おくふかきと、又其道理
「一之又一象妙之門、
(けん) 嚴(名) きびしきと、おごりかなると、
(けん) 幻(名) まぼろし、
(けん) 現(名) うつつ、實在、
(けん) 減(名) へると、
(けん) 元(名) 天地の太極又天地の正氣、
(けん) 険(名) 険難又は険治などの去るし、
(けん) 元(名) 天地の太極又天地の正氣、
(けん) 険(名) 険難又は険治などの去るし、
(けん) 元(名) 天地の太極又天地の正氣、
(けん) 険(名) 険難又は険治などの去るし、

けんいーけんえ

懸に上(り)りたるはじめの謀案の稱、
(けんい) 險(名) 易(名) むづかしきと、
(けんい) 懸(名) 筋肉の兩端の白色部分の筋、
(けんい) 健(名) つよきと、
(けんい) 賢(名) さかしきと、
(けんい) 妍(名) たをやかなると、
(けんい) 堅(名) かたきと、
(けんい) 謙(名) へりくだると、
(けんい) 險(名) たかし、
(けんい) 儉(名) 事を省(け)き用を節すると、
(けんい) 軒(名) 家を歌ふるにいふ語、
(けんい) 弦(名) 弓の緒、
(けんい) 言(名) ことば、
(けんい) 玄(名) 赤を含む黒色、



委員(名) 府縣知事又は警視總監の指揮監督の
下に、検査の事務を扱ふ委員、
(けん) 現(名) 現役(名) 常備兵役の一種、現に所属
の部員に編入せられて軍務に服従し、戦時には所屬
の種別後より先に出征を命ぜらるるもの、兵卒、
下士、准士官、將校の、其年限を異にす、兵卒
の年限は陸軍にては三年とし海軍は四年とす、
(けん) 現(名) 現役(名) 常備兵役の一種、現に所属
の部員に編入せられて軍務に服従し、戦時には所屬
の種別後より先に出征を命ぜらるるもの、兵卒、
下士、准士官、將校の、其年限を異にす、兵卒
の年限は陸軍にては三年とし海軍は四年とす、

(けん) 懸(名) 筋肉の兩端の白色部分の筋、強靱に
して收缩するをなく骨に附着す。
(けん) 健(名) つよきと、さかんなると、すこやか
(けん) 賢(名) さかしきと、かしこきと、すぐれた
ると、又其人、
(けん) 妍(名) たをやかなると、みゆよきと、
(けん) 堅(名) かたきと、かたきもの、一を固
る。
(けん) 謙(名) へりくだると、
(けん) 險(名) たかし、こ、あみ、
(けん) 儉(名) 事を省(け)き用を節すると、自ら戒め
てはしむ、にせざると、つさまやか、一以つ、徳
を差ふ、
(けん) 軒(接尾) 家を歌ふるにいふ語、一二
一、百一、
(けん) 弦(名) 弓の緒、
(けん) 言(名) ことば、
(けん) 玄(名) 赤を含む黒色、黄を含む黒色、く
ろ。『玄、天上、』

て務める職、勇猛心を奮ひ起し思ひきつてなすとに
たといふ、殊に、神家などにて、疑團に類し、さ
れ進退きはまる場合に於ける奮進にたとへいふ、
(けん) 戒(名) きびしくいましむる、
(けん) 界(名) さかひ、まきり、かざり、
(けん) 剛(名) かたきと、
(けん) 乾(名) 天子又は國家のり、
(けん) 乾(名) 天子又は國家のり、
(けん) 乾(名) 天子又は國家のり、

(けん) 懸(名) 筋肉の兩端の白色部分の筋、強靱に
して收缩するをなく骨に附着す。
(けん) 健(名) つよきと、さかんなると、すこやか
(けん) 賢(名) さかしきと、かしこきと、すぐれた
ると、又其人、
(けん) 妍(名) たをやかなると、みゆよきと、
(けん) 堅(名) かたきと、かたきもの、一を固
る。
(けん) 謙(名) へりくだると、
(けん) 險(名) たかし、こ、あみ、
(けん) 儉(名) 事を省(け)き用を節すると、自ら戒め
てはしむ、にせざると、つさまやか、一以つ、徳
を差ふ、
(けん) 軒(接尾) 家を歌ふるにいふ語、一二
一、百一、
(けん) 弦(名) 弓の緒、
(けん) 言(名) ことば、
(けん) 玄(名) 赤を含む黒色、黄を含む黒色、く
ろ。『玄、天上、』

に顯著なる犯罪の痕跡ありて、犯罪者と思考すべき
もの、家宅内の犯罪検査のため又は犯罪人と思考す
べきものを逮捕するため、戸主より其處分を求めた
るもの等は、またこれに准ぜらるるものとす、
(けん) 研(名) かたくして動かさると、
(けん) 研(名) かたくして動かさると、
(けん) 研(名) かたくして動かさると、

(けん) 懸(名) 筋肉の兩端の白色部分の筋、強靱に
して收缩するをなく骨に附着す。
(けん) 健(名) つよきと、さかんなると、すこやか
(けん) 賢(名) さかしきと、かしこきと、すぐれた
ると、又其人、
(けん) 妍(名) たをやかなると、みゆよきと、
(けん) 堅(名) かたきと、かたきもの、一を固
る。
(けん) 謙(名) へりくだると、
(けん) 險(名) たかし、こ、あみ、
(けん) 儉(名) 事を省(け)き用を節すると、自ら戒め
てはしむ、にせざると、つさまやか、一以つ、徳
を差ふ、
(けん) 軒(接尾) 家を歌ふるにいふ語、一二
一、百一、
(けん) 弦(名) 弓の緒、
(けん) 言(名) ことば、
(けん) 玄(名) 赤を含む黒色、黄を含む黒色、く
ろ。『玄、天上、』

けんえーけんが

けんかーけんか

けんかーけんき

びんびーびんこ

(びんびん)「術言」(名) 自慢のことば。てしふことば。 (かへりみ、ひいき、愛顧)
(びんこ)「峯順」(名) なまけをかかると、めぐむと、

びんこーびんざ

びんこらうふな(源五郎)「名」(動)ふなの愛顧、近江國琵琶湖に生ず、大さけ二尺許、頸小くして、色白く金色を帯び、味美なり。
びんこらうむし(源五郎)「名」(動)箱組類中、箱組科に属する蟲、我國に産する最大なる箱組なり、黒褐色にして少しく緑色の光澤を帯び、鞘翅に少しく短毛あり、後肢に一爪を有す、翅招に生息し、小魚を捕食す、成後は夜間空中を飛舞す。

びんざーびんざ

ものいま。 (佛)其人の現に生を此世に受けていきながらふる間、げんせ。(文法)現に行はる、動作を表はすもの。(虚偽)又は夢幻にあらざる、實際、(虚偽)地にありあはると、「の糧食」——「ち」(現在地)「名」其物若しくは其人の現に存在しある土地。——「るん」(現在員)「名」現在其處にゐる人数。
(びんざい)「原裁判」(名)「法」當の裁判の前の裁判、控訴の裁判にては第一審の裁判をいひ、上告にては控訴の裁判をいふ。

びんざーびんざ

(びんざく)「絃索」(名) 琴又は三味線などのいと。
(びんざくわん)「検査官」(名) 或事項の検査をなす官吏。
(びんざけ)「拳酒」(名) 拳の勝負によりて飲む酒。
(びんざつ)「賢察」(名) 人の察するとの敬語。あさつし。

びんざーびんざ

きに似たるもの。
(びんざん)「職殘」(名) 職上のこりもの。
(びんざん)「檢算」(名) 簿高の再考。
(びんざん)「大蔵」(名) 大蔵省の略。
(びんざん)「大蔵」(名) 大蔵省の略。
(びんざん)「大蔵」(名) 大蔵省の略。

びんざーびんざ

法行政官、刑事の公訴を提起し法律の適用を請求し刑罰の執行を監督し、又、公益の代表者として其職權に属する事務を行ひ、若しまた民事に關して必要なりと認めるときは、通知を求め意見を述べるとを得、裁判所に對し獨立して事務を行ふ。
(びんざ)「元子」(名) 皇太子の稱。
(びんざ)「元子」(名) 皇太子の稱。
(びんざ)「元子」(名) 皇太子の稱。

けんち-けんち

「見識張」(自、四) 見識を張る、からいばりす。



けんち-けんち (けんち) 「けんち」(自、四) 見識を張る、からいばりす。

けんち-けんち

このことば、ことばを。

けんち-けんち (けんち) 「けんち」(自、四) 見識を張る、からいばりす。

けんち-けんち

けんち-けんち (けんち) 「けんち」(自、四) 見識を張る、からいばりす。

けんち-けんち (けんち) 「けんち」(自、四) 見識を張る、からいばりす。

けんち-けんち (けんち) 「けんち」(自、四) 見識を張る、からいばりす。



けんち-けんち (けんち) 「けんち」(自、四) 見識を張る、からいばりす。

けんち-けんち (けんち) 「けんち」(自、四) 見識を張る、からいばりす。

けんち-けんち (けんち) 「けんち」(自、四) 見識を張る、からいばりす。

けんち-けんち (けんち) 「けんち」(自、四) 見識を張る、からいばりす。

けんち-けんち (けんち) 「けんち」(自、四) 見識を張る、からいばりす。

けんち-けんち

けんち-けんち

けんち-けんち

げんせーけんせ

げんせい [憲政] (名) 憲法に依りて行ふ政治。立憲政治。たりの [憲政黨] (名) 明治三十一年六月自由黨と進歩黨との合同して組織せし政黨の名。又其同年九月の分裂後、舊自由黨員の母體せし黨名。はんたりの [憲政本黨] (名) 憲政黨の分裂後、進歩黨員の母體せし黨名。げんせい [縣稅] (名) 縣内に住する者、縣内に三ヶ月以上滞在する者、縣内に於て土地家屋物件を所有し若しくは使用又は營業所を有する者に對して縣の賦課する租稅。うなるさだめ。

けんせーけんせ

けんせい [憲政] (名) 憲法に依りて行ふ政治。立憲政治。たりの [憲政黨] (名) 明治三十一年六月自由黨と進歩黨との合同して組織せし政黨の名。又其同年九月の分裂後、舊自由黨員の母體せし黨名。はんたりの [憲政本黨] (名) 憲政黨の分裂後、進歩黨員の母體せし黨名。げんせい [縣稅] (名) 縣内に住する者、縣内に三ヶ月以上滞在する者、縣内に於て土地家屋物件を所有し若しくは使用又は營業所を有する者に對して縣の賦課する租稅。うなるさだめ。

けんせーけんせ

けんせい [健全] (名) 身體のすこやかなること。健全。けんせい [健全學] (名) 身の養生の學問。衛生學。けんせい [健全學] (名) 身の養生の學問。衛生學。けんせい [健全學] (名) 身の養生の學問。衛生學。けんせい [健全學] (名) 身の養生の學問。衛生學。

げんせーけんせ

けんせい [憲政] (名) 憲法に依りて行ふ政治。立憲政治。たりの [憲政黨] (名) 明治三十一年六月自由黨と進歩黨との合同して組織せし政黨の名。又其同年九月の分裂後、舊自由黨員の母體せし黨名。はんたりの [憲政本黨] (名) 憲政黨の分裂後、進歩黨員の母體せし黨名。げんせい [縣稅] (名) 縣内に住する者、縣内に三ヶ月以上滞在する者、縣内に於て土地家屋物件を所有し若しくは使用又は營業所を有する者に對して縣の賦課する租稅。うなるさだめ。

けんせーけんせ

けんせい [憲政] (名) 憲法に依りて行ふ政治。立憲政治。たりの [憲政黨] (名) 明治三十一年六月自由黨と進歩黨との合同して組織せし政黨の名。又其同年九月の分裂後、舊自由黨員の母體せし黨名。はんたりの [憲政本黨] (名) 憲政黨の分裂後、進歩黨員の母體せし黨名。げんせい [縣稅] (名) 縣内に住する者、縣内に三ヶ月以上滞在する者、縣内に於て土地家屋物件を所有し若しくは使用又は營業所を有する者に對して縣の賦課する租稅。うなるさだめ。

けんせーけんせ

けんせい [健全] (名) 身體のすこやかなること。健全。けんせい [健全學] (名) 身の養生の學問。衛生學。けんせい [健全學] (名) 身の養生の學問。衛生學。けんせい [健全學] (名) 身の養生の學問。衛生學。

げんちーげんて

を油もて煮、それに醬油又は味噌などを入れて汁にしたるもの。――煮る「巻織汁」(名) 前條(二)に同じ。

げんてーげんと

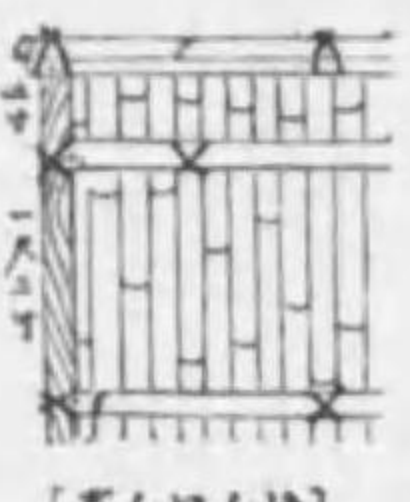
のみ、被相續人の債務及遺贈を辨濟すべきを留保する。

げんぞーげんぞ

(名) 幻燈の器械、内部を黒く塗られたる箱に伸縮自在なる圓筒を附け、其先端と箱に接觸せる所とに各凸「レンズ」を装入して、其間に繪畫の板を入れ、箱の後壁に反射鏡を附くる装置なり、今其焦點に「ランプ」を置けば、光は圓筒と箱との接觸せる處にある「レンズ」のために集束せられ強く繪畫の板を照し、筒先の「レンズ」により擴大なる倒像を現出せしむ所と行ふ所と。

けんねーげんの

もの「饑食者」(名) 饑食する人。



けんのーけんば

けんばはつ「運發」(名) 人をつかはしやると。

けんばーけんび

けんばはつ「運發」(名) 人をつかはしやると。

けんびーけんぶ

(名) 細微なる物像を拡大して見る具。一個の凸レンズに即ち顕微鏡なれど、普通顕微鏡と稱するは、圓筒の一端に凸レンズあり、これを對物(物レンズ)といふ、これに嵌入する圓筒ありて、其端に又凸レンズを備ふ、これを接眼(眼レンズ)といふ、對物レンズは焦點距離の甚だ短きものなり、但し其球面收差を減少せしめんがため、其形の甚だ小さきものを用み、對物レンズの前に物體を置き、第二の圓筒を適宜に出入して接眼(眼レンズ)より見るなり、むしめがね。

けんぶーけんべ

きこれなり、石材として種々の用に供せらる。 (けんぶく)「元服」(名) 昔時、男子成人して服を改め、髪を剃り、冠を加ふる時に行ひし儀式、此時幼名を脱して成名を付く、公家衆の元服は、髪を短くして雲の髷にて巻き、眉を剃り留めて高麗を付け、齒を黒む、うひかうより(首服、始冠) 昔時、嫁したる女の眉を剃り齒を黒め髪を九留などに結びしと、「一姿の女」。

けんべーけんぼ

事務を總理す。——志れいふ「憲兵司令部」(名) 全國の憲兵事務を總轄する所。 (けんべい)「權柄」(名) かけん、けんりよく、いきはひ、——がまし、い、い、い、(形、二) 權力を指し、あるやうに見ゆ。——つく「權柄付」(名) 權柄にまかせて事をなすと。——づら「權柄面」(名) けんべいがましき顔つき。

けんぼーけんみ

(けんぼ)「ぼろ」(元誤)(名) はかりごとの主唱者。 (けんぼ)「ぼろ」(元誤)(名) はかりごとの主唱者。 (けんぼ)「ぼろ」(元誤)(名) はかりごとの主唱者。 (けんぼ)「ぼろ」(元誤)(名) はかりごとの主唱者。 (けんぼ)「ぼろ」(元誤)(名) はかりごとの主唱者。

けんむーけんも

(けんむ)「む」(兼務)(名) かねつとむると、又、其つとめ(兼務)。「けんむ」(兼務)(名) かねつとむると、又、其つとめ(兼務)。「けんむ」(兼務)(名) かねつとむると、又、其つとめ(兼務)。「けんむ」(兼務)(名) かねつとむると、又、其つとめ(兼務)。「けんむ」(兼務)(名) かねつとむると、又、其つとめ(兼務)。

けんもーけんら

(けんも)「も」(兼務)(名) かねつとむると、又、其つとめ(兼務)。「けんも」(兼務)(名) かねつとむると、又、其つとめ(兼務)。「けんも」(兼務)(名) かねつとむると、又、其つとめ(兼務)。「けんも」(兼務)(名) かねつとむると、又、其つとめ(兼務)。「けんも」(兼務)(名) かねつとむると、又、其つとめ(兼務)。

けんりーけんり

けんり「権利」(名) ①法律の制定
保障により人の享受する利益。②物をなし得る
資格。自由行為を行使し得る分限。——「かりろ」
「権利行使」(名) ①「法」権利を行使する行為。
又、法律行為。——「きよらつ」「権利共通」
「法」共同訴訟にて、数人間に共同の権利ある場合の
稱。——「くわいふく」「権利回復」(名) ①「法」
他人のために権利を侵害せられたるものが、裁判所
の判決によりて其権利を回復すること。——「くわ」
けんひ「権利関係」(名) ①「法」権利者が法の力に
よりて義務者の意思を制限し、義務者が法の力に服
従して権利者の意思に従ふ関係。——「こうそく」
「権利拘束」(名) ①「法」訴訟の提起によりて生ずる
訴訟上の効力、民事にては訴訟の途達によりて始ま
り、其終了までは、其訴訟の原因を變更し若しくは
容に取下をなし又は更に他の裁判所にこれを訴ふ
るを得ざるものなり、刑事にては、検事の公訴に
よりて始まり、其終了までは、特定の被告人がなす
る特定の犯罪に限られ、又、検事は容に取下をなす
るを得ざるものなり。——「あち」「権利質」(名) ①「法」
「法」財産権を目的となす質権。——「あや」「権利」
者(名) 義務者に対して権利を有するもの、又、債
権者。——「あゆたい」「権利主體」(名) ①「法」法
律上権利を有する人格あるもの。
けんり「玄理」(名) あくぶかき道理
けんりつ「縣立」(名) 縣の費用を以て設立維持

けんりーけんれ

けんりり「賢慮」(名) 他人の考案の敬語。あかん
けんりり「賢慮」(名) 他人を強御し服従せし
むる威力。——「くわんけい」「権力関係」(名) ①
「法」権力者が自己の意思によりて、服従者の意思を
強御する関係。主権者と國民との関係の如きこれな
り。——「せつ」「権力説」(名) ①「倫」道徳上の規
定は非善惡の究極的根據となす一派的倫理説。——
「だんたい」「権力團體」(名) ①「法」既一ある人民
の團體にして権力の主體たるもの。
けんる「堅壘」(名) 防禦又は要害の堅固なる
とりて、攻めおとしがたきとり。
けんれい「縣令」(名) ①「法」縣知事が、官階上
一般の委任若しくは法律命令の特別の委任による
職權内に於て、其管轄区域内に發する行政命令。②
明治十九年以前の縣知事の舊稱。
けんれい「賢察」(名) たみ、百姓、「そかなると、
けんれい」「賢察」(名) いとき、びしきと、甚だおこ
けんれい「賢令」(名) ぎびしき命令。①「罰」
けんれい「見料」(名) 物を見たる損料又は報
けんれい「原料」(名) 製造のたねがある。
けんれい「春戀」(名) 戀者の念に變つたること。
けんれい「春戀」(名) 戀者の念に變つたること。
けんれい「春戀」(名) 戀者の念に變つたること。

けんれい

けんれい「牽連」(名) つながりつよくと、かゝりつ
らなると、又、つなごつぱらんと、かけつらぬると、
けんろ「官路」(名) 下民が官上に對して申出づ
べきすぢみち、「い」を聞く。
けんろん「言論」(名) 思想を言説によりて發表
すると、いひ論ずると、のぶると、「い」の自由。
けんわく「幻惑」(名) 目をまどはしくすますと、
けんわく「眩惑」(名) 見てまどはしくすますと、
けんわん「腕腕筆」(名) 腕を
宙にして物につけず、筆を直く持ちて字を書くと、
けんる「權威」(名) 権力の威勢、いきほひ。
けんる「健胃」(名) 胃を健康にする。——「ざい」
けんる「健胃劑」(名) 健胃のために飲用する藥劑。
けんをん「噴温」(名) あた、かきと。
けんをん「噴温器」(名) 寒風計に同じ。
けんをん「噴温器」(名) 寒風計に同じ。
けんをん「噴温器」(名) 寒風計に同じ。
けんをん「噴温器」(名) 寒風計に同じ。
けんをん「噴温器」(名) 寒風計に同じ。
けんをん「噴温器」(名) 寒風計に同じ。
けんをん「噴温器」(名) 寒風計に同じ。
けんをん「噴温器」(名) 寒風計に同じ。

こ

こ「蠶」(名) 「動」かひこの異稱。
こ「海鼠」(名) 「動」かまこに同じ、「くしー」
こ「木」(名) 木の幹、「の葉」(樹木)、「かほー」
こ「籠」(名) 竹にて編みたる器の總稱。かご、「ふせ
こ「格」(名) 障子の骨。「障子の段」。「書又は將
基の體の縱横の寸」
こ「孤」(名) ゆみ、きのゆみ、「一」を張り。②「歌」
圓周又は他の曲線の一部分。
こ「股」(名) ①また、またぐら。②「數」直角三角形
の一邊、其三角形の第二の角に對したる邊。
こ「戸」(名) ①はひりぐち、出入口。②とまへ、と
びら。③いへ、かざ、「一」を室じ。④酒を飲む
量、「大にして酒の甜きを嫌ふ」。「かづら」
こ「湖」(名) 陸地の凹所に多く水の湛へたる處。
こ「古」(名) もと、むかし、「い」にしへ、「一」今、
こ「賢」(名) あきんど、「愚」
こ「賢」(名) めくし、「一」者、
こ「鼓」(名) つつみ、たいこ。——「を」ならして
せむ「鳴鼓攻」(其罪をかぞへ立て、攻撃す。
こ「姑」(名) えうとめ、「よく」に事、
こ「孤」(名) 両親のなきひとり子、みなしご、「一」
を養ふ。「孤兒」。「援助なきと、ひとりだち」
こ「故」(名) もと、むかし。①ふるさと、又、ふる
き物事、「一」を吐き新を納れ。②ふるさと、ためし。
③ふるさちなみ、むかしなじみ。④こと、事件。「聰明
の「一」を知る」。⑤ゆゑ、わけ。⑥死にした。
こ「是」(代) 「これ」に同じ、「一はいかに」。「たがひ」
こ「小」(接頭) 或語に冠して、細小なる意を表
はす語。「一形」。「一山」。②或語に冠して、僅少な
意を表はす語。「一高し」。③はす語。「一紫」。
こ「濃」(接頭) 或語に冠して、色の濃きさまを表

こ

こ「子」(接尾) 婦人の名の下につくる語。「春」
「夏」
こ「絢」(接尾) 絳紫の繻羅(きん)を飾ふるに
こ「處」(接尾) ところ、ばよ、「い」ざ、「一」
こ「箇」(接尾) 物の數を數ふるに用ふる語。「十一」
「三」
こ「戸」(接尾) 家數をかぞふるに用ふる語。「五十
こ「基」(名) 基礎の目、黒白の碁石を並べ、圍み
はせて勝負を決するもの、地を廣く占めたるを勝と
す。——「を」りつ、碁を行ふ。——「をかこむ
こ「豆油」(名) 大豆を水にひたし、石灰を加へて碾
きたる油、油畫の繪具などに使用す。
こ「午」(名) 十二支の一。うま。①正午、時已に
こ「期」(名) 月、とき、期限。「此の」に及びて、
こ「伍」(名) 支那の古昔、相依り相保つものと定
めし五戸の稱。古昔、軍隊編制の最下級、五人を
一組としたるもの。②くみ、なから。③隊列、行列。
こ「後」(名) のち、あと、「其」
こ「五」(數) いつ、
こ「御」(名) 御前の略言、婦人の尊稱。「伊勢の」
こ「御」(接頭) 或語に冠して、尊敬の意を表はす
語。「一賢」。②「御」
こ「御」(接尾) 目上の人の稱に添へて呼ぶ語。「母
こ「クス」(名) 「がいたん」に似たものに
こ「ビー」(名) 咖啡「Coffee」(名) 咖啡樹の果實の
殻を焙煎して粉となしたるもの、これに砂糖を加
へ熱湯に和して飲む。——「の」。「咖啡樹」
Coffee arabica(名) ①「植」西草科に屬する小灌
木熱帯地方に産す、葉は楕圓狀披針形にして對生
す、花は白色にして香氣あり莢に生ず、果實は大

こ

けんれい「牽連」(名) つながりつよくと、かゝりつ
らなると、又、つなごつぱらんと、かけつらぬると、
けんろ「官路」(名) 下民が官上に對して申出づ
べきすぢみち、「い」を聞く。
けんろん「言論」(名) 思想を言説によりて發表
すると、いひ論ずると、のぶると、「い」の自由。
けんわく「幻惑」(名) 目をまどはしくすますと、
けんわく「眩惑」(名) 見てまどはしくすますと、
けんわん「腕腕筆」(名) 腕を
宙にして物につけず、筆を直く持ちて字を書くと、
けんる「權威」(名) 権力の威勢、いきほひ。
けんる「健胃」(名) 胃を健康にする。——「ざい」
けんる「健胃劑」(名) 健胃のために飲用する藥劑。
けんをん「噴温」(名) あた、かきと。
けんをん「噴温器」(名) 寒風計に同じ。
けんをん「噴温器」(名) 寒風計に同じ。
けんをん「噴温器」(名) 寒風計に同じ。
けんをん「噴温器」(名) 寒風計に同じ。
けんをん「噴温器」(名) 寒風計に同じ。
けんをん「噴温器」(名) 寒風計に同じ。
けんをん「噴温器」(名) 寒風計に同じ。
けんをん「噴温器」(名) 寒風計に同じ。
けんをん「噴温器」(名) 寒風計に同じ。
けんをん「噴温器」(名) 寒風計に同じ。
けんをん「噴温器」(名) 寒風計に同じ。
けんをん「噴温器」(名) 寒風計に同じ。
けんをん「噴温器」(名) 寒風計に同じ。
けんをん「噴温器」(名) 寒風計に同じ。

こうきこう

する事業の如きこれなり。——志ん「公共心」(名) 公共の利害に對して同情深き心、公共のために盡さんとする心。——志ん「公共心」(名) 國家に對して公法上の義務を負担せる團體、郡組合、町村組合、水利組合等の如きこれなり。「習徳をみがくと」

こうけいこう

(こうけい)「公債」(名) くぎやう、くげ。(こうけい)「口徑」(名) 口のさしわたし。「二十(こうけい)「後繼」(名) あとつぎ。「七福の大徳」(こうけい)「紅圍」(名) 美人の圍(「翠帳」)。(こうけい)「背紫」(名) 筋肉の結締せられてある所、すぢのつけね。轉じて、物事の急所。(こうけい)「後景」(名) 背後の光景。舞臺の後景などに設くる景色置、かきわり。(こうけい)「虹霓」(名) 虹。

こうげいこう

手形の割引附圖を抵當としたる貸付等を營業とす、其拂込金額の十倍を限り債券を發行するを得、若し又外國に於ける公益の事業に對し、資金の需要ある場合に、主務大臣の認可を得たるときは、規定外の債券を發行するを得。(こうげい)「工業」(名) 粗製品に人工を加へこれが形態を變更して、更に有用のものとなす生産業、即ち製造業、昔時のものは規模狭小にして家内のなりしが、近代は機械の發明により規模廣大となり工場となれり。——がく「かち」(工業學校) (名) 實業學校の一、工業に關する學問技術を教授する所。——志ん「工業時代」(名) (経) 經濟上の時期を五分したるもの、第五、即ち今日の時代にして、分業協力盛んに行はれ信用ます。利用せられ、各種の機械發明せられ大生産法行はる。——志ん「工業所有權」(名) (法) 工業上に於ける意匠、發明、商標等に關する所有權、これが保護に關しては各國同體條約あり。——ぢや「工業場」(名) ころぢやう(工場)に同じ。

こうけいこう

務を監督し、後見人の缺けたる場合には、其後任者の就任を備し又は親族會議を招集して其選任をなし、後見人と後見を受ける人ととの利益相反する場合に、後見を受ける人を代表し、若し急迫なる場合には、必要の處分をなすもの、最後に親権を行ひたるもの、指定によるものを指定後見監督人といひ、親族會議の選定によるものを指定後見監督人といふ。——志ん「後見人」(名) (法) 禁治産者又は未成年者の後見をなす人、最後に親権を行ひたるもの、指定によるものを指定後見人といひ、法律の規定によるものを法定後見人といひ、親族會議の選定によるものを選定後見人といふ。(こうけん)「公債」(名) 個人が公法上に於ける權利、例へば選舉權被選舉權等の如きこれなり。——はく「たつ」(公權剝奪) (名) はくたつ(こうけん)に同じ。——てい「公權停止」(名) てい(こうけん)に同じ。「なく告ぐると、いまこうけん」に同じ。(こうけん)「公言」(名) かくまぎにいふと。又、あま(こうけん)「恒言」(名) つねにいふと。又、其言(こうけん)「控弦」(名) 馬を控へて弦を引くもの、義、騎射の兵士。(こうけん)「恒見圍」(名) (天) 常に地平上に見ゆる恆星の所在の範圍、極を中心とし觀測地の緯度(等)に同じしき角度を半徑とする圓なり。「ん、(こう)「後顧」(名) あとのきざかひ、ものけね(こう)「口語」(名) 文章上には使用せざる通俗のなまりことば、文語の對(こう)「口腔」(名) 口内の空所、其門戸は唇にして上は口蓋下は舌なり、左右の壁を頰とす。(こう)「鴻溝」(名) もはいななるみぞ。——だて、まきり、(こう)「」

こうこくこう

(こうこく)「公告」(名) 廣く世上に告ぐると。(こうこく)「後刻」(名) ごとく、のちほど。(こうこく)「興國」(名) 勢のこりふるふ國。(こうこく)「後昆」(名) のちの世の人。又、子孫。(こうこく)「公債」(名) 貨幣の實質の品位量目と法定の品位量目との差、我國の品位の公債は、金貨は千分一にして銀貨は千分三、量目は各種割合を異にする。度量衡にて、一定の標準と實際のものとの差異を法律にて認許したる範圍。(こうこく)「後妻」(名) のちめひ、ごさい、(續室)。(こうこく)「口才」(名) 口前のよきと、(辯口)。(こうこく)「公裁」(名) おはやけのさびき、裁判。(こうこく)「公債」(名) 國家又は地方自治體が、收支の適合を圖るため臨時に起す債務の稱、地方自治體のもの、これを地方債といひ、俗に公債といへば國家の債務の稱とせり、其償還の時期は必ずしも一定せず、豫め償還の時期を定めずして、財政の寛裕なるとき隨意に償還を行ふものあり、又、豫め償還の年限を定め、其期限に至れば必ずこれを償還するものあり、大藏省證券の如きもまた短期の公債なり、募集の方法は政府が公衆に對して債券の賣出をなし申込をなさしむるものと、銀行をしてこれが請負をなさしめ、更に銀行をして賣出をなさしむるものとあり、應募者の國籍を標準として、内國債と外國債とに區別す。——志ん「公債證券」(名) 公債特に國家の債務に對して發行する證券。(こうこく)「紅藻」(名) (植) 根莖葉の區別判然せざる柔軟藻類にして、紅色の色素を多く含有するもの、あまきさのり等にこれに屬す。(こうこく)「構想」(名) つくりかまふるかんがへ、(さう)「想像」に同じ。

こうさこう

(こうさ)「鴻爪」(名) 鴻が南に來るとき、跡のさるべに雪に爪痕をつくれど、北に歸るときは、雪すてに消えて爪痕なき義に出づ行衛の定かならず又は徑路の不明なるをいふ語。(こうさ)「公葬」(名) 國事に殉じられたる人などの葬式を官府にて營むと。(こうさ)「後裝」(名) 銃身又は砲身の底より彈藥を裝填すると、又、其裝置「一銃」(砲)。(こうさ)「後像」(名) (心) 別離去りたる後其感覺の尙は意圖中に殘留せるもの。(こうさ)「構造」(名) こしん(へ)くるると、かま(つ)くるると、つくりかた、たてかた、かま(へ)かた、——こく「構造谷」(名) (地) 地殼の褶曲若しくは斷層によりて生じたる谷。——志ん「構造山岳」(名) (地) 地殼の褶曲又は斷層によりて生じたる山嶽。——志ん「構造式」(名) (化) 化學符號に原子價を附記して、符號と符號とを連接する分子式、例へば水はH₂O、Hなるが如し。(こうさ)「告朔」(名) 古昔、四季の初めに、大極殿に出御ありて、百官の上る公文を御覽ありしと。支那の古代に、諸侯が前年末に天子より受けし曆と政令とを廟に納めおき、毎月の初に特羊を廟に供へて其月の曆と政令とを受けしと。(こうさ)「工作」(名) つくると、こしん(ふ)と。(こうさ)「工事」(名) 土木のわざ。——志ん「工作船」(名) 船内に機械を据(て)付け、艦隊に附隨して、軍艦の船體・機関及兵器等の修繕をなす船。——志ん「工作物」(名) 工作したるもの、製造(こうさ)「恒産」(名) さまざまたる資産。「品、(こうさ)「小牛」(名) 牛の子、小さき牛(體)。(こうさ)「後肢」(名) うしろあし。

ころあーころあ

(ころあ「貢士」名) 諸方より選抜して官府に出
す人の稱。維新後、一時諸藩より選抜して朝廷に
出し、人の稱。
(ころあ「後嗣」名) 上つぎ、又、子孫。
(ころあ「公私」名) おはやくとわたくしと、官府
と民間と、社会と個人と。
(ころあ「公使」名) 外交官の一、外務大臣の監督
訓令を受け、條約國に駐在して自國を代表するも
の、法令の定むる所により、其國に於ける自國臣民
在留者の保護取締をなす職權を有す、特命全權公
使、辦理公使及代理公使の區別あり。(欽差大臣)
(ころあ「厚志」名) 厚きこゝろ、さし、厚情。
(ころあ「公子」名) 貴族の男子、わかとの。
(ころあ「公事」名) おはやくの事、かみのつと
め、公用。●公共に關する事務。
(ころあ「工事」名) 工作の仕事、普通(ツツ)の作業。
(ころあ「後事」名) 將來又は死後の事、「一を託す」。
(ころあ「口耳」名) ●口と耳と、「一の聲」。
きたる事を同化して自己の知國となす能なく、其ま
ゝにこれを言説にあぐると、「一の學」。「さんず
ん」(口耳三寸) 學問の同化力少なく知國の淺少
なるにいふ。
(ころあ「公示」名) おはやくに告めすと、ひろく
めめすと。●さいこく「公示催告」名。
「法」權利又は請求の届出をなすしむるためになす
催告、此手續の管轄は區裁判所に屬し、多くは官報
又は公報に掲載してこれをなす。若し其期間(少な
くとも掲載當日より六月)を過ぎて、當事者これ
が届出をなさざるときは失權となるものとす。又、
失踪者に届出をなさしむるために多くは此手續
をなす。●そりだつ「公示送達」名。「法」

ころあーころあ

訴訟上に於ける書類送達の一法、當事者の現在地知
れざるか、若しくは通常の方法による能はざるかの
ときに行ふものにして、掲示場又は新聞紙などに掲
載してこれをなす。
(ころあ「厚酬」名) てあつき報酬(ほうじゅう)。
(ころあ「厚謝」名) としへをさむると。
(ころあ「公式」名) ●おはやくに定まりたる
方法。●計算の法を表はす式。●法令公布の式。
(ころあ「公使館」名) 公使が駐在國に
於て事務を扱ふ場所、國際法上本國の領地と看做
され、駐在國の主權の範圍外なりとす。●あよ
きくわん「公使館書記官」名) 公使館に附屬
し、公使の職務を補助する高等官。
(ころあ「後室」名) やもめ、未亡人、(主に、身分
ある人にいふ)。(ひま)。
(ころあ「口實」名) いひたつる種、いひぐさ、い
(ころあ「攻習」名) をさめなふと。
(ころあ「厚謝」名) あつくり報謝をいふと。
(ころあ「巧者」名) 事に巧みなり、上手(うでず)。
(ころあ「叩謝」名) 頭をたれて謝すと。
(ころあ「紅品」名) 紅色の物品。
(ころあ「工匠」名) ●たくみ、だいく、職
人。●工作物にあはれたる意匠。「ある情
(ころあ「厚情」名) 厚きなさけ、ねんご
(ころあ「口上」名) ●ことばにていひ傳
ふる。●御行物にて、其仕組の委細を陳ぶると、
「いひ」(口上言二名) 口上をいふ人、
かんばん(口上看板一名) 御行物にて其仕組
の趣を記し出す看板。
(ころあ「攻城」名) 城壁をせむると、「一野
歌」。「はりの」(攻城砲一名) 巨大なる一種

ころあーころあ

の火砲、威力強大にして堡壘庫會等の堅牢物を破壊
し、其他多大の損害を敵兵に與ふるために用ひら
る、通常運搬に八頭の馬を用ふ。
(ころあ「公生涯」名) 一生運の
中公共の事に關係して活動したる間の稱。
(ころあ「公爵」名) 五等爵の第一。
(ころあ「侯爵」名) 五等爵の第二。
(ころあ「公主」名) 支那にて、君王の女の稱。
(ころあ「叩首」名) 首を地につけて禮拜する
と、いとねんごるに辭儀すと。
(ころあ「鉤取」名) ●かぎにかけてとると。
●内にもあるもの又は隠したる事實などを引出すと。
(ころあ「攻守同盟」名) 二國以上同盟して、
さりめい「攻守同盟」名) 二國以上同盟して、
其中の一國が同盟外の敵國と開戦する場合に、これ
を助けて敵國と開戦すと。「士、大體」。
(ころあ「鴻儒」名) 學問深き人、大學者、博
(ころあ「口授」名) 口づからさづけつたふ
と、直接にをし(いふ)と、くさず。
(ころあ「口受」名) 口づからのべいふ所をう
けたまはると。
(ころあ「公衆」名) 世間の人々、社会の人
(ころあ「口述」名) 口にてのぶると、
あけん(口述試験)名) 口にて問題を述べて、
口にて回答をなすしむる試験。
(ころあ「紅綬褒章」名) 自
己の危難を顧みずして人命を救助したるものに、下賜
せらる、褒章。
(ころあ「公署」名) ●やくは、やくまよ、●公
吏の事務を扱ふ所。
(ころあ「苟且」名) まにあはせ、かりそめ、こ

ころあーころあ

(ころあ「口書」名) くちがき、口供、供状。
(ころあ「洪鐘」名) 大いなるつりがね。
(ころあ「公證」名) ●表立ちたる證據。
●「法」國家又は公共團體の機關が、其職權により或事
實を證明するためになす行為又は形跡。
(ころあ「公證人」名) 人民の囑託によ
り、民事に關する公正證書を作成する公吏、司法大
臣に歸屬す。●やくは「公證人役場」名)
公證人が其事務を扱ふ役場。
(ころあ「公職」名) 官府又は公共團體の職
務、おはやくのつとめ。
(ころあ「紅い」名) くれなゐのいろ、あか
さいいろ。●さうり「紅い藻」名) 「植」こ
さう「紅藻」に同じ。
(ころあ「誦尊」名) はづかしめ、はざ。
(ころあ「後身」名) ●生まれかほりの身。
●境遇一變化したる以後の身。
(ころあ「後進」名) ●後より進みゆくこと、「
の士」●後より進みゆく人。
(ころあ「功臣」名) 國家に功勞ある臣、明治の
(ころあ「紅唇」名) くれなゐのくちびる、又、
べにをつけたるくちびる。
(ころあ「後人」名) のちの人、後世の人。
(ころあ「興信所」名) 取引の便利を圖
り、かねて其危険の豫防を目的として、商賣者の知
しんと欲する他人の財産上の状態につき、確實なる
調査又は報道をなす所。
(ころあ「自、さ變」名) さぶらふ、はんべ
(ころあ「他、さ變」名) うかまふ、みる。
(ころあ「自、さ變」名) 三位以上の人の
死去せらるる、にいふ調。

ころあーころあ

(ころあ「困、自、さ變」名) こまる、困却す。
(ころあ「洪水」名) おほきづ、大水。
(ころあ「後世」名) 後の世、まつだい。
(ころあ「後生」名) 後に生まるる人、後の學ぶ
(ころあ「厚情」名) あつきななさけ。「人、
(ころあ「理性」名) 「理」物質の分子と分子と
の間に空隙ありといふと。
(ころあ「控制」名) ひきいて、自由の行動をなさ
しめざると、ひかへとむると。
(ころあ「攻勢」名) 攻めか、あいきはひ。
(ころあ「厚生」名) 生活の道をゆたかにする
こと、「一利用の道」。
(ころあ「構成」名) かまへ、つくること、くみたて
(ころあ「恆星」名) 位置を變ぜざる星、太陽も、
星群の中心となりて其位置を變ぜざる星、太陽も、
の恆星なり。●びつ「恆星月」名) 天、月が
恆星に對し地球を一周する時間、二十七日七時四十
三分十一秒餘なり。●あ「恆星時」名) 天、
地球が恆星に對し、一回の自転をなす時間を時の單
位として測りたる時間。●あつ「恆星日」名)
「天」一の恆星が南中してより、再び南中するまでの
時間。●あ「恆星年」名) 天、太陽が一
の恆星に對し或方向に見えてより、同一の恆星に對
し、同一の方向に再び太陽の見ゆるまでの時間の稱
にして、三百六十五日六時九分九秒なりとす。
(ころあ「公正」名) ●偏頗又は邪曲なきこと。
●あよりあよ「公正證書」名) 「法」人民の
囑託に應じて、公證人が作成したる民事上の證書、
法律上完全なる證據として、其正本に依りたる裁判
所の命令のみを得ば、これが執行をなすとすを得。

ころあーころあ

(ころあ「恆惺惺天」名) 心算の
つねに明かにしてゆくからさると。「よと」。
(ころあ「咲笑」名) 大いに笑ふこと、どつと笑
(ころあ「口跡」名) ことばづかひ、こわい。
(ころあ「功績」名) てがら、いさを、(勳績)。
(ころあ「紅石英」名) 紅色の石英。
(ころあ「洪積土」名) 「地」洪水の作用によ
りて積り重なりたる地層。
(ころあ「口舌」名) くちと舌たと、轉じて、こ
とば、ものいひ、「一のあらしむ」。
(ころあ「口錢」名) 賣買のなかだちしたる手
(ころあ「口占」名) くちざさき。「歌料」。
(ころあ「工錢」名) 作業工事のちんせん。
(ころあ「公選」名) 公衆よりの選舉。
(ころあ「後先」名) あとさき。
(ころあ「攻戦」名) 攻め戦ふと、又、城を攻む
ると野にて戦ふと。
(ころあ「紅髯」名) ●あかきくちひげ、あかひ
げ。●髯の紅色なるより、西洋人の稱、「にいふ調」。
(ころあ「哄然」名) 一度にどつと笑ふさま
(ころあ「公然」名) 世間に知れわたりたる
さま又は秘密にせざるさまにいふ調、おはやくなる
さまにいふ調。●のひみつ「公然秘密」
(名) ●秘密にてあるべき物事が、世間にひろくも
れ開てあると。●公然にして疑ふべき所なきや
うなれど、其實體は不思議にして知るべからざる
と、「天地は一なり」。
(ころあ「公訴」名) 檢察官が特定の犯罪ハに對し
て、其裁判を裁判所に求むると。
(ころあ「貢租」名) かつぎ、ねんぐ、(租税)。
(ころあ「後素」名) 論語に出づ、●魯國をみがく

こうばーこうは

又は生計に必要な材料物品を購買して、これを組合員に分配するために設立したる組合、——りよく「購買力」(名) 物品をあらがひかふ財力、

こうはーこうふ

へられたる権利の主体、例へば自治體の如きこれなり、私法人の對、

こうふーこうへ

地方に於ける西風の如きこれなり、

こうべーこうみ

胸に懸じ、且工兵の改良進歩に就きて審議立案をなす機關工兵の佐官を以てこれを組織す、

こうむーこうよ

村を構成する住民中公民権を有するもの、稱、其資格は帝國臣民にして公権を有し、且一戸を構へ治産の業を受けざる満二十五歳以上の男子にして、二年以上其市町村の住民となり其市町村の負擔を分任し、其市町村内に地租若しくは直接間接二種以上を納むるものとす、

こうよーこうり

——せいげん「公用制限」(名) (法) 國家が公用のために、特定物に對する所有權を制限する行政處分、されど所有權は消滅するものにあらずして、行政處分の解除とともに復用するものとす、例へば公用の工事のために、一時隣接地を占有使用するが如し、



こりりーこりり

して官吏にあらざるもの、軌達吏・公證人乃至自治體の吏員等の類これなり。
(こりり) 功利 (名) 功名と利益と。又、功績あり利益あると。
(こりり) 功利 (名) 功績と利益と。又、功績あり利益あると。
(こりり) 功利 (名) 功績と利益と。又、功績あり利益あると。

こりりーごらん

(こりり) 公力 (名) 個人又は團體を強制し服従せしむる國家又は社會の威力。
(こりり) 公力 (名) 個人又は團體を強制し服従せしむる國家又は社會の威力。
(こりり) 公力 (名) 個人又は團體を強制し服従せしむる國家又は社會の威力。

こえーこか

こえ (肥) (名) 土地に使用して、地味を肥やし生産力をよたかにするもの。こやし、ひれう。
こえ (越) (接尾) こゆる路、峠、伊賀。
こえ (越) (接尾) こゆる路、峠、伊賀。

の葉をまきつくりたるものにて、悲哀の音を發すといふ。
(こか) 古柯 (名) ふるきえだ。
(こか) 古雅 (名) 古代の風ありて風雅なる。又、ふるびて雅致多きと。

(こか) 誤解 (名) 理會をあやまると意味をとりちがふと。げしちがひ。
(こかい) 五街道 (名) 昔時、江口を起點としたる五つの街道。即ち、東海道、中山道、大曾街道、日光街道、甲州街道、奥州街道の稱。
(こかい) 沙蠶 (名) 蠶の一種。蠶の幼虫は、桑の葉を食して、糸を吐き、繭を吐く。繭は、絹の原料となる。

(こか) 御幸 (名) 主上のみゆき。
(こか) 五港 (名) 我國最初の開港場たりし横濱、神戸、長崎、新潟、函館の稱。
(こか) 小格子 (名) 小きき格子。

(こか) 小堀 (名) ちいさき堀。
(こか) 小堀 (名) ちいさき堀。
(こか) 小堀 (名) ちいさき堀。

(こか) 五角 (名) 互に力量優劣無きと。互格。
(こか) 五嶽 (名) 支那にある五つの大山。即ち、泰山、衡山、華山、恒山、嵩山。
(こか) 語學 (名) 言語の發達及變化等に就きて研究する學。

(こか) 小頭 (名) 一群の中の一部の長たる位地にあるもの。相模の。
(こか) 粉屑 (名) 穀類などの粉になりたる物。
(こか) 粉屑 (名) 穀類などの粉になりたる物。

こかーこか

こかーこか

こかーこか

こがたーこがは

こがたぬ「小刀」(名) 小きき刀、ナイフ、(前刀、後刀)。
 こがたつ「枯湯」(名) かわらびかわくと、(名) しくたると、つくると、(詩)「こがたつ」(名)。
 こがね「黄金」(名) ①わうごん、(名) ②金貨、(名) ③かねいり、(名) ④いろ「黄金色」(名) かねの如き黄色、やまぶきいろ、(大) ⑤「黄金草」(名) (動) ⑥「黄金虫」(名) (動) ⑦「黄金子」(名) (動) ⑧「黄金目」(名) (動) ⑨「黄金子」(名) (動) ⑩「黄金目」(名) (動) ⑪「黄金子」(名) (動) ⑫「黄金目」(名) (動) ⑬「黄金子」(名) (動) ⑭「黄金目」(名) (動) ⑮「黄金子」(名) (動) ⑯「黄金目」(名) (動) ⑰「黄金子」(名) (動) ⑱「黄金目」(名) (動) ⑲「黄金子」(名) (動) ⑳「黄金目」(名) (動) ㉑「黄金子」(名) (動) ㉒「黄金目」(名) (動) ㉓「黄金子」(名) (動) ㉔「黄金目」(名) (動) ㉕「黄金子」(名) (動) ㉖「黄金目」(名) (動) ㉗「黄金子」(名) (動) ㉘「黄金目」(名) (動) ㉙「黄金子」(名) (動) ㉚「黄金目」(名) (動) ㉛「黄金子」(名) (動) ㉜「黄金目」(名) (動) ㉝「黄金子」(名) (動) ㉞「黄金目」(名) (動) ㉟「黄金子」(名) (動) ㊱「黄金目」(名) (動) ㊲「黄金子」(名) (動) ㊳「黄金目」(名) (動) ㊴「黄金子」(名) (動) ㊵「黄金目」(名) (動) ㊶「黄金子」(名) (動) ㊷「黄金目」(名) (動) ㊸「黄金子」(名) (動) ㊹「黄金目」(名) (動) ㊺「黄金子」(名) (動) ㊻「黄金目」(名) (動) ㊼「黄金子」(名) (動) ㊽「黄金目」(名) (動) ㊾「黄金子」(名) (動) ㊿「黄金目」(名) (動)

こがひーこがる

こがひ「霞」(名) かひこを養ふと、(養) ①こがひ「子養」(名) ②子を養ふと、(養) ③こがひ「小買」(名) ④一時に多量の買入をなす、(買) ⑤こがひ「小貝」(名) ⑥漢字の偏の名、財・貯などの字の左方の貝の字の偏、(貝) ⑦こがひ「小腕」(名) ⑧小きかひな、(腕) ⑨こがひ「子轉」(名) ⑩出産に臨み、胎内の子の位置を顛倒して、頭部の自然に下方に向ふと、(轉) ⑪こがひ「五加棒」(名) ⑫一種の菓子、(棒) ⑬こがひ「小鳥」(名) ⑭小鳥の略、(鳥) ⑮こがひ「小鴨」(名) ⑯小鴨の略、(鴨) ⑰こがひ「小雀」(名) ⑱小雀の略、(雀) ⑲こがひ「小鳩」(名) ⑳小鳩の略、(鳩) ㉑こがひ「小燕」(名) ㉒小燕の略、(燕) ㉓こがひ「小蜂」(名) ㉔小蜂の略、(蜂) ㉕こがひ「小蝶」(名) ㉖小蝶の略、(蝶) ㉗こがひ「小蛾」(名) ㉘小蛾の略、(蛾) ㉙こがひ「小蚊」(名) ㉚小蚊の略、(蚊) ㉛こがひ「小蠅」(名) ㉜小蠅の略、(蠅) ㉝こがひ「小蜘蛛」(名) ㉞小蜘蛛の略、(蜘蛛) ㉟こがひ「小蜈蚣」(名) ㊱小蜈蚣の略、(蜈蚣) ㊲こがひ「小蛇」(名) ㊳小蛇の略、(蛇) ㊴こがひ「小鱗」(名) ㊵小鱗の略、(鱗) ㊶こがひ「小魚」(名) ㊷小魚の略、(魚) ㊸こがひ「小蟹」(名) ㊹小蟹の略、(蟹) ㊺こがひ「小貝」(名) ㊻小貝の略、(貝) ㊼こがひ「小螺」(名) ㊽小螺の略、(螺) ㊾こがひ「小蛤」(名) ㊿小蛤の略、(蛤)



こがひ

こがれーこせは

こがれ「焦死」(名) ①深く悲ひ甚ふ、(死) ②深く悲ひ甚ふ、(死) ③深く悲ひ甚ふ、(死) ④深く悲ひ甚ふ、(死) ⑤深く悲ひ甚ふ、(死) ⑥深く悲ひ甚ふ、(死) ⑦深く悲ひ甚ふ、(死) ⑧深く悲ひ甚ふ、(死) ⑨深く悲ひ甚ふ、(死) ⑩深く悲ひ甚ふ、(死) ⑪深く悲ひ甚ふ、(死) ⑫深く悲ひ甚ふ、(死) ⑬深く悲ひ甚ふ、(死) ⑭深く悲ひ甚ふ、(死) ⑮深く悲ひ甚ふ、(死) ⑯深く悲ひ甚ふ、(死) ⑰深く悲ひ甚ふ、(死) ⑱深く悲ひ甚ふ、(死) ⑲深く悲ひ甚ふ、(死) ⑳深く悲ひ甚ふ、(死) ㉑深く悲ひ甚ふ、(死) ㉒深く悲ひ甚ふ、(死) ㉓深く悲ひ甚ふ、(死) ㉔深く悲ひ甚ふ、(死) ㉕深く悲ひ甚ふ、(死) ㉖深く悲ひ甚ふ、(死) ㉗深く悲ひ甚ふ、(死) ㉘深く悲ひ甚ふ、(死) ㉙深く悲ひ甚ふ、(死) ㉚深く悲ひ甚ふ、(死) ㉛深く悲ひ甚ふ、(死) ㉜深く悲ひ甚ふ、(死) ㉝深く悲ひ甚ふ、(死) ㉞深く悲ひ甚ふ、(死) ㉟深く悲ひ甚ふ、(死) ㊱深く悲ひ甚ふ、(死) ㊲深く悲ひ甚ふ、(死) ㊳深く悲ひ甚ふ、(死) ㊴深く悲ひ甚ふ、(死) ㊵深く悲ひ甚ふ、(死) ㊶深く悲ひ甚ふ、(死) ㊷深く悲ひ甚ふ、(死) ㊸深く悲ひ甚ふ、(死) ㊹深く悲ひ甚ふ、(死) ㊺深く悲ひ甚ふ、(死) ㊻深く悲ひ甚ふ、(死) ㊼深く悲ひ甚ふ、(死) ㊽深く悲ひ甚ふ、(死) ㊾深く悲ひ甚ふ、(死) ㊿深く悲ひ甚ふ、(死)

こがたーこがは

こがたぬ「小刀」(名) 小きき刀、ナイフ、(前刀、後刀)。
 こがたつ「枯湯」(名) かわらびかわくと、(名) しくたると、つくると、(詩)「こがたつ」(名)。
 こがね「黄金」(名) ①わうごん、(名) ②金貨、(名) ③かねいり、(名) ④いろ「黄金色」(名) かねの如き黄色、やまぶきいろ、(大) ⑤「黄金草」(名) (動) ⑥「黄金虫」(名) (動) ⑦「黄金子」(名) (動) ⑧「黄金目」(名) (動) ⑨「黄金子」(名) (動) ⑩「黄金目」(名) (動) ⑪「黄金子」(名) (動) ⑫「黄金目」(名) (動) ⑬「黄金子」(名) (動) ⑭「黄金目」(名) (動) ⑮「黄金子」(名) (動) ⑯「黄金目」(名) (動) ⑰「黄金子」(名) (動) ⑱「黄金目」(名) (動) ⑲「黄金子」(名) (動) ⑳「黄金目」(名) (動) ㉑「黄金子」(名) (動) ㉒「黄金目」(名) (動) ㉓「黄金子」(名) (動) ㉔「黄金目」(名) (動) ㉕「黄金子」(名) (動) ㉖「黄金目」(名) (動) ㉗「黄金子」(名) (動) ㉘「黄金目」(名) (動) ㉙「黄金子」(名) (動) ㉚「黄金目」(名) (動) ㉛「黄金子」(名) (動) ㉜「黄金目」(名) (動) ㉝「黄金子」(名) (動) ㉞「黄金目」(名) (動) ㉟「黄金子」(名) (動) ㊱「黄金目」(名) (動) ㊲「黄金子」(名) (動) ㊳「黄金目」(名) (動) ㊴「黄金子」(名) (動) ㊵「黄金目」(名) (動) ㊶「黄金子」(名) (動) ㊷「黄金目」(名) (動) ㊸「黄金子」(名) (動) ㊹「黄金目」(名) (動) ㊺「黄金子」(名) (動) ㊻「黄金目」(名) (動) ㊼「黄金子」(名) (動) ㊽「黄金目」(名) (動) ㊾「黄金子」(名) (動) ㊿「黄金目」(名) (動)

こがひーこがる

こがひ「霞」(名) かひこを養ふと、(養) ①こがひ「子養」(名) ②子を養ふと、(養) ③こがひ「小買」(名) ④一時に多量の買入をなす、(買) ⑤こがひ「小貝」(名) ⑥漢字の偏の名、財・貯などの字の左方の貝の字の偏、(貝) ⑦こがひ「小腕」(名) ⑧小きかひな、(腕) ⑨こがひ「子轉」(名) ⑩出産に臨み、胎内の子の位置を顛倒して、頭部の自然に下方に向ふと、(轉) ⑪こがひ「五加棒」(名) ⑫一種の菓子、(棒) ⑬こがひ「小鳥」(名) ⑭小鳥の略、(鳥) ⑮こがひ「小鴨」(名) ⑯小鴨の略、(鴨) ⑰こがひ「小雀」(名) ⑱小雀の略、(雀) ⑲こがひ「小鳩」(名) ⑳小鳩の略、(鳩) ㉑こがひ「小燕」(名) ㉒小燕の略、(燕) ㉓こがひ「小蜂」(名) ㉔小蜂の略、(蜂) ㉕こがひ「小蝶」(名) ㉖小蝶の略、(蝶) ㉗こがひ「小蛾」(名) ㉘小蛾の略、(蛾) ㉙こがひ「小蚊」(名) ㉚小蚊の略、(蚊) ㉛こがひ「小蠅」(名) ㉜小蠅の略、(蠅) ㉝こがひ「小蜘蛛」(名) ㉞小蜘蛛の略、(蜘蛛) ㉟こがひ「小蜈蚣」(名) ㊱小蜈蚣の略、(蜈蚣) ㊲こがひ「小蛇」(名) ㊳小蛇の略、(蛇) ㊴こがひ「小鱗」(名) ㊵小鱗の略、(鱗) ㊶こがひ「小魚」(名) ㊷小魚の略、(魚) ㊸こがひ「小蟹」(名) ㊹小蟹の略、(蟹) ㊺こがひ「小貝」(名) ㊻小貝の略、(貝) ㊼こがひ「小螺」(名) ㊽小螺の略、(螺) ㊾こがひ「小蛤」(名) ㊿小蛤の略、(蛤)

こがれーこせは

こがれ「焦死」(名) ①深く悲ひ甚ふ、(死) ②深く悲ひ甚ふ、(死) ③深く悲ひ甚ふ、(死) ④深く悲ひ甚ふ、(死) ⑤深く悲ひ甚ふ、(死) ⑥深く悲ひ甚ふ、(死) ⑦深く悲ひ甚ふ、(死) ⑧深く悲ひ甚ふ、(死) ⑨深く悲ひ甚ふ、(死) ⑩深く悲ひ甚ふ、(死) ⑪深く悲ひ甚ふ、(死) ⑫深く悲ひ甚ふ、(死) ⑬深く悲ひ甚ふ、(死) ⑭深く悲ひ甚ふ、(死) ⑮深く悲ひ甚ふ、(死) ⑯深く悲ひ甚ふ、(死) ⑰深く悲ひ甚ふ、(死) ⑱深く悲ひ甚ふ、(死) ⑲深く悲ひ甚ふ、(死) ⑳深く悲ひ甚ふ、(死) ㉑深く悲ひ甚ふ、(死) ㉒深く悲ひ甚ふ、(死) ㉓深く悲ひ甚ふ、(死) ㉔深く悲ひ甚ふ、(死) ㉕深く悲ひ甚ふ、(死) ㉖深く悲ひ甚ふ、(死) ㉗深く悲ひ甚ふ、(死) ㉘深く悲ひ甚ふ、(死) ㉙深く悲ひ甚ふ、(死) ㉚深く悲ひ甚ふ、(死) ㉛深く悲ひ甚ふ、(死) ㉜深く悲ひ甚ふ、(死) ㉝深く悲ひ甚ふ、(死) ㉞深く悲ひ甚ふ、(死) ㉟深く悲ひ甚ふ、(死) ㊱深く悲ひ甚ふ、(死) ㊲深く悲ひ甚ふ、(死) ㊳深く悲ひ甚ふ、(死) ㊴深く悲ひ甚ふ、(死) ㊵深く悲ひ甚ふ、(死) ㊶深く悲ひ甚ふ、(死) ㊷深く悲ひ甚ふ、(死) ㊸深く悲ひ甚ふ、(死) ㊹深く悲ひ甚ふ、(死) ㊺深く悲ひ甚ふ、(死) ㊻深く悲ひ甚ふ、(死) ㊼深く悲ひ甚ふ、(死) ㊽深く悲ひ甚ふ、(死) ㊾深く悲ひ甚ふ、(死) ㊿深く悲ひ甚ふ、(死)



こがれ

こくえん

(こくえん) 故墟 (名) ふるき城と。
(こくえん) 枯魚 (名) はしろうをひもの。
(こくえん) 古曲 (名) 古代の音曲。
(こくえん) 固きもの、固れ合ふさまにちよ語、頭をこくえんする。

こくえん

十二時に十二支を配したる一時の三分の一の稱。
(こくえん) 酷 (名) 殿に過ぐる、又、むごきと、「一なる」
(こくえん) 放 (名) 昆蟲などの外皮、から。「振舞」
(こくえん) 放 (名) 他、か、四、かきあんとす、むしる。

こくえん

(こくえん) 黒雨 (名) 二十四氣の一、春の節節中の最後なるもの、陽曆四月二十日にあたる。
(こくえん) 虚空 (名) 天地間の空なる所をさす。
(こくえん) 虚空 (名) 佛、無相無色なるをさす。



〔一〕うざうと

こくえん

(こくえん) 黒煙 (名) 黒きけぶり、くろけぶり。
(こくえん) 國恩 (名) 生まれたる國の恩。
(こくえん) 國音 (名) 一國の人の固有の音聲。
(こくえん) 國歌 (名) 一國のまはりけの儀式に、奏樂にのぼせうたふべきものと定められたる歌。

こくえん

の福利の増進を圖るべしと説くもの多し。
(こくえん) 國界 (名) くにさかひ、國境。
(こくえん) 國交 (名) 國と國との交際。「一」
(こくえん) 國號 (名) 一國の稱號、王朝のとな

こくえん

(こくえん) 黒球 (名) 黒色のたま。
(こくえん) 哭泣 (名) 聲をあげて泣くと。
(こくえん) 國境 (名) くにさかひ。
(こくえん) 國禁 (名) 國法上の禁。
(こくえん) 國會 (名) 全國各地の人民より選舉したる各議員が、集まりてなす大會議。

こくけーこくま

こくけん(名) 國權の權力、一た
ち「國權」(名) 國權を擴張し強盛にせん
とを目的として團結したる軍隊、①省、熊本縣下
を本據となし、一種の軍隊。
こくげん(名) 刻限(名) 定めたるかぎりの時刻
こくげん(名) 刻限(名) 急速の取扱を要する
文書などに、其取扱の刻限を記す。
こくこ(名) 國庫(名) 國家の收入支出をなす本
源、即ち、國家の資産を集合して置一せる所、又、國
家が財産権の主體たる場合の稱。——きん(名) 國
庫金(名) 國庫の所有に屬する金。——さい
けん(名) 國庫債券(名) こくさいえうけん(名) 國
債證券に同じ。——まべん(名) 國庫支辨(名)
國庫より其費用を支出する。
こくこ(名) 國語(名) 國民一般に使用する其國の
言語。①我國固有の言語。——がくかう(名) 國
語學校(名) 臺灣總督府の統轄に屬し、我國
語を教授する學校。
こくこ(名) 國祭(名) 我國のおほやけの祭日、即
ち、四方拜・元始祭・孝明天皇祭・紀元節・神武天皇祭・
春季皇靈祭・秋季皇靈祭・天皇節・神嘗祭・新嘗祭の
こくさい(名) 國宰(名) 大臣、宰相。
こくさい(名) 國債(名) 國家の公債。——まよ
うけん(名) 國債證券(名) 國債を表證するため
の證券、公債證券の如きこれなり。
こくさい(名) 國際(名) 國家と國家との交際又は關
係。——かほせ(名) 國際爲替(名) 外國爲替
に同じ。——くわいぎ(名) 國際會議(名) 國際
上の事件に關し、各國の全權委員によりて備(ま)さ
る、會議。——くわんれい(名) 國際慣例(名)

こくまーこくま

國際上に行はる、從來のまらほし、——けいは
ふ(名) 國際刑法(名) [法] 犯罪に就きて、國家と
國家との關係を定むる國際法。——こちあん(名) 國
際公安(名) [法] 國家の安寧秩序の關係が、其國
人と外國人との間若しくは外國人と外國人との間
に存在する場合の稱。——こちあん(名) 國際
公法(名) [法] 國際法の二、國家と國家との權利
關係を規定したる法律の稱にして、各國のこれを承
認したるもの。——こんいん(名) 國際婚姻(名)
[法] これを行ふ人又は土地が、二國以上に關係した
る婚姻の稱。——まはふ(名) 國際私法(名)
[法] 國際法の二、二國以上の人民相互間の權利關係
を規定したるもの。——たんぱん(名) 國際談判
(名) 國際の事件に關したる談判。——でうやく
[名] 國際條約(名) 條約に同じ。——はざん
[名] 國際破産(名) [法] 一の破産が國際上の關係と
なる場合の稱。——はふ(名) 國際法(名) [法]
國際公法及國際私法の總稱。——はんげん(名) 國
際版權(名) [法] 國家と國家との間に、條約を締結
して保護する彼の國民の版權。——ふんげん
[名] 國際分業(名) [法] 一國民と他國民との間
に行はる、分業、例へば甲國はももに農業、乙國は
ももに鑛業、丙國はももに工業に従事する等をい
ふ、かくて有無過不足相通して人生の經濟を形成
す。——ぼりえき(名) 國際貿易(名) 一國民と
他國民との間に行はる、貿易、外國貿易。
こくさい(名) 國財(名) 國家の所有に屬する財
貨。①國幣(名) 國民の總財產。
こくさい(名) 國際彩色(名) 最も精密にした
る彩色、いと見事なる彩色。①大彩色。
こくさ(名) 國葬(名) 國家に偉大なる功勞あ
る人などの葬式を國費をもて行ふ。

こくまーこくま

る人などの葬式を國費をもて行ふ。
こくさ(名) 國喪(名) 國民全體の喪、即ち、主
上皇后・皇太后等の喪の稱。「やつこ」。
こくさ(名) 國造(名) 上古の國司、くにかの
こくさ(名) 告朔(名) こくさくに同じ。「物」
こくさん(名) 國産(名) 其國の產物、又、我國の産
物。こくさ(名) 國師(名) 古來、天子より智徳高き師僧
に賜はる稱號。
こくま(名) 黒子(名) ①はくろ。②ちひさ
きもの。③彈丸の地。
こくま(名) 國史(名) 其國の歴史、又、我國の歴史。
こくま(名) 國司(名) 古昔、日本六十六國及二島に
置かれたる地方官の稱、守・介・按・自等の職員ありた
り。「土佐の」。
こくま(名) 國士(名) 全國中最もすぐれたる人。
こくま(名) 國字(名) 其國の文字。①我國にて特
に造りたる字、例へば辻、刑などの字をいふ。
こくま(名) 告示(名) 一般に告げまはさる、ふれ
わたす。②布達。
こくま(名) 國慶(名) 國家を表彰する印、我國のは
方二十九年の金村にして、大日本國慶の五字を志
しあり、内大臣これを尙藏す、國書・條約批准勅記
等にこれを飾せらる。
こくま(名) 酷似(名) 極めてよく似てあると。
こくま(名) 國事(名) 直接に國家に關する事柄、特
に政事に關していふ。——たんでい(名) 國事探
偵(名) 國事に關する罪狀を探偵する。又、其
職務の人。——はん(名) 國事犯(名) [法] 直接
に政治上の秩序を害せんとする犯罪、内亂及外亂に
關する犯罪の如きこれなり。
こくま(名) 獄死(名) 獄中にて死ぬること。

こくまーこくま

こくま(名) 獄囚(名) 獄舎にとらはれたる囚人。
こくま(名) 黒漆(名) 黒色のうるし、又、それ
にて塗られたるもの。①黒色のうるしの如く、光澤あ
りて深黒なるもの。
こくま(名) 桎梏(名) てかしとあしかしと、
①自由を束縛する。又、自由のはだし。「じ」。
こくま(名) 黒死病(名) 「ペスト」に同
こくま(名) 獄舎(名) ひとや。ちうや。
こくま(名) 濃漿(名) 一種の料理、鹿の肉を
湯(ゆ)き味増汁をもて煮詰めたるもの。
こくま(名) 國情(名) 一國の情態、くにの
ありさま。①國狀。
こくま(名) 極上(名) 最もすぐれたるもの、
きはめてよきもの。「一の品」。「一名」。
こくま(名) 黒障眼(名) 「そのひ」の
こくま(名) 古實(名) 國司の長官、くに
のかみ。①國持の大名、一國の領主。
こくま(名) 國手(名) 一國の名手の醫師、又
は毒打などの名人の稱。「の總稱」。
こくま(名) 殺菽(名) 米・粟・大豆・小豆等
こくま(名) 國書(名) 君主又は大統領が、其國
の名を以て發する文書。①國の歴史・文章などの書
こくま(名) 酷暑(名) きびしき暑さ。「暑」
こくま(名) 酷暑(名) 前條に同じ。「暑」
こくま(名) 國色(名) 國中にならぶものなき
容色、又、絶世の美人。「一無雙」。
こくま(名) 黒色(名) くるさい。——ま
んまゆ(名) 黒色人種(名) 世界の人類の三大別
の一、皮膚黒色若しくは褐色にして、髪黒く鼻平く、
顎の中央突出したる特徴とす。
こくま(名) 國辱(名) 一國の辱、くにのはぢ。

こくまーこくま

こくま(名) 國人(名) 國の人民、くにたみ。
こくま(名) 黒人(名) 黒色人種に屬する人、くろ
んぼう。——まゆ(名) 黒人種(名) こくまよく
まゆ(名) に同じ。
こくま(名) 極心(名) 心をこめてものをとする。
こくま(名) 自(名) 自(名) 大聲をたて、
かなしみ泣く。なきまきまき。①支那にて、死を叫
して、なきまきまきを行ふにいふ。
こくま(名) 刻(名) 他、まきまきまき。
こくま(名) 粉薬(名) 粉末にしたる藥、散藥。
こくま(名) 國粹(名) 物質上又は精神上に於け
る其國固有の長所、國民の特性、國土の狀態又は歴
史等によりて養成せらる。——ほそん(名) 國粹
保存(名) 時勢如何に變遷すとも、國粹は永くこ
れを保存すべしといふ。「も中心の所」。
こくま(名) 極端(名) このうへなきまき。①最
こくま(名) 曲水宴(名) こくまよくするの
えん(名) に同じ。「の方針」。「一を定む」。
こくま(名) 國是(名) 輿論の認め得可とする國政
こくま(名) 國勢(名) 國のまつきまき。①ひ
こくま(名) 哭聲(名) なきまきまき。①泣
こくま(名) 國製(名) 其國の製造、又、我國の製
こくま(名) 國稅(名) 中央政府が其經費を交納
するのために、直接に賦課する租稅、地租、所得稅、
營業稅、關稅、登録稅等の類これなり。地方稅の對
物品、沖繩縣・小笠原島伊豆七島にて行はる。
こくま(名) 極製(名) 最上の製造、特別の製造
こくま(名) 酷肖(名) よく似てあると。
こくま(名) 國籍(名) [法] 一國の臣民たる資格

こくまーこくま

分限、又、其取得喪失の公證、國籍を日本に有すとい
へば、現に日本の臣民たるなり。
こくま(名) 黒線(名) 黒色のすぢ。
こくま(名) 監獄(名) 監獄の稱。
こくま(名) 告訴(名) [法] 或犯罪の被害者が、犯罪
事實を其權限ある官府に申告する。——はん
こくま(名) 告訴(名) 告訴せし被害者。「のうち」
こくま(名) 獄窓(名) 監獄のまど、轉じて、監獄
こくま(名) 獄卒(名) 死をみる、さまじい
こくま(名) 國俗(名) 國の風俗習慣。「一語」
こくま(名) 國賊(名) 國家に仇をなすもの、君を
害し世を亂しなどする者。
こくま(名) 小具足(名) 鎧(よろい)の胸のみを略
して、他は皆を着用してあると。①とりなは。
こくま(名) 獄則(名) 監獄内の規則。
こくま(名) 看守(名) 看守又は押丁の如き、獄
囚を取扱ふ地位卑(ひ)きもの。①佛(ぼつ)地獄にて亡者
を責むるといふ鬼。②義理人情を知らぬ人をい
しめていふ語。
こくま(名) 國體(名) 國家を其組織特に其主
權の存在によりて觀察したる稱、これを君主國體と
共和國體との二に別つ。①國家の狀態、くにがし。
こくま(名) 國内(名) こくまに同じ。
こくま(名) 玉帶(名) こくまのひび。
こくま(名) 國道(名) 公道中にて幅員最も廣
き定められたる道路、即ち東京より伊勢の大廟又は各府縣
廳・各師團司令部・各鎮守府等に通ずる道路。
こくま(名) 獄道(名) 邪曲なること、惡事を
行ふこと。①放蕩なること、大阪地方の方言。②こく
だうもの(名) 略言。——もの(名) 獄道者(名) わ

こくたーこくち

るもの、又は、はうたうもの。
こくたか「石高」(名) 米穀の數量。
こくたち「穀斷」(名) 神佛などに祈願して、穀物を断つて食はぬこと。

こくちーこくて

別の當座預金、普通の當座預金より高利を附し、これが出入又は預入は共に通帳を以てす。
こくちゆう「國中」(名) 國のうち、國內。
こくちゆう「黒丑」(名) 黒い悪魔の一種。



[さぐくこ]

こくちーこくば

こくち「國都」(名) 一國の首都。
こくち「國土」(名) 一國の領土、即ち統治權の及ぶ、城域。
こくち「國幣」(名) 國庫の貨幣。

こくはく

こくはく「告白」(名) つげかたると、あかしさま。
こくはく「黒白」(名) 「こく」及び「はく」に同じ。
こくはつ「告發」(名) 「法」犯罪の被害者外のもの、其犯罪事實を権限ある官府に申告すること。

こくふん

こくふん「國風」(名) 國中の風俗。
こくふん「谷風」(名) 東の風。
こくふん「國文」(名) 國語を以て編りたる文章。

こくみん

こくみん「寄肉」(名) こぶ又はいぼ等の總稱。
こくみん「國民」(名) 一國の統治權の客體の一、一定の統治權の下に服従關係を有する人類(蒼生)。

こくはーこくば

こくちーこくち

こくちーこくち

こくむこくら

事變に際し、後備兵役にあるもの盡く召集せられ、尙は兵員を要する場合には召集せらるる。
(こくむ)「國務」(名) 國家の政務。――「だいなぶ」

こくらこくら

だち「小倉蔵」(名) 小倉蔵にて製造したるもの。
(こくら)「小倉蔵」(名) 小倉蔵にて製造したるもの。
(こくら)「小倉蔵」(名) 小倉蔵にて製造したるもの。

こくわこくら

の稱、又世に「極」(名) 果、竹、(名) 梨をいふ。
(こくわ)「國威」(名) 國の威光。――「こくわ」

こけこくら

の庵、「の衣」。●死にて葬(名) せられしと。「の衣」
(こけ)「虚假」(名) あるかもの。ばか、白痴、愚蒙。

こけらこくら

大乗終教一乘頓教不思議乘頓教の稱。
(こけら)「大乗終教」(名) 大乗終教の稱。

こけらこくら

(こけら)「孤劍」(名) 單身劍を構へて行く。
(こけら)「孤劍」(名) 單身劍を構へて行く。



〔らげこ〕

こころ—こころ

こころ—こころ
こころ—たぐみ「心企」(名) 心中の心が、たぐみ
こころ—たぐみ「心立」(自、た四) 思ひたつ
こころ—たぐみ「心立」(名) 心の中に、たぐみ
こころ—たぐみ「心立」(名) 心の中に、たぐみ
こころ—たぐみ「心立」(名) 心の中に、たぐみ

こころ—こころ

こころ—こころ
こころ—たぐみ「心立」(名) 心の中に、たぐみ
こころ—たぐみ「心立」(名) 心の中に、たぐみ
こころ—たぐみ「心立」(名) 心の中に、たぐみ
こころ—たぐみ「心立」(名) 心の中に、たぐみ

こころ—こころ

こころ—こころ
こころ—たぐみ「心立」(名) 心の中に、たぐみ
こころ—たぐみ「心立」(名) 心の中に、たぐみ
こころ—たぐみ「心立」(名) 心の中に、たぐみ
こころ—たぐみ「心立」(名) 心の中に、たぐみ

こころ—こころ

こころ—こころ
こころ—たぐみ「心立」(名) 心の中に、たぐみ
こころ—たぐみ「心立」(名) 心の中に、たぐみ
こころ—たぐみ「心立」(名) 心の中に、たぐみ
こころ—たぐみ「心立」(名) 心の中に、たぐみ

こころ—こころ

こころ—こころ
こころ—たぐみ「心立」(名) 心の中に、たぐみ
こころ—たぐみ「心立」(名) 心の中に、たぐみ
こころ—たぐみ「心立」(名) 心の中に、たぐみ
こころ—たぐみ「心立」(名) 心の中に、たぐみ

こころ—こころ

こころ—こころ
こころ—たぐみ「心立」(名) 心の中に、たぐみ
こころ—たぐみ「心立」(名) 心の中に、たぐみ
こころ—たぐみ「心立」(名) 心の中に、たぐみ
こころ—たぐみ「心立」(名) 心の中に、たぐみ

おまういあ

おまういあ 五辛(ごしん) 五つの辛味ある蔬菜、即ち、葱(ごぼう)、蒜(にんにく)、薑(しょうが)、芥子(カイロ)、胡荽(ごま)の事。...

おすいこすめ

おすいこすめ 才学人に「超」。①「超」す。ふ「年を」... 行く。去る。来る。「まかり」。「引き」...

おすりこせら

おすりこせら 鑢子(すりこ) 名。ヤナリの類。... 擦付(すりこ) 名。こすりと。...

おまういあ

おまういあ 五星(ごせい) 名。五つの星、即ち、歳星、木星、... 五聖(ごせい) 名。支那古代の五人の聖人、即ち、黄帝、炎帝、禹、湯、孔子の事。...

おせつこせり

おせつこせり 戸籍役場に備へる、副本は其地の地方裁判所に保存す。... 戸籍(こせり) 名。戸籍吏が其事務を行ふ所。...

おせんこせら

おせんこせら 古銭(ごせん) 名。古昔通用したる錢。... 姑洗(ごせん) 名。十二律の一。...

こぞりーこぞめ

こぞりー「去年」(名) きよねん、さくねん、舊年。
 こぞりー「小僧」(名) 年少の僧。●商店などにて使役する小僧。●少壯者を卑し、つ呼ぶ語。
 こぞりー「姑息」(名) 一時のまにあはせ、かりそめの安心、いつたんのがれ。
 こぞりー「刮」(他、下二) こすりけづる、けづりもとす。
 こぞりー「古俗」(名) わかしのなはし。
 こぞりー「五則」(名) 五つの準則、即ち、規、準、矩、矧、準。
 こぞりー「御息災」(名) 息災の敬稱。●「物」に敬進するが質料なるといふ語。「一の田舎者」。
 こぞりー「たい」(形) こそはゆしに同じ。
 こぞりー「探」(他、下四) 皮膚の或部分を剥脱して、一種の感愛を起さしむ、くすぐる。(抓搔)。
 こぞりー「刮」(他) こぞりーの語。
 こぞりー「名」(副) 勝かに音のするまににいふ語。●ない、こぞりーをなすまににいふ語。●「さろはちり」(名) ささいのぬすみをなすもの、小ぬすびと。
 こぞりー「こぞり」(名、副) 同(こぞり)く粗びきもの、相觸れてこぞりて「こぞり」に同じ。
 こぞりー「こぞり」(名) 耗の大袖なるに對して、常の衣の袖、袖の小きき衣。●袖の縮入、段階衣。●袖(こぞり)の袖。●まく「小袖幕」(名) 昔時、花見などのとき、小袖を脱ぎ、これを紐に連ねかけ、帯とせしもの、稱。
 こぞりー「こぞり」(名) 形、こぞり、こぞり、如き感あ
 こぞりー「濃染」(名) 濃く染めたる色。
 こぞりー「濃染草」(名) 一種の草、其質、
 こぞりー「木染月」(名) 陰曆八月の異稱。

こぞりーこぞめ

こぞりて「擧」(副) こぞりて、こぞりて、こぞりて。
 こぞりて「小反刃」(名) 小ききなげなた。
 こぞりて「擧」(自、下四) こぞりて、こぞりて、こぞりて。
 こぞりて「擧」(他、下四) こぞりて、こぞりて、こぞりて。
 こぞりて「孤村」(名) かけはなれて隣村なき邑里。
 こぞりて「固體」(名) 一定の體形及體積を有する物體、通常溫度に於ける金石の如き是れなり。液體及氣體の對。
 こぞりて「古體」(名) いにしへのさま、ふるきかたち。●漢詩にて、律及絶句以外の體裁の稱。
 こぞりて「個體」(名) 個々にわかれてあるもの、ひとつづつにたりにて存在するもの。
 こぞりて「誇大」(名) 實際よりも仰山なる、おほきやうなる。●はこぶこと、たかぶること。
 こぞりて「古代」(名) いにしへ、わかし。●ふるめかしきと、ふるくきと。●現時の地殼構成以前の世界。
 こぞりて「五體」(名) ●筋、●肉、●骨、●毛、●皮の稱、又頭と兩手と兩足との稱。●全身の總稱。●書體にて、篆、隸、真、行、草の稱。
 こぞりて「五帯」(名) 地殼帶と南北半球の兩溫帶及兩寒帶との稱。
 こぞりて「五大」(名) 佛、五塵より生ずる地、水、火、風、空の五つの種性の稱、其一切處にあまねきが故に大と名づく。
 こぞりて「五代」(名) 支那の唐朝の後を承(う)けし五王朝、即ち、後梁、後唐、後晉、後漢、後周の稱。
 こぞりて「さらざ」(名) 古代更紗(名) 古く南蠻より渡來せる更紗。●古代更紗に模倣せる布。

こぞりーこぞめ

こぞりて「擧」(副) こぞりて、こぞりて、こぞりて。
 こぞりて「小反刃」(名) 小ききなげなた。
 こぞりて「擧」(自、下四) こぞりて、こぞりて、こぞりて。
 こぞりて「擧」(他、下四) こぞりて、こぞりて、こぞりて。
 こぞりて「孤村」(名) かけはなれて隣村なき邑里。
 こぞりて「固體」(名) 一定の體形及體積を有する物體、通常溫度に於ける金石の如き是れなり。液體及氣體の對。
 こぞりて「古體」(名) いにしへのさま、ふるきかたち。●漢詩にて、律及絶句以外の體裁の稱。
 こぞりて「個體」(名) 個々にわかれてあるもの、ひとつづつにたりにて存在するもの。
 こぞりて「誇大」(名) 實際よりも仰山なる、おほきやうなる。●はこぶこと、たかぶること。
 こぞりて「古代」(名) いにしへ、わかし。●ふるめかしきと、ふるくきと。●現時の地殼構成以前の世界。
 こぞりて「五體」(名) ●筋、●肉、●骨、●毛、●皮の稱、又頭と兩手と兩足との稱。●全身の總稱。●書體にて、篆、隸、真、行、草の稱。
 こぞりて「五帯」(名) 地殼帶と南北半球の兩溫帶及兩寒帶との稱。
 こぞりて「五大」(名) 佛、五塵より生ずる地、水、火、風、空の五つの種性の稱、其一切處にあまねきが故に大と名づく。
 こぞりて「五代」(名) 支那の唐朝の後を承(う)けし五王朝、即ち、後梁、後唐、後晉、後漢、後周の稱。
 こぞりて「さらざ」(名) 古代更紗(名) 古く南蠻より渡來せる更紗。●古代更紗に模倣せる布。



こぞりーこぞめ

こぞりて「擧」(副) こぞりて、こぞりて、こぞりて。
 こぞりて「小反刃」(名) 小ききなげなた。
 こぞりて「擧」(自、下四) こぞりて、こぞりて、こぞりて。
 こぞりて「擧」(他、下四) こぞりて、こぞりて、こぞりて。
 こぞりて「孤村」(名) かけはなれて隣村なき邑里。
 こぞりて「固體」(名) 一定の體形及體積を有する物體、通常溫度に於ける金石の如き是れなり。液體及氣體の對。
 こぞりて「古體」(名) いにしへのさま、ふるきかたち。●漢詩にて、律及絶句以外の體裁の稱。
 こぞりて「個體」(名) 個々にわかれてあるもの、ひとつづつにたりにて存在するもの。
 こぞりて「誇大」(名) 實際よりも仰山なる、おほきやうなる。●はこぶこと、たかぶること。
 こぞりて「古代」(名) いにしへ、わかし。●ふるめかしきと、ふるくきと。●現時の地殼構成以前の世界。
 こぞりて「五體」(名) ●筋、●肉、●骨、●毛、●皮の稱、又頭と兩手と兩足との稱。●全身の總稱。●書體にて、篆、隸、真、行、草の稱。
 こぞりて「五帯」(名) 地殼帶と南北半球の兩溫帶及兩寒帶との稱。
 こぞりて「五大」(名) 佛、五塵より生ずる地、水、火、風、空の五つの種性の稱、其一切處にあまねきが故に大と名づく。
 こぞりて「五代」(名) 支那の唐朝の後を承(う)けし五王朝、即ち、後梁、後唐、後晉、後漢、後周の稱。
 こぞりて「さらざ」(名) 古代更紗(名) 古く南蠻より渡來せる更紗。●古代更紗に模倣せる布。

こぞりーこぞめ

こぞりて「擧」(副) こぞりて、こぞりて、こぞりて。
 こぞりて「小反刃」(名) 小ききなげなた。
 こぞりて「擧」(自、下四) こぞりて、こぞりて、こぞりて。
 こぞりて「擧」(他、下四) こぞりて、こぞりて、こぞりて。
 こぞりて「孤村」(名) かけはなれて隣村なき邑里。
 こぞりて「固體」(名) 一定の體形及體積を有する物體、通常溫度に於ける金石の如き是れなり。液體及氣體の對。
 こぞりて「古體」(名) いにしへのさま、ふるきかたち。●漢詩にて、律及絶句以外の體裁の稱。
 こぞりて「個體」(名) 個々にわかれてあるもの、ひとつづつにたりにて存在するもの。
 こぞりて「誇大」(名) 實際よりも仰山なる、おほきやうなる。●はこぶこと、たかぶること。
 こぞりて「古代」(名) いにしへ、わかし。●ふるめかしきと、ふるくきと。●現時の地殼構成以前の世界。
 こぞりて「五體」(名) ●筋、●肉、●骨、●毛、●皮の稱、又頭と兩手と兩足との稱。●全身の總稱。●書體にて、篆、隸、真、行、草の稱。
 こぞりて「五帯」(名) 地殼帶と南北半球の兩溫帶及兩寒帶との稱。
 こぞりて「五大」(名) 佛、五塵より生ずる地、水、火、風、空の五つの種性の稱、其一切處にあまねきが故に大と名づく。
 こぞりて「五代」(名) 支那の唐朝の後を承(う)けし五王朝、即ち、後梁、後唐、後晉、後漢、後周の稱。
 こぞりて「さらざ」(名) 古代更紗(名) 古く南蠻より渡來せる更紗。●古代更紗に模倣せる布。

こねびーこねび

ろし「特牛」(名)強健なる牡牛、頭の大きな牛、一「うしろ」の「特牛」(枕、シマヤ)に冠する

こねびーこねび

こねび(名) 強健なる牡牛、頭の大きな牛、一「うしろ」の「特牛」(枕、シマヤ)に冠する

こねわーこねす

こねわ(名) 強健なる牡牛、頭の大きな牛、一「うしろ」の「特牛」(枕、シマヤ)に冠する

こねすーこねん

こねす(名) 強健なる牡牛、頭の大きな牛、一「うしろ」の「特牛」(枕、シマヤ)に冠する

こねれーこねま

こねれ(名) 強健なる牡牛、頭の大きな牛、一「うしろ」の「特牛」(枕、シマヤ)に冠する

こねりーこねい

こねり(名) 強健なる牡牛、頭の大きな牛、一「うしろ」の「特牛」(枕、シマヤ)に冠する

このま—このは

このま—このは
このま—このは
このま—このは
このま—このは



【ひれがはのこ】

このは—このめ

このは—このめ
このは—このめ
このは—このめ
このは—このめ

このめ—このは

このめ—このは
このめ—このは
このめ—このは
このめ—このは



【んたばあ】

このま—このは
このま—このは
このま—このは

このま—このは
このま—このは
このま—このは

このま—このは
このま—このは
このま—このは

このま—このは
このま—このは
このま—このは

このま—このは
このま—このは
このま—このは

このま—このは
このま—このは
このま—このは

このま—このは
このま—このは
このま—このは

このま—このは
このま—このは
このま—このは

このま—このは
このま—このは
このま—このは

このま—このは
このま—このは
このま—このは

このま—このは
このま—このは
このま—このは

このは—このは

このは—このは
このは—このは
このは—このは
このは—このは

このは—このは
このは—このは
このは—このは
このは—このは

このは—このは

こほもーとばん

に用ふ。こほは、赤飯、硬飯。
(一)こほもて「恐怖」(名) 相手の恐しく思ひて、心ならずも優待する。

こほもの「強者」(名) つよきもの。もど。
こほや「小早」(名) ①少しく早きと。稍や急ぐと。
「小早」形、②稍や早し、少しく急ぐ。

こほら「木原」(名) 樹木の生えた野原。
こほら「小腹」(名) えたはら、このかみ。①がたつ 稍やいかりの心生ず。

こほり「小張」(名) 白き布の狩衣、はくちやう。
こほる「小春」(名) 陰曆十月の異稱。①びより「小春日和」(名) 小春の頃の暖かきひより。
こほる「小春」(名) 小春の頃の暖かきひより。
こほる「小春」(名) 小春の頃の暖かきひより。

こほる「小春」(名) 小春の頃の暖かきひより。
こほる「小春」(名) 小春の頃の暖かきひより。
こほる「小春」(名) 小春の頃の暖かきひより。



【(二)やばこ】

とばんーとばん

形をなし、其一枚は一兩に相當せり、大判の對。
(一)とばん「小籠」(名) ①動、抄食類に屬する鳥、嘴長く、脚部は黄色にして根部に軟毛を被る、背赤黒色にして腹面白し、脚は赤色にして長く趾は自在なり、水邊に棲息し小魚などを食す。〔紅冠水鶏、田鶏。〕

とばん「小籠」(名) ②あまへ。③こばんあやう。
とばん「御飯」(名) ひるめし、ひるめし、置飯。
とばん「誤判」(名) あやまりの判断。
とばん「碁盤」(名) 碁を圍むに用ふる盤、方形にして多くは下に四足を付け、表面に縦横各十九の野線を通り交はるやうに引きたるもの、其縦横の野線の交はりあふ箇所に、碁石を打つ。〔碁棋、碁局。〕碁盤の表面の目の如くに、方形を正しくなせたるさまの横線、縦線、をいふ。

とばん「小判」(名) ①あまへ。②こばんあやう。
とばん「御飯」(名) ひるめし、ひるめし、置飯。
とばん「誤判」(名) あやまりの判断。
とばん「碁盤」(名) 碁を圍むに用ふる盤、方形にして多くは下に四足を付け、表面に縦横各十九の野線を通り交はるやうに引きたるもの、其縦横の野線の交はりあふ箇所に、碁石を打つ。〔碁棋、碁局。〕碁盤の表面の目の如くに、方形を正しくなせたるさまの横線、縦線、をいふ。

とばん「小判」(名) ①あまへ。②こばんあやう。
とばん「御飯」(名) ひるめし、ひるめし、置飯。
とばん「誤判」(名) あやまりの判断。
とばん「碁盤」(名) 碁を圍むに用ふる盤、方形にして多くは下に四足を付け、表面に縦横各十九の野線を通り交はるやうに引きたるもの、其縦横の野線の交はりあふ箇所に、碁石を打つ。〔碁棋、碁局。〕碁盤の表面の目の如くに、方形を正しくなせたるさまの横線、縦線、をいふ。

とばんーとひか

こはんせき「虎斑石」(名) 近江國高島地方より出づる一種の石、質黒くして白斑あり、硯などを造る料に供せらる。
こはんせき「小半時」(名) 昔時、一時の四分一、即ち、半時の三十分。

こはんせき「小半時」(名) 昔時、一時の四分一、即ち、半時の三十分。
こはんせき「小半時」(名) 昔時、一時の四分一、即ち、半時の三十分。

こはんせき「小半時」(名) 昔時、一時の四分一、即ち、半時の三十分。
こはんせき「小半時」(名) 昔時、一時の四分一、即ち、半時の三十分。



【ひこ】

こひき「木挽」(名) 材木を鋸(のこ)にて挽くと。又、其業の人、拉鋸人。
こひき「戀草」(名) ①こひの情を草の茂げるさまたとへいふ。②心の具稱。
こひきち「鯉口」(名) ①刀の鞘(は)口と(は)と相合ふ所。②一種の服、つゝもての如くに仕立たる布子にして、水仕事をなするとき、着物の襟(えり)をを防ぐために着るもの。③をさる 直に抜刀の出来るやうに、鯉口をすこしくゆるめておく。

こひきち「小籠」(名) ①すこしく生ひたる籠。②「籠」煙心草科に屬する草、水田に生ず、茎は細長くして通常葉は存在せず、雄蕊は六個あり、茎を以て藤を織る。
こひこく「こ」(名) ①一種の料理、籠の肉を煮たる味噌汁、即ち籠の肉のこくをさう。②「いりや」。

こひこく「こ」(名) ①一種の料理、籠の肉を煮たる味噌汁、即ち籠の肉のこくをさう。②「いりや」。

こひこく「こ」(名) ①一種の料理、籠の肉を煮たる味噌汁、即ち籠の肉のこくをさう。②「いりや」。

こひこく「こ」(名) ①一種の料理、籠の肉を煮たる味噌汁、即ち籠の肉のこくをさう。②「いりや」。

こひこく「こ」(名) ①一種の料理、籠の肉を煮たる味噌汁、即ち籠の肉のこくをさう。②「いりや」。

とひきーとひち

とひき「木挽」(名) 材木を鋸(のこ)にて挽くと。又、其業の人、拉鋸人。
とひき「戀草」(名) ①こひの情を草の茂げるさまたとへいふ。②心の具稱。

とひち「古筆」(名) 古人の書きたる書。
とひち「古筆見」(名) 古筆の真偽を鑑定する人。
とひち「小羊」(名) 羊の子、又、小さき羊。
とひち「小羊」(名) 羊の子、又、小さき羊。

とひち「小羊」(名) 羊の子、又、小さき羊。
とひち「小羊」(名) 羊の子、又、小さき羊。



【一ラヒコ】

こびん—こぶ

こびん【小鬢】(名)鬢の端。
こぶ【鵡】(名)【動】くぐりに同じ。
こぶ【鵡】(名)【動】抄食類に属する鳥、嘴は長くして全部角質なり、趾間の根基に小眼を張り、後趾よく発達せり、毛色白く、眼の周圍の面部は羽毛生ぜずして裸出す。こぶのとり。
コブ【劫】(名)【梵語 Kopa 劫蕪(ワ)の略】佛(一)時期(二)極めて長き時間「セツナ」の對、(三)永き年月を経、年功を積む。
こぶ【劫】(名)【佛】圓蓋にて、互に取らんと争ふ一つの石が、互に一手間を置かざれば取り得られぬもの、故に他方に於て敵を脅かす石を打ち、敵これを防ぐ間に、其石を襲ひとる。
こぶ【國府】(名)「こくふ」に同じ。
こぶ【他】(名)【他】(四)「ねがふ」のぞむ。
こぶ【他】(名)【他】(五)「なつ」に同じ。
こぶ【他】(名)【他】(六)「たひ思ふ」に同じ。
こぶ【他】(名)【他】(七)「たひ思ふ」に同じ。
こぶ【他】(名)【他】(八)「たひ思ふ」に同じ。
こぶ【他】(名)【他】(九)「たひ思ふ」に同じ。
こぶ【他】(名)【他】(十)「たひ思ふ」に同じ。

こぶ—こぶ

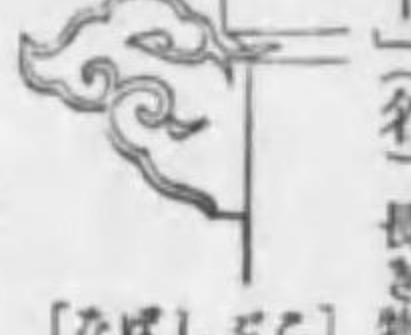
こぶ【業】(名)【佛】因を縁によりて果となきしむる善惡の作行、例へば、或植物の種は因、これを蒔きたる地は縁、生えたる其植物は果にして、斯かる事情に到達せしめし耕作は業なり、自分自ら作りし罪惡の應報。——をにやす ことばはら思ふ。
こぶ【護符】(名)「ごふう」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。

こぶ—こぶ

こぶ【業】(名)【佛】因を縁によりて果となきしむる善惡の作行、例へば、或植物の種は因、これを蒔きたる地は縁、生えたる其植物は果にして、斯かる事情に到達せしめし耕作は業なり、自分自ら作りし罪惡の應報。——をにやす ことばはら思ふ。
こぶ【護符】(名)「ごふう」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。

こぶ—こぶ

こぶ【業】(名)【佛】因を縁によりて果となきしむる善惡の作行、例へば、或植物の種は因、これを蒔きたる地は縁、生えたる其植物は果にして、斯かる事情に到達せしめし耕作は業なり、自分自ら作りし罪惡の應報。——をにやす ことばはら思ふ。
こぶ【護符】(名)「ごふう」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。



こぶ—こぶ

こぶ【業】(名)【佛】因を縁によりて果となきしむる善惡の作行、例へば、或植物の種は因、これを蒔きたる地は縁、生えたる其植物は果にして、斯かる事情に到達せしめし耕作は業なり、自分自ら作りし罪惡の應報。——をにやす ことばはら思ふ。
こぶ【護符】(名)「ごふう」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。

こぶ—こぶ

こぶ【業】(名)【佛】因を縁によりて果となきしむる善惡の作行、例へば、或植物の種は因、これを蒔きたる地は縁、生えたる其植物は果にして、斯かる事情に到達せしめし耕作は業なり、自分自ら作りし罪惡の應報。——をにやす ことばはら思ふ。
こぶ【護符】(名)「ごふう」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。
こぶ【五分】(名)「ごぶん」に同じ。

こぼれ

古文辭の眞正なる解釋によりて、經書に述べたる所の意義を解し、以て儒學の眞理を知らんとするもの、稱我國にては漢生祖傳の一派これなり。
(こへい) 履聘(名) やとひ入るゝと、やとひ用ふると、「しして顧問とす」。



かばかりき味だ。
(こぼし) 零(名) ①こぼすと。②水こぼし。「む。
(こぼす) 零(名) ①他(さ四) 洩らす。②こぼれし。
(こぼす) 零(名) ①自(さ四) 愚痴をいふ。なげきわぶ。
(こぼす) 零(名) ①他(た四) 破り損ず。こぼす。やぶる。くづす。「家を」。
(こぼす) 零(名) ①自(さ四) 破る。こぼす。やぶる。くづす。「家を」。
(こぼす) 零(名) ①自(さ四) 破る。こぼす。やぶる。くづす。「家を」。

水に、白玉圓子を入れ砂糖を加へたるもの。
(こぼり) 零(名) ①水こぼり。②水こぼし。「む。
(こぼり) 零(名) ①自(さ四) 愚痴をいふ。なげきわぶ。
(こぼり) 零(名) ①他(た四) 破り損ず。こぼす。やぶる。くづす。「家を」。

こぼれ

こぼれ(零) (名) こぼるゝと、こぼれたるもの。「を拾ふ」(拾)。「さいはひひり」(零幸) (名) 豫想せざる幸福、意外のさいはひ。(俵傳)。「一零」(自)。「こぼる」の語。
(こぼる) 零(名) ①こぼるゝと、こぼれたるもの。「を拾ふ」(拾)。「さいはひひり」(零幸) (名) 豫想せざる幸福、意外のさいはひ。(俵傳)。「一零」(自)。「こぼる」の語。

の義(密教)にて、諸部を燒き亡ぼすといふ意にて、火を焚くこと佛に祈ると。
(こぼれ) 零(名) ①こぼるゝと、こぼれたるもの。「を拾ふ」(拾)。「さいはひひり」(零幸) (名) 豫想せざる幸福、意外のさいはひ。(俵傳)。「一零」(自)。「こぼる」の語。



水に、白玉圓子を入れ砂糖を加へたるもの。
(こぼり) 零(名) ①水こぼり。②水こぼし。「む。
(こぼり) 零(名) ①自(さ四) 愚痴をいふ。なげきわぶ。
(こぼり) 零(名) ①他(た四) 破り損ず。こぼす。やぶる。くづす。「家を」。

こぼれ

こぼれ

こぼれ

糊・管・紅腫・白粉などをいふ。「一」を賣る。「二」を吐く。「三」を吐く。「四」を吐く。「五」を吐く。「六」を吐く。「七」を吐く。「八」を吐く。「九」を吐く。「十」を吐く。

こまや—こまあ
こまや—こまあ

こまや—こまあ
こまや—こまあ

こまや—こまあ
こまや—こまあ

こまの—こまあ

こまの—こまあ
こまの—こまあ



こまの—こまあ
こまの—こまあ



こまの—こまあ
こまの—こまあ

こりあ—こりら

こりあやう「疑性」(名) ●物事に深く心を注ぐと、何事につけても暗中する性質。●風塵(フウジン)の意匠を好む。
こりあずまに「副」以前の事に懲りずに、改めて猶ほ引續きて、えやうこりもなく、「またもなき名は、たちぬべし」。

こりる—こる

こりる「懸」(自、上) 前非を悔(じりて再びせざらんと思ふ、失敗を悔(じりて深く咎む、「こりて手を出さぬ」。

こる—これ

こる「懸」(自、上) 前非を悔(じりて再びせざらんと思ふ、失敗を悔(じりて深く咎む、「こりて手を出さぬ」。



〔みたんり〕

これあ—こる

これあ「是式」(名) これくろひ、これほど、こればかり、「一」の事には恐れぬ。
これ「よ」より「て」由是(接) このわけゆるに、この故に、されば、「これを見れば」由是(観之) 前條に同じ。

こる—こるし

こる「語路」(名) ●言語又は文句の調子、口調。「このよい文」。

こるし—こるね

こるし「頤」(接) 其を、其とき、こるしむ、(害) 戮、辱、(活動) あさへとむ、(息を) 一、(買) にあきて流す。

こんえーこんが

扶養の義務を負ふと、夫は妻の財産を管理し使用収益をなすと等なり、死亡又は離婚によりて解除せ

【佛】如来の一切の秘密事を知り、五百の夜叉と神とを領して、千佛の法を護すといふ二つの神、多くは共に、全身を露出したる腹間に衣裳をまとい、勇猛悍惡の相をなす、この二神の像を寺門の左右に分ち置く、左を密跡金剛といひ、右を那羅延金剛といひ、



【金剛童子】

こんがーこんが

【佛】如来の一切の秘密事を知り、五百の夜叉と神とを領して、千佛の法を護すといふ二つの神、多くは共に、全身を露出したる腹間に衣裳をまとい、勇猛悍惡の相をなす、この二神の像を寺門の左右に分ち置く、左を密跡金剛といひ、右を那羅延金剛といひ、

【佛】如来の一切の秘密事を知り、五百の夜叉と神とを領して、千佛の法を護すといふ二つの神、多くは共に、全身を露出したる腹間に衣裳をまとい、勇猛悍惡の相をなす、この二神の像を寺門の左右に分ち置く、左を密跡金剛といひ、右を那羅延金剛といひ、

こんかーこんき

【佛】如来の一切の秘密事を知り、五百の夜叉と神とを領して、千佛の法を護すといふ二つの神、多くは共に、全身を露出したる腹間に衣裳をまとい、勇猛悍惡の相をなす、この二神の像を寺門の左右に分ち置く、左を密跡金剛といひ、右を那羅延金剛といひ、

【佛】如来の一切の秘密事を知り、五百の夜叉と神とを領して、千佛の法を護すといふ二つの神、多くは共に、全身を露出したる腹間に衣裳をまとい、勇猛悍惡の相をなす、この二神の像を寺門の左右に分ち置く、左を密跡金剛といひ、右を那羅延金剛といひ、

こんえーこんが

扶養の義務を負ふと、夫は妻の財産を管理し使用収益をなすと等なり、死亡又は離婚によりて解除せ

【佛】如来の一切の秘密事を知り、五百の夜叉と神とを領して、千佛の法を護すといふ二つの神、多くは共に、全身を露出したる腹間に衣裳をまとい、勇猛悍惡の相をなす、この二神の像を寺門の左右に分ち置く、左を密跡金剛といひ、右を那羅延金剛といひ、

こんがーこんが

【佛】如来の一切の秘密事を知り、五百の夜叉と神とを領して、千佛の法を護すといふ二つの神、多くは共に、全身を露出したる腹間に衣裳をまとい、勇猛悍惡の相をなす、この二神の像を寺門の左右に分ち置く、左を密跡金剛といひ、右を那羅延金剛といひ、

【佛】如来の一切の秘密事を知り、五百の夜叉と神とを領して、千佛の法を護すといふ二つの神、多くは共に、全身を露出したる腹間に衣裳をまとい、勇猛悍惡の相をなす、この二神の像を寺門の左右に分ち置く、左を密跡金剛といひ、右を那羅延金剛といひ、

こんかーこんき

【佛】如来の一切の秘密事を知り、五百の夜叉と神とを領して、千佛の法を護すといふ二つの神、多くは共に、全身を露出したる腹間に衣裳をまとい、勇猛悍惡の相をなす、この二神の像を寺門の左右に分ち置く、左を密跡金剛といひ、右を那羅延金剛といひ、

【佛】如来の一切の秘密事を知り、五百の夜叉と神とを領して、千佛の法を護すといふ二つの神、多くは共に、全身を露出したる腹間に衣裳をまとい、勇猛悍惡の相をなす、この二神の像を寺門の左右に分ち置く、左を密跡金剛といひ、右を那羅延金剛といひ、

こんえーこんく

扶養の義務を負ふと、夫は妻の財産を管理し使用収益をなすと等なり、死亡又は離婚によりて解除せ

こんくーこんく

扶養の義務を負ふと、夫は妻の財産を管理し使用収益をなすと等なり、死亡又は離婚によりて解除せ

こんくーこんん

扶養の義務を負ふと、夫は妻の財産を管理し使用収益をなすと等なり、死亡又は離婚によりて解除せ

こんねーこんす

わかれ、死別。
(こん)おやち(言)「言上」(名) 申しあぐる。
(こん)おゆんくわんせう(言)「混循環小
(こん)おゆんくわんせう(言)「混循環小
(こん)おゆんくわんせう(言)「混循環小
(こん)おゆんくわんせう(言)「混循環小
(こん)おゆんくわんせう(言)「混循環小
(こん)おゆんくわんせう(言)「混循環小
(こん)おゆんくわんせう(言)「混循環小
(こん)おゆんくわんせう(言)「混循環小
(こん)おゆんくわんせう(言)「混循環小
(こん)おゆんくわんせう(言)「混循環小

こんせーこんせ

わと。●神氣おとろ(身) 體つかれて、たゞうとり
としてねむりである。
(こん)せり(言)「今宵」(名) 次條に同じ。
(こん)せせ(言)「今夕」(名) こよひ。こんや。
(こん)せせ(言)「今昔」(名) いまもわかしと。
(こん)せせ(言)「今昔」(名) いまもわかしと。
(こん)せせ(言)「今昔」(名) いまもわかしと。
(こん)せせ(言)「今昔」(名) いまもわかしと。
(こん)せせ(言)「今昔」(名) いまもわかしと。
(こん)せせ(言)「今昔」(名) いまもわかしと。
(こん)せせ(言)「今昔」(名) いまもわかしと。
(こん)せせ(言)「今昔」(名) いまもわかしと

こんだーこんで

さまにいふ語。●圭角又は缺陷なきさまにいふ語。
(こん)たい(言)「今代」(名) いまのよ。
(こん)たい(言)「今代」(名) いまのよ。
(こん)たい(言)「今代」(名) いまのよ。
(こん)たい(言)「今代」(名) いまのよ。
(こん)たい(言)「今代」(名) いまのよ。
(こん)たい(言)「今代」(名) いまのよ。
(こん)たい(言)「今代」(名) いまのよ。
(こん)たい(言)「今代」(名) いまのよ。
(こん)たい(言)「今代」(名) いまのよ。
(こん)たい(言)「今代」(名) いまのよ

こんてーこんに

(こん)てん(言)「渾天儀」(名) 圓球の表面に日月星
辰等天體を描(む)きたるもの、形恰も地球儀の如し、
古昔これを天體の運行を測量するに用ひたり。
コンデンスミルク [Condensed milk] (名) 牛
乳を煮つめ、砂糖を加えて甘味をつけたるもの、罐
詰として貯(たくわ)んせり、小児などの飲用に供
(こん)ど [今度] (名) 副。このたび、今回。
(こん)ど [今度] (名) 副。このたび、今回。
(こん)ど [今度] (名) 副。このたび、今回。
(こん)ど [今度] (名) 副。このたび、今回。
(こん)ど [今度] (名) 副。このたび、今回。
(こん)ど [今度] (名) 副。このたび、今回。
(こん)ど [今度] (名) 副。このたび、今回。
(こん)ど [今度] (名) 副。このたび、今回。
(こん)ど [今度] (名) 副。このたび、今回。
(こん)ど [今度] (名) 副。このたび、今回



このごら。いま。
(こん)にや(言)「今や」(名) 今。
(こん)にや(言)「今や」(名) 今。
(こん)にや(言)「今や」(名) 今。
(こん)にや(言)「今や」(名) 今。
(こん)にや(言)「今や」(名) 今。
(こん)にや(言)「今や」(名) 今。
(こん)にや(言)「今や」(名) 今。
(こん)にや(言)「今や」(名) 今。
(こん)にや(言)「今や」(名) 今。
(こん)にや(言)「今や」(名) 今

こんへーこんへ

は帯の状をなし、褐色にして體內に毒腺を含有
す、柔軟なれど強韌なり、往々數十丈に達す、食用に
供し、又、祝賀などに用ふ、ひるめ(海帶)
(こん)べん(言)「偏」(名) 漢字の偏の名、論說など
の字の左にある言の字の稱。
(こん)べん(言)「偏」(名) 漢字の偏の名、論說など
の字の左にある言の字の稱。
(こん)べん(言)「偏」(名) 漢字の偏の名、論說など
の字の左にある言の字の稱。
(こん)べん(言)「偏」(名) 漢字の偏の名、論說など
の字の左にある言の字の稱。
(こん)べん(言)「偏」(名) 漢字の偏の名、論說など
の字の左にある言の字の稱。
(こん)べん(言)「偏」(名) 漢字の偏の名、論說など
の字の左にある言の字の稱。
(こん)べん(言)「偏」(名) 漢字の偏の名、論說など
の字の左にある言の字の稱。
(こん)べん(言)「偏」(名) 漢字の偏の名、論說など
の字の左にある言の字の稱。
(こん)べん(言)「偏」(名) 漢字の偏の名、論說など
の字の左にある言の字の稱

さいりーさいか

さいりーさいか ち、讀んで書き某君の二に呈す。——のめい「座右銘」(名)常に自分の性行の標準となす訓戒。

さいがーさいか

さいがーさいか 摩摩及豐岐、對馬の稱。「さいがい」(災害) (名)暴風雨、地震、洪水などの自然のわざはひ。又自家の性行に關係なくして來れるわざはひ、災禍、災難。

さいかーさいき

さいかーさいき 英(名)「種」前後に同じ。——むし「皂莢蟲」(名)「動」かぶとむしの一名。

(さい)さいり「罪告」(名) つみ、とが。

(さい)さいり「罪告」(名) つみ、とが。

(さい)さいり「罪告」(名) つみ、とが。

(さい)さいり「罪告」(名) つみ、とが。

(さい)さいり「罪告」(名) つみ、とが。

(さい)さいり「罪告」(名) つみ、とが。

(さい)さいり「罪告」(名) つみ、とが。

(さい)さいり「罪告」(名) つみ、とが。

(さい)さいり「罪告」(名) つみ、とが。

(さい)さいり「罪告」(名) つみ、とが。

(さい)さいり「罪告」(名) つみ、とが。

(さい)さいり「罪告」(名) つみ、とが。

(さい)さいり「罪告」(名) つみ、とが。

(さい)さいり「罪告」(名) つみ、とが。

(さい)さいり「罪告」(名) つみ、とが。

(さい)さいり「罪告」(名) つみ、とが。

(さい)さいり「罪告」(名) つみ、とが。

(さい)さいり「罪告」(名) つみ、とが。

(さい)さいり「罪告」(名) つみ、とが。

(さい)さいり「罪告」(名) つみ、とが。

(さい)さいり「罪告」(名) つみ、とが。

知さくー知さく

知さくー知さく

知さくー知さく

知れぬ一知れぬ

の方決定するを普通とす。

(ざいけつ) 判決 (名) 理非を判断して申渡すと。さばき。①法行政官府が、或事項を裁断する處分。――**ざいけつ書** (名) 裁決の主意をまた、めたる文書。

(ざいげつ) 歳月 (名) としつき、年月。

(ざいけん) 細見 (名) くはしく見ると。くはしく示すと。②こまかな意見。

(ざいけん) 債券 (名) 債権を証明するための證書、銀行會社などが社債に對して發行するものに對し、一定の形式を具すべきもの。――**がく** (債券額) (名) 債券に記載しある金額。

(ざいけん) 債権 (名) 〔法〕財産權の一、一人に權とも稱す、特定の人に対して或行為又は不行爲を要請する權利、此權利は債務者に對してのみ効力を有し、一般に對しては効力を有するものにあらず、質主の權利、屋主の權利等これなり。債務の對、――**がく** (債權額) (名) 金額を目的とする債權に對し、其金額の額。――**あや** (債權者) (名) 特定の人、對して債權を有する者。――**あよりあよ** (債權證書) (名) 債權を證明する證書、金額の借用證書の如きこれなり。――**たんぼ** (債權擔保) (名) 債權の擔保を確かにするための擔保。

(ざいげん) 際限 (名) をはり、かぎり、はて。

(ざいげん) 再現 (名) 再び現はると。又、再び現はすと。①心、一旦經驗したる表象が、再び意識中に現はると。

(ざいげん) 罪隠 (名) つみ、とがめ。

(ざいげん) 財源 (名) 財の産出する場所又は財を收得し得べき事實、財のもと、「枯湯す」。

(ざいご) 最期 (名) さいまはのきは、まじきは。

知れぬ一知れぬ

りんごゆう、まつご。③たまひ、ををり、つまり。

(ざいご) 最後 (名) 終末、すま、最終。――**りご** (ざいご) (名) 再び興へすと。又、再び興へすと。

(ざいご) 警告 (名) うながし告ぐると。

(ざいご) 裁判所 (名) 或事件につき公示催告をなしたる區裁判所。――**さいむ** (催告債務) (名) 〔法〕債務の履行が、債權者の催告を條件となすもの。

(ざいご) 西國 (名) 西方の國。九州地方の一名「もろ」。③西國三十三所の略言。――**ざんぶさん** (西國三十三所) (名) (もと東國の人の京都に上りたる途次に巡禮せしに起る) 三十三所に同じ。――**あゆみ** (西國順禮) (名) 西國三十三所を順禮すると。又、其人。

(ざいご) 在國 (名) 國もとに居ると。

(ざいご) 在獄 (名) 獄會にとらはれてあると。

(ざいご) 罪業 (名) 〔佛〕罪とみるべき作行。(ろ) 罪のむく。

(ざいご) 最期屍 (名) 〔佛〕などの追討せられて、苦しき最期に放つ惡鬼。③轉じて、最後の。

(ざいご) 再建 (名) 二度の建立。(窮蹙)。

(ざいご) 菜根 (名) 野菜の根、轉じて、絶末なる食物。

(ざいご) 再婚 (名) 夫若しくは妻に對して、夫との關係を解除せられたるものが、他の男子若しくは女子と婚姻すると。再度目の結婚。

(ざいご) 歳差 (名) 〔天〕春分點が毎年僅かづ、逆行するに由りて、春分の時季が年毎に僅かづ、進むと。春分點は年々弧度五〇・二四秒づ、逆行する故に、二萬五千八百年に於て黃道を一周す。

知れぬ一知れぬ

(ざいご) 細細 (名) こまかきまにいふ語。

(ざいご) 再々 (名) たびたび、再三。

(ざいご) 在在 (名) そこ、この在郷。――**ざんぶ** (ざいご) (名) 前條に同じ。

(ざいご) 才藻 (名) 詩歌などを作る思想、又、其思想に富んであると。

(ざいご) 洒掃 (名) ふきざらぐ。

(ざいご) 幸先 (名) さちさき、よきまへたるし。

(ざいご) 細作 (名) まのびのもの。問者、探さきをとつひ。「偵」。

(ざいご) 再三再四 (名) 二度三度、たびたび。

(ざいご) 財産 (名) 人の所有に屬する金錢上の價格ある有體物又は無體物の稱、普通には、人の所有に屬する金錢上の價格ある動産及不動産の稱。――**か** (財産家) (名) 財産を多く有する人、かねもち。――**けい** (財産刑) (名) 〔法〕國家が犯罪者より財産をとりたつる刑罰、罰金、科料、沒收の三種あり。――**けん** (財産權) (名) 〔法〕財産を目的とする私權、即ち金錢を以て評價し得らる、私權分つて物權、債權、特權の三種とす。――**さし** (財産差押) (名) 〔法〕強制執行の一、債權者が國家の公力によりて、債務者の財産に對し差押をなすと。(ろ) 強制徵收の一、一私人の納稅義務を果さざる場合に、國家又は自治體が、其人の財産に對し差押をなすと。――**せいど** (財産制度) (名) 個人の財産を保護する國家の規定。

(ざいご) 分離 (名) 〔法〕總財產の中より、或部分を分離すると。特に、財産の中より、相繼に係連する財産のみを分離すると。――**へい** (分離)

んろん (財産平均論) (名) 各人の財産を平均して、富富の懸隔をなくしめんとしむ主義。

――**もくろく** (財産目録) (名) 或人に屬する現在の財産の種類及價格を、明確に記載したる目録。

(ざいご) 祭祀 (名) まつり、さいてん。「儀」。

(ざいご) 祭菜 (名) 神を祭るに供ふる物、くもつ。

(ざいご) 才子 (名) 才智のすぐれたる人、さいぶ。

(ざいご) 才思 (名) よく活動する思想。「つ」。

(ざいご) 妻子 (名) つまんと子と。

(ざいご) 細思 (名) 細かきかんがへ。

(ざいご) 祭資 (名) 祭事の資金、まつりの費用。

(ざいご) 算子 (名) 古昔の算術の算子、ざんし。

(ざいご) 細字 (名) こまかき文字、〔題頭字〕。

(ざいご) 細事 (名) こまかなこと、小事。③くはしき事、あさい。

(ざいご) 歳次 (名) 支那にて、二十八宿を十二次に分け、歳星は、一年に一次を周り、十二年に十二次を一周すとの義より出づ」とし、まはるとし。『明治元年 戊辰正月吉日』。

(ざいご) 歳時 (名) 一年中のをり、「一紀」。

(ざいご) 祭事 (名) かみごと、あんぎ、まつり。

(ざいご) 際次 (名) とき、をり。

(ざいご) 最期 (名) もの、小さくして相手となすに足らぬさまにいふ語。

(ざいご) 罪死 (名) 刑罰を受けて死ぬると。

(ざいご) 罪囚 (名) 獄會に監禁がれたる罪人、つみびと、めしうど。

(ざいご) 彩色 (名) いろどり、着色。

(ざいご) 彩色指 (名) 彩色したるすりのもの。

(ざいご) 彩色繪 (名) 彩色したる繪。

知れぬ一知れぬ

(ざいご) 齋食 (名) 〔佛〕口舌の嗜欲をと、のふる、程度を越すと、食事をせざると。(ろ) 法會の施食、とき。

(ざいご) 彩色 (名) 他、か四、「さいしきを活動したる語」いろどる、まどろ。

(ざいご) 祭日 (名) ちはやけの祭典ある定日、祝日。③神道にて、死者を祭る當日。

(ざいご) 罪賞 (名) 犯罪の性質、例へば破産罪又は國事犯といふ如きは、罪賞による區別なり。

(ざいご) 採集 (名) よりととりて集むると。とりあつむると、植物の一。

(ざいご) 宰相 (名) 君王を輔弼し大政を總理する官、丞相。③古昔、參議の一。

(ざいご) 最上 (名) 最もうへなると、これに上りたるものなると、「一品」。「なる罪業」。

(ざいご) 罪障 (名) 〔佛〕往生のさはりと。

(ざいご) 罪状 (名) 罪過の事實又は狀態、と、ひらひととる。

(ざいご) 祭主 (名) 伊勢神宮の神官の長、古は大臣氏を以てこれに任せられたる、今は皇族を以て任せらる。③祭事を行ふ主たるもの、「喪主」。

(ざいご) 祭酒 (名) 支那にて、學政を掌りし官。③昔時、大學頭の唐名。「する人」。

(ざいご) 債主 (名) 負債主に對して、債權を有する人。

(ざいご) 最終 (名) をはり、たまひ、「と」。

(ざいご) 再從兄 (名) 年上のいとやいと。

(ざいご) 再從兄弟 (名) いやいやと。

(ざいご) 再從弟 (名) 年下のいとやいと。

(ざいご) 在宿 (名) 家に居ると。「登野駒平」。

知れぬ一知れぬ

(ざいご) 再輸出 (名) 一旦外國に輸入せられたる貨物を、再び外國へ輸出すると。「ると」。

(ざいご) 再出 (名) 二度出ると、又、二度出ると。

(ざいご) 歳出 (名) 國家又は公共團體の會計年度中の支出の總額、歳入の對。

(ざいご) 再輸入 (名) 一旦外國へ輸出せし貨物を、再び外國に輸入すると。「又、其人」。

(ざいご) 才俊 (名) 才能のすぐれたると。

(ざいご) 最初 (名) 最も初め、えとよて。

(ざいご) 在所 (名) すましか、ありか。③さいがう、ひなな。③くにもと、ふるさと。

(ざいご) 濟勝 (名) 勝地を踐踏すると。――**のぐ** (濟勝具) (名) 濟勝に通ずる健脚の稱。

(ざいご) 罪證 (名) 犯罪を明かにする證據。

(ざいご) 菜食 (名) 野菜類を常食とする。肉食の對。

(ざいご) 菜色 (名) 野菜の色の醜食料不足として衰へたる顔色。「民に多し」。「飾」。

(ざいご) 彩色 (名) さいしき、いろどり、〔録〕。

(ざいご) 栽植 (名) 果樹などを植うると。

(ざいご) 才色 (名) 才智と容貌と。「動」。

(ざいご) 在職 (名) 職務を勤めて居ると。(在)。

(ざいご) 在牙 (名) 象牙にて製(り)たる三味線の撥(り)ものとの四角形をなす部分。

(ざいご) 細辛 (名) 〔種〕馬兜鈴科に屬する草、葉は上昇せず、花は整齊にして三瓣、紫黒色なり、根は藥用に供せらる。

(ざいご) 再審 (名) 一旦審理を終へたるものを再び審理すると。二度のさしべ。③〔法〕裁判所が、已に確定判決となりたる民事訴訟を、取消又は

さいせい

原状回復の訴に因りて、更にこれを審判すると、又、已に確定判決となりたる刑事訴訟を、事實誤認の明白なる場合に、検事又は刑事被告人若しくは其親屬の訴により、更に其事件を審判すると。

さいせい

皇祖を尊崇したまふは即ち國家を統御したまふ所以にして、官殿は神器の正宮と天皇の所在とをかねたりし状態の稱。

さいせい

さいせいふ(妻妾)一名 つまとめかけと。さいせん(再選)一名 再度當選すると。又、再度選挙すると。

さいせい

(さい)たん(裁断)一名 たちきると。●理非善惡を判(つ)けさだむると。さばき。

さいせい

と。最下。——かんたんけい「最低寒暖計」(名) 或時間内の最低の温度を示す寒暖計。

さいせい

さいせい(再任)一名 再び其官に任ぜらるると。さいにん(罪人)一名 罪を犯したる人。はんざいにん(犯人)一名 罪を犯したる人。



さいはーさいは

攝取し、これを同化して新分子を生じ、消耗したる舊分子に代ふ。斯くて次第に増大して、或一定の度に達すれば、二個以上の新細胞となりて生殖す。



【うはいき】

えき「細胞液」(名) 細胞中に充滿しある液。――
びんけい「細胞原形質」(名) 細胞を形成する原形質、蛋白質にして顆粒状をなし、炭・酸・水・窒の四元素より成る。――そまき「細胞組織」(名) 其生體が細胞の集合によりて構成せられたる。――まく「細胞膜」(名) 細胞の原形質の表面を被ふ薄膜。



【しびひはいき】

さいはじける「再犯」(名) 才彈(自、か下) 小利口にして思慮深からず、こまじやくれる。
さいはて「最果」(名) 最後。
さいはび「幸」(名) さきはひの音便。――
さいはび「幸」(名) 福。――
さいはび「幸」(名) 玉粟。――
さいはび「幸」(名) 都合よくて、まあはせに。
さいはび「幸」(名) 危険を免る。――
さいはび「幸」(名) 模倣の名。
さいはび「幸」(名) 自、は四、さきはひ、の俗稱、もとは馬を牽く時に話ひしものといふ。
さいはび「再犯」(名) 同一の圖書を再度出版す。
さいはび「再犯」(名) 以前に罪を犯し、ものが、また罪を犯すと、當て有罪の判決を受けしものが再

さいはーさいは

び罪を犯すと。――かぢゆう「再犯加重」(名) 〔法〕再犯者に科する刑罰は、等を加へて重くする。――
さいはん「歳晚」(名) 年のくれ。せつき。(歳暮)
さいはん「裁判」(名) 是非曲直のさばき。――
さいはん「裁判」(名) 訴訟を審理し、これを裁断して法現の適用を定むる。判決命令決定等を包含す。――
くわん「裁判官」(名) 裁判所を組織し裁判上の事務を取扱ふ官吏。――
くわん「裁判官」(名) 裁判所が其職權を行使するを許されたる區域、(管轄裁判所の條参照)。――
けん「裁判權」(名) 〔法〕裁判を稱する統治權の一作用。又、裁判所が裁判を行ふ權限。――
きよ「裁判所」(名) 〔法〕裁判及民事刑事の裁判をなす國家の機關(法衙)――
せき「裁判籍」(名) 〔法〕土地に關する裁判管轄を、其裁判を受ける人より見ての稱。――
てい「裁判廷」(名) 〔法〕法廷に同じ。――
ひ「裁判費用」(名) 〔法〕裁判に關して當然要すべき費用、即ち證人又は鑑定人等の日當・旅費若しくは印刷用紙等の費用の如きこれなり。訴訟費用。
はん「在判」(名) 公文書に奉行人の名の下に記す謂、在官の裁判の義なりといふ。――
はん「在判」(名) 又、捺印あると。

さいはん「罪犯」(名) つみ、とが、きようぢやう。
さいはん「在番」(名) 勤番にあると。
さいはん「歳費」(名) 一年間の入費。――
さいはん「柴扉」(名) 志ばのとびら。又、わびしきす。
さいはん「細微」(名) こまかきと、ちひさきと。
さいはん「歳尾」(名) としのくれ。せつき。

さいひーさいは

さいひつ「才筆」(名) 巧妙なる文章。又、巧妙なる文章をかき得る才能。
さいひつ「才筆」(名) くはしき批評。
さいひつ「財布」(名) 金銭を入れて懐中する袋、かねいれ。
さいひつ「在府」(名) 徳川時代に、江戸に在動してサイフォン(Syphon) (名) 〔理〕曲がりたる管を流し、其短脚を液體に入れ、長脚より他の器に液を流出せしむるもの。――サイフォン(ラムネ)の器。――ラムネ(名) 口にサイフォンの設置ある瓶に入れある「ラムネ」。

さいふく「祭服」(名) 祭主又は神官などが、祭典のときに着る衣服、白色の布帛にて仕立て、形は袍に似たるもの。(齋服)。
さいふく「財布」(名) 金財布のそと。轉じて、金銭の出入のなめ、「を指す」。
さいふく「才物」(名) 才子。
さいふく「財物」(名) 價格ある物品、たからもの。
さいふく「財物」(名) 西暦標準時(名) 澎湖海峡を通過する東經百二十度線上の時刻、中絶群島及臺灣の標準時なり。
さいふく「采振」(名) 采配をふる人。――
さいふく「祭文」(名) 祭事に、神靈に告ぐる文。
さいふく「彩票」(名) 富國の札とみふだ。
さいふく「才辯」(名) 言詞(才)の巧み。
さいふく「菜圃」(名) 蔬菜を植ふるはたけ。――
さいふく「裁縫」(名) 布帛を裁ち縫ふこと。――
さいふく「再發」(名) 病氣又は惡癖などの再び。
さいふく「材木」(名) 物をつくる原料、もと。

さいらーさいら

さいらつ「歳末」(名) 年の暮。せいは。(歳暮)。
さいらつ「細末」(名) こまかき物事。――
さいらつ「細末」(名) 〔帳〕賃布、路、かき粉。
さいらつ「細美」(名) 粗末なる麻布、さよみ、の紋。
さいらつ「細密」(名) こまかきと、めんみつ、ち。
さいらつ「細民」(名) こま、下民。――
さいらつ「催眠術」(名) Mesmerism (名) 人をして意識を或一點に集注せしめ、以て睡眠若しくは喪心の状態とならしむる術、近時大に流行す、或はこれによりて、時空を超越したる靈的活動を認むべしといふ。
さいらつ「債務」(名) 〔法〕特定の人に對して、或行爲をなすべき又はなさざるべき義務、即ち金銭などを借りたる人の辨濟すべき義務の類、債權の對――
さいらつ「債務者」(名) 辨濟すべき金銭の額債務を負ふもの、即ち金銭を借りたる者の類。
さいらつ「債務名義」(名) 〔法〕法律上に於て強制執行の基たるべきものと認めらるる、書面例へば公正證書又は執行命令等の類これなり。
さいらつ「財務」(名) 財政上の事務。――
さいらつ「財務行政」(名) 財務に關する行政、國家の財務行政は大蔵大臣これを掌る。――
さいらつ「財務官」(名) 財政上の事務を取扱ふ官吏。
さいらつ「在銘」(名) 製作物に其作者の銘のあらむ。(有銘)。
さいらつ「罪名」(名) 犯罪の名稱、例へば官吏侮辱又は殴打創傷等の如きこれなり。
さいらつ「在苗」(名) 在所即ち居る場所の名によりて付けたる苗字、新田郷に居る新田を名のる

さいらーさいら

さいらつ「四面」(名) 後鳥羽天皇の時に置かれたる院の御所を守護せし武士。
さいらつ「細目」(名) こまかき簡條。「なる木」
さいらつ「材木屋」(名) 建築又は製作等の材料とす材木屋の處の略言、高くとまるの謎ひなりといふ。倭儼なる人、きどりや。――
さいらつ「材木屋」(名) 元祿頃に流行せし男子の髪風、頭の背部に細く髪を結びたるもの。
さいらつ「財物」(名) 金銭又は金銭上の價格を有する物品の稱、家財、たからもの、たから。
さいらつ「柴門」(名) 志ばのと。
さいらつ「祭文」(名) さいらつに同じ。
さいらつ「祭文讀」(名) さいらつに同じ。
さいらつ「在野」(名) 官に仕へずして民間にある。
さいらつ「西洋」(名) せいやうに同じ。
さいらつ「探薬」(名) 薬用となる草木を採取す。
さいらつ「災厄」(名) わざはひ、災難。「ると」。
さいらつ「在役」(名) やくづき、在職、在勤。
さいらつ「再輸出」(名) さいらつに同じ。
さいらつ「再輸入」(名) さいらつに同じ。
さいらつ「採用」(名) 採りあげ用ふる。――
さいらつ「財用」(名) 資財と費用と、又、物事に要する費用の支出。
さいらつ「財欲」(名) 財の欲する慾望。
さいらつ「再来」(名) 再び此世に生れ出たりといふと、うまれかはり、「空海の」。

さいらーさいら

さいらつ「在來」(名) ありきたり。
さいらつ「宰老」(名) 大小名の家臣の長、から。
さいらつ「豺狼」(名) やまいぬとよほかみと、轉じて、やまいぬや狼の如き心の人、醜態にして貪吝あるをあらぬ人。
さいらつ「采領」(名) 采を領する者、とら。
さいらつ「才略」(名) 才智ありて、よくはかりごとを立つる。――
さいらつ「才力」(名) 智慧のはたらき。
さいらつ「祭禮」(名) かみごと、まつり。
さいらつ「罪戻」(名) つみ、とが。
さいらつ「材料」(名) 物をつくるたね又はたすけとなるもの。
さいらつ「理」(名) 發音體の振動数を論ずるに用ふる一種の器械。
さいらつ「采籠」(名) 籠作(カゴ)の袋とら。
さいらつ「齋王」(名) いつきのみこ。
さいらつ「幸若」(名) 舞の一種、桃井直常の後裔にして歌山の稚兒なる幸若磨が、始めて舞ひしもの、能に似て樂器なく扇拍子のみにて謡ひ舞ふ。
さいらつ「再割引」(名) 或銀行が、一旦割引したる手形を更に裏書して譲渡をなし、再びこれを割引すること。

ざいゐーざり

(ざいゐ) 在位(名) 帝王の位にゐるさま。御宇。
(ざいゐん) 齋院(名) 古昔、加茂神宮に仕へられし内親王、いつきのあん。一 齋院司(名) 齋院の事を掌りしつかさ。
(ざいゐん) 菜園(名) 野菜を植うるはたけ。
(ざいゐん) 才媛(名) 才多き婦人。又、時歌などに巧なる女子。
(ざいゐん) 坐懸(名) 世説に出づ。番を圍むと。
(ざいゐ) 相(名) ①かたち、すかた。②人の一。③にんさう。④一を顧る。⑤一切の品類の形状。かたち。⑥其の五までを大略といひ、六より十までを中略といひ、末の才(上)爲(下)中(下)の三を細略といふ。さうのこと。
(ざいゐ) 喪(名) さちゆう。も、一服。
(ざいゐ) 草(名) くさ。くさむら。①ふたがき。②文豪。③草書。④の手。⑤かか。
(ざいゐ) 操(名) みさを。
(ざいゐ) 槽(名) かひをけ。馬槽。③さかぶね。さかだる。④ふね。たけ。
(ざいゐ) 曹(名) ともがら。くみ。なま。③吾一。
(ざいゐ) 嫂(名) あによめ。嫂。
(ざいゐ) 想(名) 思想の略。③佛。吾人の心意に日夜斷ゆることなき安念。
(ざいゐ) 壯(名) つよきと。強健。③さかんなる。り。つばなる。④おほいなる。雄大。⑤三十歳前後。わかざかり。⑥血氣さかんなる者。わかもの。
(ざいゐ) 雙(名) つら。そび。兩方。①の氣。
(ざいゐ) 莊(名) さうぜん。莊園の略。③志。よろに同じ。
(ざいゐ) 左右(名) みごひだり。③りさま。容。



[うさ]

ざりーざりあ

體「脚」を何よ。③かどづれ。たより。①がな。ざりう(然)副(然)の延言。其如く。まか。①いよ。ざりう(艘)接尾 船を載ふるにいよ語。「田船千一入船千」。「脚風一」。
(ざりう) 接尾 一對の物を載ふるにいよ語。「ざりう」様(接尾) 動詞に添へて、さまの意を表はす語。「船」。「船」。
(ざりう) 象(名) ①動。哺乳類中長鼻類に屬する獸。體の巨大なる陸棲動物の隨一なり。每肢五趾を具す。眼は狭小なり。鼻は圓筒狀に延長して屈伸自在なる。恰も人類の指の如し。上顎の二門齒は頗る長く、俗にこれを象牙といふ。現時の世界に棲息するは、インド一種「アメリカ」種の二とす。力量も強く性質冷情温順なり。②かた。かたち。
(ざりう) 像(名) ①かたち。さま。②(理)光の反射。又屈折により映ひる物體の形。實際光線などに映るものを實像といひ、鏡面などにてたゞ眼にのみ映るものを虚像といふ。③神佛。人類又は鳥獸等の形體を模して、描き又は造りたるもの。佛一。
(ざりう) 臆(名) 體内の心。肝腎。神などの總稱。
(ざりう) 臆(名) 盜竊。賄賂。其他不法なる手段によりて、財物を取ると。又、其取りたる財物。「一」。
(ざりう) 藏(名) をさめ持つと。又、其物。某氏の。
(ざりう) あい(草鞋) (名) わらじ。わらじつ。
(ざりう) あん(草案) (名) またがきの文案。草稿。



[うさ]

ざりあーざりか

(ざりあ) めん(草庵) (名) 草のいはり。又、いよせ。いはり。草庵。
(ざりあ) 創意(名) おもひつき。も。あひ。ざりあ(創意) (名) さず。③受けたる相害。
(ざりあ) 造意(名) くふう。かんがへ。
(ざりあ) いち(争友) (名) よく忠告する友人。
(ざりあ) えい(造營) (名) 家屋などを建築すること。いとみつくると。
(ざりあ) えん(蒼鉛) (名) ①化。赤色の光澤を有し。美観に結晶せる金屬。精々。なるものにして、往々遊離して存在し、或は磁石鉛となりて存在す。其合金は融解し易くして模型を作るに用ひられ。化合物は醫藥に用ひらる。
(ざりあ) ねん(相應) (名) つりあふと。相當。
(ざりあ) らん(噪音) (名) ①(理)振動が急激に生ずる。か若しくは不規則なるかの音。調子にのらぬ音。樂音の對。
(ざりあ) かい(喪家) (名) 家を喪ふと。やどなし。③喪(に丁)れる家。④おとろへたれたる家。
(ざりあ) かい(早歌) (名) 中古。地下(の)諸物。神樂のははやうたといひてこれと別なりといふ。
(ざりあ) かい(唱歌) (名) ぶた。うた。に同じ。
(ざりあ) かい(爪牙) (名) つめと。きばと。③たのみになる手先。たすけになる部下。子に王の。な。
(ざりあ) かい(草鞋) (名) さうあいに同じ。
(ざりあ) かい(藻海) (名) ①地。大西洋中流の通路にて、海草のあまた繁茂せる所。
(ざりあ) かい(掃海) (名) 海中に敷設したる諸種の危険物などを、運子て取除きて、航海を安全ならしむると。
(ざりあ) かい(雙魚) (名) ①二ひきのう。②雙龍ともいふ。龍魚の中に手紙の入れありし故事に出づ。がみ。尺牘。③さゆ。④雙魚宮(名) [天]十二宮の一。現今は春分點此内にあり。
(ざりあ) かい(葬具) (名) 葬式に必要な道具。①。②葬具師(名) 葬具をつくる人と。葬とする人。③葬具屋(名) 葬具をつくり又は賣る人。
(ざりあ) かい(造句) (名) 句をつくりつくると。
(ざりあ) かい(遭遇) (名) ①むすぶ。出合ふと。出會ふと。②せん。遭遇戰(名) 彼の行動中に、相衝突して生ずる戰闘。
(ざりあ) かい(果窟) (名) 匪徒又は盜賊などの根據地。すか。す。③監獄の一。
(ざりあ) かい(想化) (名) 哲。まさうくわ(思想化)に同じ。
(ざりあ) かい(造花) (名) 紙又は帛などを切りて、花の形を造ると。又、其つくりたる花。つくりばな。
(ざりあ) かい(造化) (名) ①天地間に於ける萬物が、生死現滅しつ、無窮に傳はると。②宇宙を経營する神。造物主(造物者)。③さめり。④造化奇妙(名) ①あはせよきと。つがふよきと。
(ざりあ) かい(造化三神) (名) 神道にて、天御中主(アマノミナカヌシ)神。高皇產靈(タカヒコノミ)神。神皇產靈(カミヤマトリ)神の稱。
(ざりあ) かい(爽快) (名) さはやかにてこゝろよきと。意氣さかんにしてたのしきと。
(ざりあ) かい(倉皇) (名) あわたしきと。あわつると。倉卒。蒼黃。
(ざりあ) かい(佐官) (名) 大寶令の第四等の官。さくわん。主典。
(ざりあ) かい(草冠) (名) 櫛弓にて、歌二十の

ざりかーざりか

(ざりか) かい(蒼海) (名) あをうなばら。あをうみ。蒼海。①ざりでん(蒼海桑田) (名) 桑田桑田と桑田とを替へて世の中を其しきうつりかはりにいよ語。①のいちぢく(蒼海一粟) (名) あをうみの中の一粒の粟の義。極めて多大なるものにして、極めて微小なるものいよ語。①は(蒼海波) (名) 琴を奏しとく手の一。ざりか(草冠) (名) さかんむりに同じ。
(ざりか) 霜降 (名) 二十四氣の一。秋季の末にして、陽曆十月二十三日頃にあたる。
(ざりか) 草稿 (名) またがき(原稿。草案)。あしき食物。①のつま(糟糠妻) (名) 貧しき時に娶りて、苦勞を共にしたる妻。①は堂より下さず。
(ざりか) かり(蒼昊) (名) あめ。そら。
(ざりか) かり(相好) (名) かはつき。容貌。人相。①をくつす 眞面目なるかはつきを變じて、大いに笑ひ又はよるこぼにいよ。
(ざりか) かく(賊祖) (名) ぬすみ物などのたか。
(ざりか) かく(雙殼類) (名) ①動。蛤(かき)などの如く、介殼の左右二つある貝の稱。
(ざりか) のいぬ(喪家狗) (名) おちぶれて憔悴したる人を、喪家の狗の食えず勢なきさまにたとへいよ語。
(ざりか) かい(相加平均) (名) ①數。數個の數の和を、其個數にて除したるもの。
(ざりか) がな(草假名) (名) ひらがな。
(ざりか) かふ(爪甲) (名) つめ。
(ざりか) かふ(装甲) (名) 鎧を着て身仕度する。③敵軍を防ぐために、船體に鎧板を施すと。

ざりがーざりさ

①志ゆんやうかん(装甲巡洋艦) (名) 巡洋艦の一種。戦艦と共に専ら戰闘に用ひられ、殊に遠く根據地を離れたる戰闘に適するもの。
(ざりが) がん(雙眼) (名) 雙方の眼。③兩眼。①さや(雙眼鏡) (名) ①短かき望遠鏡を二つ並べたる装置のものにして、兩眼にて望むに適す。各望遠鏡に、凸レンズを對物。凹レンズとし、凹レンズを接眼。凹レンズと。長き短き且物體の直立像を見るを得。近來對物及接眼。凹レンズの間にプリズムを得。全反射を利用して、長さを変更したるものあり。兩眼鏡。
(ざりが) がん(象眼) (名) ①古昔。布又は紙などに施し、細かき泥置。②今時。銅又は鍍などの面に、模様を刻み込み、中に金銀などを嵌めたるもの。
(ざりが) さ(早起) (名) はやあき。
(ざりが) さ(早歸) (名) はやがへり。
(ざりが) さ(想起) (名) 以前の事をおもひおこす。
(ざりが) さ(争議) (名) 意見又は議論の衝突。あらしもひ。③異なる意見主張して議論すること。
(ざりが) さ(葬儀) (名) 死者をはうむる儀式。とむらひの儀式。①や(葬儀屋) (名) 葬儀に要する器具を貸し若しくは賣る人又は家。
(ざりが) さ(早急) (名) ささきよに同じ。
(ざりが) さ(相形) (名) さうがう。かたち。さま。①あまの山。出づる馬の一。
(ざりが) さ(雙脚) (名) 二本の足。雙方の足。
(ざりが) さ(蒼穹) (名) あはぞら。あをぞら。
(ざりが) さ(壯舉) (名) 意氣さかんなる舉動。計畫雄大なるふるまひ。

ざりさーざりく

(ざりさ) めん(草庵) (名) 草のいはり。又、いよせ。いはり。草庵。
(ざりさ) 創意(名) おもひつき。も。あひ。ざりさ(創意) (名) さず。③受けたる相害。
(ざりさ) 造意(名) くふう。かんがへ。
(ざりさ) いち(争友) (名) よく忠告する友人。
(ざりさ) えい(造營) (名) 家屋などを建築すること。いとみつくると。
(ざりさ) えん(蒼鉛) (名) ①化。赤色の光澤を有し。美観に結晶せる金屬。精々。なるものにして、往々遊離して存在し、或は磁石鉛となりて存在す。其合金は融解し易くして模型を作るに用ひられ。化合物は醫藥に用ひらる。
(ざりさ) ねん(相應) (名) つりあふと。相當。
(ざりさ) らん(噪音) (名) ①(理)振動が急激に生ずる。か若しくは不規則なるかの音。調子にのらぬ音。樂音の對。
(ざりさ) かい(喪家) (名) 家を喪ふと。やどなし。③喪(に丁)れる家。④おとろへたれたる家。
(ざりさ) かい(早歌) (名) 中古。地下(の)諸物。神樂のははやうたといひてこれと別なりといふ。
(ざりさ) かい(唱歌) (名) ぶた。うた。に同じ。
(ざりさ) かい(爪牙) (名) つめと。きばと。③たのみになる手先。たすけになる部下。子に王の。な。
(ざりさ) かい(草鞋) (名) さうあいに同じ。
(ざりさ) かい(藻海) (名) ①地。大西洋中流の通路にて、海草のあまた繁茂せる所。
(ざりさ) かい(掃海) (名) 海中に敷設したる諸種の危険物などを、運子て取除きて、航海を安全ならしむると。
(ざりさ) かい(雙魚) (名) ①二ひきのう。②雙龍ともいふ。龍魚の中に手紙の入れありし故事に出づ。がみ。尺牘。③さゆ。④雙魚宮(名) [天]十二宮の一。現今は春分點此内にあり。
(ざりさ) かい(葬具) (名) 葬式に必要な道具。①。②葬具師(名) 葬具をつくる人と。葬とする人。③葬具屋(名) 葬具をつくり又は賣る人。
(ざりさ) かい(造句) (名) 句をつくりつくると。
(ざりさ) かい(遭遇) (名) ①むすぶ。出合ふと。出會ふと。②せん。遭遇戰(名) 彼の行動中に、相衝突して生ずる戰闘。
(ざりさ) かい(果窟) (名) 匪徒又は盜賊などの根據地。すか。す。③監獄の一。
(ざりさ) かい(想化) (名) 哲。まさうくわ(思想化)に同じ。
(ざりさ) かい(造花) (名) 紙又は帛などを切りて、花の形を造ると。又、其つくりたる花。つくりばな。
(ざりさ) かい(造化) (名) ①天地間に於ける萬物が、生死現滅しつ、無窮に傳はると。②宇宙を経營する神。造物主(造物者)。③さめり。④造化奇妙(名) ①あはせよきと。つがふよきと。
(ざりさ) かい(造化三神) (名) 神道にて、天御中主(アマノミナカヌシ)神。高皇產靈(タカヒコノミ)神。神皇產靈(カミヤマトリ)神の稱。
(ざりさ) かい(爽快) (名) さはやかにてこゝろよきと。意氣さかんにしてたのしきと。
(ざりさ) かい(倉皇) (名) あわたしきと。あわつると。倉卒。蒼黃。
(ざりさ) かい(佐官) (名) 大寶令の第四等の官。さくわん。主典。
(ざりさ) かい(草冠) (名) 櫛弓にて、歌二十の

さうくーさうけ

(さうくわん)「壯観」(名) さかんなるもの。りつばなるもの。(大観)
(さうくわん)「相関」(名) 雙方互に相関係する。
(さうくわん)「雙關」(名) 左右より閉じ、さしあはすやうに造りたる異字。

さうけーさうこ

(さうけん)「壯健」(名) すこやか。たつたや。ぶ。
(さうけん)「壯言」(名) 意氣さかんなるもの。
(さうけん)「草原」(名) くさばら。

さうこーさうぞ

營業をなす會社。
(さうこくわん)「相互會社」(名) 基金十萬圓以上ある相互保險の組合が、其事業を經營するため、規定により官許を得て設立したる會社。

さうきーさうき

財物を取りたる犯罪。
(さうき)「草創」(名) てはじめ。はじめ。
(さうき)「蒼蒼」(名) 蒼蒼たる。
(さうき)「蒼桑」(名) 蒼桑たる。
(さうき)「蒼白」(名) 蒼白たる。

さうきーさうき

(さうき)「雙子」(名) ふたご。
(さうき)「桑梓」(名) 郷土。
(さうき)「壯士」(名) 意氣さかんなるもの。
(さうき)「壯麗」(名) 雄壯なる。

さうきーさうき

る組織、あさがほ。そのまめの稱これなり。
(さうき)「壯士演劇」(名) さうき。
(さうき)「草紙紙」(名) てなひさうまの用紙。

ざえーさが

++ざえ「才」(名) ●さい、才智、●學問、技藝、一重し、一の、ねぼろ「才覚」(名) 才智又は學藝に秀でたりとの評判(才)
ざえ、かへる「才」(名) ●「才」返(自、三四) つよ

ざかーさか

(ざ)か「座下」(名) 書牘にて、先方の名宛の下に添へて敬意を表する語(案下、机下)
++ざか「あふら」(酒膏)(名) にごりざけ、(醜)
(ざ)がい「詐害」(名) ●いつはりたくらみて、他人の害をなすと、(法)いつはりを以て、他人の財産に損害を及ぼすと、(法)かりある(詐害行為)

さか座ーさか

さか座「倒木」(名) 木理(木)を逆に用ひたる材、(神樹、梁木、賢木、機樹)
++さか「さげん」(酒機嫌)(名) 酒を飲みて心持好きと、酔ひて精神爽快なる(酒機)
++さか「ささ」(酒蠟)(名) 酒の上に乗る蠟の如き(酒蠟)

さかしーさか

とのつみ、あしきつみ
さかし「賢」(形、二) ●すぐれたり、かしこし、つよし、いさまし、たけし、●賢者ありげに見ゆ、さかしなり、(賢)
++さかし「賢」(名) ●もの志りたるふりをなすと、わざと(賢)
++さかし「賢」(名) ●もの志りたるふりをなすと、わざと(賢)
++さかし「賢」(名) ●もの志りたるふりをなすと、わざと(賢)

さかだーさか

さかだ「つた」(逆立)(自、三四) ●逆に立つ(倒立)
++さか「だ」(酒店)(名) 酒を賣る店、さかや、さかみせ(酒店)
++さか「だ」(酒樽)(名) 酒を入れた貯(ツ)ふる樽、さかづき(酒杯)(名) ●酒を盛(モ)りて飲む小き器、古代は土器なりしが、後世は清器、陶器又は金銀、玻璃などの製を用ふ(盃、匙、盃、盃、さかづき)
++さか「だ」(盃洗)(名) ●「はいせん」の一名、(盃洗)
++さか「だ」(盃洗)(名) ●「はいせん」の一名、(盃洗)

さかばーさか

さかば「逆振」(名) ●さかさに振(ツ)ぶると、(逆振)
++さか「ば」(酒旗)(名) ●酒屋の看板の旗、(酒旗)
++さか「ば」(酒旗)(名) ●酒屋の看板の旗、(酒旗)
++さか「ば」(酒旗)(名) ●酒屋の看板の旗、(酒旗)

さかばーさかふ

さかばやし「酒林」(名) 酒屋にて、杉の葉を束ねて球状にし、樽先に懸けて看板とする。
さかばりつけ「逆藤」(名) 武家時代の極刑、罪囚の身體を逆さまにして行ふはりつけ。



さかひ「界」(名) 物と物と相結合する箇所。かぎり、國の。
さかひ「接」(名) 故に、因って、京阪地方の方言。
さかひ「酒浸」(名) 酒の中に浸すこと。
さかひ「酒浸」(名) 酒の中に浸すと。
さかひ「酒浸」(名) 酒の中に浸すと。
さかひ「酒浸」(名) 酒の中に浸すと。
さかひ「酒浸」(名) 酒の中に浸すと。

さかべーさかや

さかべ「酒部」(名) 古昔、造酒司に附屬せし職名。酒會のときの酒をあつかふもの。
さかま「酒部」(名) 酒を醸(ひ)めて飲む波巻き上。水底より波湧きあがる。「浪」(海)。

さかま「酒部」(名) 酒を醸(ひ)めて飲む波巻き上。水底より波湧きあがる。「浪」(海)。

さかやーさがり

さかや「酒部」(名) 酒を醸(ひ)めて飲む波巻き上。水底より波湧きあがる。「浪」(海)。

さかや「酒部」(名) 酒を醸(ひ)めて飲む波巻き上。水底より波湧きあがる。「浪」(海)。

さがりーさがる

さがり「下」(名) 物價などの下がりかけたると、下落の微候あると。
さがり「下」(名) 物價などの下がりかけたると、下落の微候あると。
さがり「下」(名) 物價などの下がりかけたると、下落の微候あると。



さがり「下」(名) 物價などの下がりかけたると、下落の微候あると。
さがり「下」(名) 物價などの下がりかけたると、下落の微候あると。

さがるーさがる

さがる「下」(名) 物價などの下がりかけたると、下落の微候あると。
さがる「下」(名) 物價などの下がりかけたると、下落の微候あると。

さきざり

さきざり(一)「鶴草」(名)「種」(さきざり)の一名。さきざり(二)「先下」(名) 先頭の下方に傾きたる。...

さきつ

さきつ(一)「先頭」(名) (さきの頃の鶴) さきつ(二)「先年」(名) (さきの年の鶴) さきつ(三)「先手」(名) 他人より先に取ると。...

さきは

さきは(一)「先走」(名) (さきばし)と、又、其人。さきは(二)「先拂」(名) 昔時、貴人外出の時、前方の行人を追ひはらひし。...

さきより

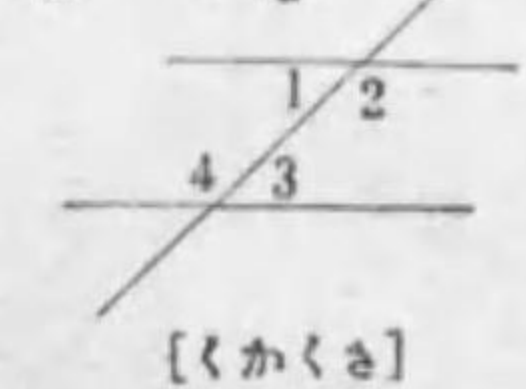
さきより(一)「座興」(名) 一延の興に入るべき藝術。又は遊戯。さきより(二)「左京」(名) 昔時、京都の朱雀大路より東の方の稱。...

さきん

さきん(一)「砂金」(名) (さきん)に同じ。さきん(二)「先」(自、さき) (先に)の音便。他人より先に行く。他人より先になる。...

さきく

さきく(一)「裂」(自、か下二) 切れ分る。さきく(二)「策簡」(名) (さきく)の音便。...



さくららーざくり

さくららーづき「櫻月」(名) 陰曆三月の具新、櫻の花の咲く頃なる故に名づく。
さくららーどき「櫻時」(名) 櫻の花の咲く頃、春の眞
さくららーのり「櫻海苔」(名) 一種、浅草海苔と同種、



〔びすわらくさ〕

ざくりーざくろ

ざくり「刺」(名) 刺ると、ざくると。
ざくり「探」(名) さぐり、刺ると、さまにいふ語。
ざくり「副」(名) さぐり、刺ると、さまにいふ語。
ざくり「副」(名) さぐり、刺ると、さまにいふ語。

ざぐわーざげ

ざぐわーざげ
は平指にして、長楕圓形若しくは倒卵形をなし、對
生若しくは散生す、花は通常紅色を呈し、果實は大
形にして中に多数の肉質の皮を具する種子を含む、

さげーさげま

類多し、清酒は蒸したる白米に物と水を加へて餘
(注)を關し、更に時を定めてこれに白米の蒸したる
ものと物と水を加ふると三度にして
關す、ささき、酒糟分を含み、飲みて
酔ふべき飲料の總稱。



〔けさ〕

さげしーさげも

さげし「み」(名) さげしむと、さげすむ、輕蔑。
さげし「む」(名) さげしむと、さげすむに同じ。
さげす「み」(名) 酒を嗜むと、又其人。
さげす「み」(名) さげすむと、けいべつ、あなどり。

ざぐもーざぐろ

ざぐもーざぐろ
ものを、官より民間にもどし渡す。
ざぐもの「提物の類」(名) 腰に提ぐるもの、即ち、
巾着又は印籠の類。

ささき [名] 同。にありてもきせん。——の「狭衣」(枕)に冠する詞。「の」をつくばねるの。
ささくら [左近] (名) ささくら木の花。——の「さくら」左近(名) 古昔、常陸殿の階下の左に植えてありし櫻。——「左近衛」(名) 「このよ」(近衛府)の條を見よ。
ささげ [名] ①「ささげ」の略。②小き竹の總稱。③「竹」の一種。丈低く、して草の如く葉生ずるもの。④「小竹」。⑤京都にて竹葉といふに出づ。酒の異稱。「こ」と。
ささげ [名] ①「ささげ」の略。②小き竹の總稱。③「竹」の一種。丈低く、して草の如く葉生ずるもの。④「小竹」。⑤京都にて竹葉といふに出づ。酒の異稱。「こ」と。
ささげ [名] ①「ささげ」の略。②小き竹の總稱。③「竹」の一種。丈低く、して草の如く葉生ずるもの。④「小竹」。⑤京都にて竹葉といふに出づ。酒の異稱。「こ」と。
ささげ [名] ①「ささげ」の略。②小き竹の總稱。③「竹」の一種。丈低く、して草の如く葉生ずるもの。④「小竹」。⑤京都にて竹葉といふに出づ。酒の異稱。「こ」と。
ささげ [名] ①「ささげ」の略。②小き竹の總稱。③「竹」の一種。丈低く、して草の如く葉生ずるもの。④「小竹」。⑤京都にて竹葉といふに出づ。酒の異稱。「こ」と。



をなすよりいふ。腹足類中前腿類に属する軟體動物。介殼は厚くして傘状をなし、外面は暗紫色にして内面は眞珠色を呈す。殻孔は大いに開き、殻の縁はなし平滑なり。唇は石灰質にして堅硬なり。我國東海より西南海にかけて多く産す。其肉は多く鹽焗にして食ふ。刺蟻。——の「あり」(榮螺尻)に遠ざかりたる秋社会にたとへいふ語。②世間「のつぼみ」(榮螺燻) (名) 一種の料理。榮螺の肉を采の目に切り醤油を加へて其介殼中に入れ、火にかけて煮ると。——「わり」(榮螺割) (名) ①「動」(動) 口中に詰めし魚、頭は方形にして面腹に似たり。背は淡茶色に微紅色を帯びて褐色の横線あり。腹部白色にして體側に紅色の斑點あり。體長三尺餘。東海より西南海にかけて産す。齒強くして榮螺を噛み割るといふより名づく。ねこさめ。
ささげ [名] ①「ささげ」の略。②小き竹の總稱。③「竹」の一種。丈低く、して草の如く葉生ずるもの。④「小竹」。⑤京都にて竹葉といふに出づ。酒の異稱。「こ」と。
ささげ [名] ①「ささげ」の略。②小き竹の總稱。③「竹」の一種。丈低く、して草の如く葉生ずるもの。④「小竹」。⑤京都にて竹葉といふに出づ。酒の異稱。「こ」と。

おんがーおんが

おんがーおんが

おんがーおんが

おんがーおんが

ささき [名] 同。にありてもきせん。——の「狭衣」(枕)に冠する詞。「の」をつくばねるの。
ささくら [左近] (名) ささくら木の花。——の「さくら」左近(名) 古昔、常陸殿の階下の左に植えてありし櫻。——「左近衛」(名) 「このよ」(近衛府)の條を見よ。
ささげ [名] ①「ささげ」の略。②小き竹の總稱。③「竹」の一種。丈低く、して草の如く葉生ずるもの。④「小竹」。⑤京都にて竹葉といふに出づ。酒の異稱。「こ」と。
ささげ [名] ①「ささげ」の略。②小き竹の總稱。③「竹」の一種。丈低く、して草の如く葉生ずるもの。④「小竹」。⑤京都にて竹葉といふに出づ。酒の異稱。「こ」と。
ささげ [名] ①「ささげ」の略。②小き竹の總稱。③「竹」の一種。丈低く、して草の如く葉生ずるもの。④「小竹」。⑤京都にて竹葉といふに出づ。酒の異稱。「こ」と。
ささげ [名] ①「ささげ」の略。②小き竹の總稱。③「竹」の一種。丈低く、して草の如く葉生ずるもの。④「小竹」。⑤京都にて竹葉といふに出づ。酒の異稱。「こ」と。

をなすよりいふ。腹足類中前腿類に属する軟體動物。介殼は厚くして傘状をなし、外面は暗紫色にして内面は眞珠色を呈す。殻孔は大いに開き、殻の縁はなし平滑なり。唇は石灰質にして堅硬なり。我國東海より西南海にかけて多く産す。其肉は多く鹽焗にして食ふ。刺蟻。——の「あり」(榮螺尻)に遠ざかりたる秋社会にたとへいふ語。②世間「のつぼみ」(榮螺燻) (名) 一種の料理。榮螺の肉を采の目に切り醤油を加へて其介殼中に入れ、火にかけて煮ると。——「わり」(榮螺割) (名) ①「動」(動) 口中に詰めし魚、頭は方形にして面腹に似たり。背は淡茶色に微紅色を帯びて褐色の横線あり。腹部白色にして體側に紅色の斑點あり。體長三尺餘。東海より西南海にかけて産す。齒強くして榮螺を噛み割るといふより名づく。ねこさめ。
ささげ [名] ①「ささげ」の略。②小き竹の總稱。③「竹」の一種。丈低く、して草の如く葉生ずるもの。④「小竹」。⑤京都にて竹葉といふに出づ。酒の異稱。「こ」と。
ささげ [名] ①「ささげ」の略。②小き竹の總稱。③「竹」の一種。丈低く、して草の如く葉生ずるもの。④「小竹」。⑤京都にて竹葉といふに出づ。酒の異稱。「こ」と。

ささき [名] 同。にありてもきせん。——の「狭衣」(枕)に冠する詞。「の」をつくばねるの。
ささくら [左近] (名) ささくら木の花。——の「さくら」左近(名) 古昔、常陸殿の階下の左に植えてありし櫻。——「左近衛」(名) 「このよ」(近衛府)の條を見よ。
ささげ [名] ①「ささげ」の略。②小き竹の總稱。③「竹」の一種。丈低く、して草の如く葉生ずるもの。④「小竹」。⑤京都にて竹葉といふに出づ。酒の異稱。「こ」と。
ささげ [名] ①「ささげ」の略。②小き竹の總稱。③「竹」の一種。丈低く、して草の如く葉生ずるもの。④「小竹」。⑤京都にて竹葉といふに出づ。酒の異稱。「こ」と。
ささげ [名] ①「ささげ」の略。②小き竹の總稱。③「竹」の一種。丈低く、して草の如く葉生ずるもの。④「小竹」。⑤京都にて竹葉といふに出づ。酒の異稱。「こ」と。
ささげ [名] ①「ささげ」の略。②小き竹の總稱。③「竹」の一種。丈低く、して草の如く葉生ずるもの。④「小竹」。⑤京都にて竹葉といふに出づ。酒の異稱。「こ」と。



おんがーおんが

おんがーおんが

おんがーおんが

おんがーおんが

おんがーおんが

さしあ

さしあひ(名) さしつかへ(名) さしわかひ(名) 又はさしに(名)の略言。
(さ) 砂嘴(名) 地砂洲が風又は潮流のために細長くのびたるもの。
(さ) 接頭(名) 或動詞に冠して、其意を強むるに用ふる語。「出す」。

さしい

さしいだ(名) さしい(名) さしい(名)
(さ) 差出(名) 差出(他、三四) いたす。出す。
(さ) 差出(名) 差出(自、下二) 出づ。
(さ) 差出(名) 差出(他、下二) 出づ。
(さ) 差出(名) 差出(自、下二) 出づ。
(さ) 差出(名) 差出(他、下二) 出づ。

さしか

さしかかり(名) さしかかり(名) さしかかり(名)
(さ) 差掛(名) 差掛(他、下二) 上より懸る。
(さ) 差掛(名) 差掛(自、下二) 上より懸る。
(さ) 差掛(名) 差掛(他、下二) 上より懸る。
(さ) 差掛(名) 差掛(自、下二) 上より懸る。

さしが

さしがね(名) さしがね(名) さしがね(名)
(さ) 差金(名) 差金(他、三四) くりあはす。
(さ) 差金(名) 差金(自、下二) くりあはす。
(さ) 差金(名) 差金(他、下二) くりあはす。
(さ) 差金(名) 差金(自、下二) くりあはす。

さしく

さしく(名) さしく(名) さしく(名)
(さ) 差毛(名) 差毛(他、三四) 送りやる。
(さ) 差毛(名) 差毛(自、下二) 送りやる。
(さ) 差毛(名) 差毛(他、下二) 送りやる。
(さ) 差毛(名) 差毛(自、下二) 送りやる。

さしき

さしき(名) さしき(名) さしき(名)
(さ) 差遣(名) 差遣(他、下二) 送りやる。
(さ) 差遣(名) 差遣(自、下二) 送りやる。
(さ) 差遣(名) 差遣(他、下二) 送りやる。
(さ) 差遣(名) 差遣(自、下二) 送りやる。



さしちがふ

(交刃、相刺) さしちがふ(他)「さしちがふ」の誤。さしちがふ(方)をあらわす。さしちがふ(他)「さしちがふ」の誤。さしちがふ(方)をあらわす。さしちがふ(他)「さしちがふ」の誤。さしちがふ(方)をあらわす。

さしづま

さしづまよりけん「指圖證券」(名)「法」受取人を指定したる証券。さしづま(名)「さしづま」の誤。さしづま(名)「さしづま」の誤。さしづま(名)「さしづま」の誤。

さしな

さしな(他)「さしなむ」の誤。さしな(副)「さしなむ」の誤。さしな(名)「さしなむ」の誤。さしな(名)「さしなむ」の誤。



〔きぬしき〕

さしは

さしは(他)「さしはむ」の誤。さしは(副)「さしはむ」の誤。さしは(名)「さしはむ」の誤。さしは(名)「さしはむ」の誤。

さしむ

さしむ(名)「さしむ」の誤。さしむ(名)「さしむ」の誤。さしむ(名)「さしむ」の誤。さしむ(名)「さしむ」の誤。



〔のもしき〕

さしや

さしや(名)「さしやむ」の誤。さしや(名)「さしやむ」の誤。さしや(名)「さしやむ」の誤。さしや(名)「さしやむ」の誤。

